



Informatica® Intelligent Cloud Services
Winter 2019 March

接続

Informatica Intelligent Cloud Services 接続
Winter 2019 March
2019年3月

© 著作権 Informatica LLC 2006, 2019

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica Cloud、Informatica Intelligent Cloud Services、PowerCenter、PowerExchange、および Informatica ロゴは、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2019-04-12

目次

序文	8
Informatica のリソース.....	8
Informatica マニュアル.....	8
Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト.....	8
Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティ.....	8
Informatica Intelligent Cloud Services マーケットプレース.....	9
データ統合コネクタのドキュメント.....	9
Informatica ナレッジベース.....	9
Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center.....	9
Informatica グローバルカスタマサポート.....	9
第 1 章 : コネクタと接続	11
アドオンコネクタ.....	11
アドオンコネクタのインストール.....	11
第 2 章 : 接続設定	13
接続の設定.....	14
第 3 章 : Data Integration 接続	16
Adobe Cloud Platform 接続のプロパティ.....	16
高度な FTP V2 接続のプロパティ.....	17
高度な FTPS V2 接続のプロパティ.....	18
高度な SFTP V2 接続のプロパティ.....	21
Amazon Aurora 接続のプロパティ.....	22
Amazon DynamoDB 接続のプロパティ.....	23
Amazon Redshift 接続のプロパティ.....	23
Amazon Redshift V2 接続のプロパティ.....	24
Amazon S3 接続のプロパティ.....	26
Amazon S3 V2 接続プロパティ.....	27
Anaplan V2 接続のプロパティ.....	29
Ariba 接続のプロパティ.....	30
AS2 接続のプロパティ.....	31
BigMachines 接続のプロパティ.....	35
Birst Cloud 接続のプロパティ.....	36
Birst 接続のプロパティ.....	36
Box 接続のプロパティ.....	37
Box OAuth 接続のプロパティ.....	38
CallidusCloud Badgeville 接続のプロパティ.....	39
CallidusCloud Commissions 接続のプロパティ.....	39
CallidusCloud File Processor 接続のプロパティ.....	40

Cassandra 接続のプロパティ	42
Chatter 接続のプロパティ	43
CMMS MVP Plant 接続のプロパティ	44
Concur V2 接続のプロパティ	44
Coupa 接続のプロパティ	45
Coupa V2 接続のプロパティ	45
Couchbase 接続のプロパティ	46
Cvent 接続のプロパティ	48
Db2 for i CDC 接続のプロパティ	48
Db2 for LUW CDC 接続のプロパティ	51
Db2 for z/OS CDC 接続のプロパティ	53
Db2 Warehouse on Cloud 接続のプロパティ	56
Domo 接続のプロパティ	57
Dropbox 接続のプロパティ	57
Doxee 接続のプロパティ	59
File List 接続のプロパティ	59
Eloqua 接続のプロパティ	60
Eloqua Bulk API 接続のプロパティ	61
Eloqua REST 接続のプロパティ	62
FileIO 接続のプロパティ	63
File Processor 接続のプロパティ	64
フラットファイル接続	65
フラットファイル接続のプロパティ	66
Linux でのフラットファイル接続のロケールの設定	67
FTP/SFTP 接続	67
FTP/SFTP 接続のプロパティ	68
FTP/SFTP 接続のルールとガイドライン	69
Google Analytics 接続のプロパティ	69
Google BigQuery 接続のプロパティ	70
接続モード	71
Google BigQuery 接続モードのルールとガイドライン	75
Google BigQuery V2 接続のプロパティ	76
接続モード	77
Google BigQuery V2 接続モードのルールとガイドライン	80
Google Cloud Spanner 接続のプロパティ	82
Google Cloud Storage 接続のプロパティ	82
Google Cloud Storage V2 接続のプロパティ	83
Google Drive 接続のプロパティ	84
Google Sheets 接続のプロパティ	84
Greenplum 接続のプロパティ	85
Hadoop ファイル接続のプロパティ	86
Cloudera CDH 5.8 または Hortonworks HDP 2.5 Hadoop ディストリビューションの使用	87

Hadoop ファイル V2 接続のプロパティ	88
Hive 接続のプロパティ	90
JDBC 接続プロパティ	91
JD Edwards EnterpriseOne 接続のプロパティ	92
JIRA 接続のプロパティ	93
JIRA Cloud 接続のプロパティ	93
JSON Target 接続のプロパティ	94
LDAP 接続のプロパティ	94
Litmos 接続のプロパティ	95
Marketo V3 接続のプロパティ	96
Microsoft Access 接続のプロパティ	97
Microsoft Azure Blob ストレージ接続のプロパティ	97
Microsoft Azure Blob ストレージ V2 接続のプロパティ	98
Microsoft Azure Blob ストレージ V3 接続のプロパティ	98
Microsoft Azure Cosmos DB SQL API 接続のプロパティ	99
Microsoft Azure Data Lake 接続のプロパティ	99
Microsoft Azure Data Lake Store V2 接続のプロパティ	100
Microsoft Azure Data Lake Store V3 接続のプロパティ	101
Microsoft Azure Data Lake Store Gen2 接続プロパティ	101
Microsoft Azure SQL Data Warehouse 接続のプロパティ	102
Microsoft Azure SQL Data Warehouse V2 接続のプロパティ	103
Microsoft Azure SQL Data Warehouse V3 接続のプロパティ	104
Microsoft Dynamics AX V3 接続のプロパティ	104
Microsoft Dynamics CRM 接続のプロパティ	105
Microsoft Dynamics NAV 接続のプロパティ	106
Microsoft Dynamics 365 for Sales 接続のプロパティ	107
Microsoft Dynamics 365 for Operations 接続のプロパティ	108
Microsoft Excel 接続のプロパティ	108
Microsoft SharePoint 接続のプロパティ	109
Microsoft Sharepoint Online 接続のプロパティ	110
Microsoft SQL Server CDC 接続のプロパティ	111
Microsoft SQL Server 接続のプロパティ	113
Microsoft TFS 接続のプロパティ	115
MongoDB 接続のプロパティ	116
MVP Plant 接続のプロパティ	118
MySQL CDC 接続のプロパティ	118
MySQL 接続のプロパティ	121
SSL プロパティ	121
Netezza 接続のプロパティ	123
NetSuite 接続のプロパティ	124
NetSuite のトークンベースの認証	127
NetSuite V2 接続のプロパティ	127

NetSuite RESTlet 接続のプロパティ	128
OData 接続のプロパティ	129
OData Consumer 接続のプロパティ	130
ODBC 接続のプロパティ	131
OpenAir 接続のプロパティ	133
Oracle 接続のプロパティ	134
Oracle CDC 接続のプロパティ	136
Oracle CDC V2 接続のプロパティ	139
Oracle CRM Cloud V1 接続のプロパティ	141
Oracle CRM On Demand 接続のプロパティ	142
Oracle E-Business Suite 接続のプロパティ	142
Oracle E-Business Suite インタフェース接続のプロパティ	143
Oracle Financials Cloud 接続のプロパティ	144
Oracle Financials Cloud V1 接続のプロパティ	146
Oracle HCM Cloud V1 接続のプロパティ	148
Oracle HCM Cloud 接続のプロパティ	150
Oracle HCM Cloud V1 接続のプロパティ	152
OrangeHRM 接続のプロパティ	154
PostgreSQL 接続のプロパティ	155
Power BI 接続のプロパティ	156
Qlik 接続のプロパティ	157
REST V2 接続のプロパティ	157
Salesforce Analytics 接続のプロパティ	160
Salesforce 接続のプロパティ	160
Salesforce Marketing Cloud 接続のプロパティ	161
SAP BW BEx クエリ接続のプロパティ	162
SAP BW Reader 接続のプロパティ	163
SAP IDoc Reader 接続のプロパティ	165
SAP IDoc Writer 接続のプロパティ	165
SAP RFC/BAPI インタフェース接続のプロパティ	166
SAP テーブル接続のプロパティ	167
SuccessFactors ODATA 接続のプロパティ	168
SuccessFactors SOAP 接続のプロパティ	169
Satmetrix 接続のプロパティ	169
ServiceNow 接続のプロパティ	170
Snowflake 接続プロパティ	170
SugarCRM REST 接続のプロパティ	171
Tableau V2 接続のプロパティ	172
Tableau V3 接続のプロパティ	173
Teradata 接続のプロパティ	174
ThoughtSpot 接続のプロパティ	176
Twitter 接続のプロパティ	176

UltiPro 接続のプロパティ.....	177
Web サービス V2 接続のプロパティ.....	178
Workday V2 接続のプロパティ.....	180
Xactly 接続のプロパティ.....	181
XML ソース接続のプロパティ.....	181
XML ターゲット接続のプロパティ.....	182
Zendesk 接続のプロパティ.....	182
Zuora AQuA 接続のプロパティ.....	183
Zuora 接続のプロパティ.....	184
Zuora REST V2 接続のプロパティ.....	185
Zuora マルチエンティティ接続のプロパティ.....	186
第 4 章 : REST V2 接続用の Swagger ファイルの生成.....	187
Swagger ファイルの生成.....	187
索引.....	190

序文

『接続』では、Informatica Intelligent Cloud Services とクラウドやオンプレミスのアプリケーション、プラットフォーム、データベース、およびフラットファイルの間に接続を設定する方法を説明します。

Informatica のリソース

Informatica は、Informatica Network やその他のオンラインポータルを通じてさまざまな製品リソースを提供しています。リソースを使用して Informatica 製品とソリューションを最大限に活用し、その他の Informatica ユーザーや各分野の専門家から知見を得ることができます。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルポータルでは、最新および最近の製品リリースに関するドキュメントの膨大なライブラリを参照できます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

Informatica はマニュアルポータルに加えて、Informatica ナレッジベースでも多くの製品に関するドキュメントを管理しています。マニュアルポータルで製品または製品バージョンに関するマニュアルが見つからない場合は、<https://search.informatica.com> でナレッジベースを検索してください。

製品マニュアルに関する質問、コメント、ご意見については、Informatica マニュアルチーム (infa_documentation@informatica.com) までご連絡ください。

Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト

Informatica Intelligent Cloud Services Web サイト (<http://www.informatica.com/cloud>) にアクセスできます。このサイトは、データ統合エディションおよびアプリケーションについての情報に加え、他の Informatica Cloud 統合サービスについての情報を記載しています。

Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティ

Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティを使用して、技術的な問題について議論し、解決します。また、技術的なヒント、マニュアルの更新情報、FAQ（よくある質問）への答えを得ることもできます。

次の Informatica Intelligent Cloud Services コミュニティにアクセスします。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/products/cloud-integration>

アプリケーションの統合（Informatica Cloud Real Time サービス）の使用方法に関するリソースを検索するには、次のコミュニティにアクセスしてください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/products/cloud-integration/cloud-application-integration/content>

開発者は、次の Cloud 開発者コミュニティで詳細情報を確認したり、ヒントを共有したりできます。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/products/cloud-integration/cloud-developers>

Informatica Intelligent Cloud Services マーケットプレイス

Informatica マーケットプレイスにアクセスすると、データ統合コネクタ、テンプレート、およびマップレットを試用したり購入したりできます。

https://marketplace.informatica.com/community/collections/cloud_integration

データ統合コネクタのドキュメント

データ統合コネクタのドキュメントには、マニュアルポータルからアクセスできます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

Informatica ナレッジベース

Informatica ナレッジベースを使用して、ハウツー記事、ベストプラクティス、よくある質問に対する回答など、製品リソースを見つけることができます。

ナレッジベースを検索するには、<https://search.informatica.com> にアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center は、Informatica のセキュリティポリシーおよびリアルタイムでのシステムの可用性について情報を提供します。

Trust Center (<https://www.informatica.com/trust-center.html>) にアクセスします。

Informatica Intelligent Cloud Services Trust Center にサブスクライブして、アップグレード、メンテナンス、およびインシデントの通知を受信します。[Informatica Intelligent Cloud Services Status](#) ページには、すべての Informatica Cloud 製品の実稼働ステータスが表示されます。メンテナンスの更新はすべてこのページに送信され、停止中は最新の情報が表示されます。更新と停止の通知がされるようにするには、Informatica Intelligent Cloud Services の 1 つのコンポーネントまたはすべてのコンポーネントについて更新の受信をサブスクライブします。すべてのコンポーネントにサブスクライブするのが、更新を逃さないようにするための最良の方法です。

サブスクライブするには、[Informatica Intelligent Cloud Services Status](#) ページに移動して **【更新をサブスクライブ】** をクリックします。その後、電子メール、SMS テキストメッセージ、Webhook、RSS フィードとして、またはこの 4 つを任意に組み合わせて送信された通知を受信することを選択ができます。

Informatica グローバルカスタマサポート

電話またはオンラインでカスタマサポートセンターに連絡できます。

オンラインサポートについては、Informatica Intelligent Cloud Services の **【サポート要求の送信】** をクリックしてください。またオンラインサポートを使用して問題を記録することもできます。オンラインサポートを利用するには、ログインが必要です。<https://network.informatica.com/welcome> でログイン要求できます。

Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica の Web サイト <https://www.informatica.com/services-and-training/support-services/contact-us.html> に掲載されています。

第 1 章

コネクタと接続

接続は、クラウドとオンプレミスのアプリケーション、プラットフォーム、データベース、およびフラットファイルのデータへのアクセスを提供します。タスクに含まれるソース、ルックアップオブジェクト、およびターゲットの場所を指定します。

コネクタを使用すると接続を作成できます。Informatica Intelligent Cloud Services にインストールされているコネクタの接続を作成できます。多くのコネクタはプレインストールされています。ただし、Informatica または Informatica パートナーによって作成されたアドオンコネクタをインストールすることによって、プレインストールされていないコネクタを使用することもできます。

アドオンコネクタ

アドオンコネクタは、Informatica Intelligent Cloud Services にはデフォルトでインストールされていない接続タイプの接続性を提供します。

アドオンコネクタをインストールすると、このコネクタは組織およびすべてのサブ組織で接続タイプとして利用可能になります。ユーザーはこのタイプの接続を作成し、タスクで使用できます。一部のコネクタは使用前に設定する必要があります。

組織にサブ組織が含まれる場合は、親組織にアドオンコネクタをインストールします。サブ組織にアドオンコネクタをインストールすることはできません。サブ組織が親組織で利用可能なコネクタを使用しない場合、サブ組織のコネクタライセンスを無効にします。

個別のコネクタの詳細については、適切なコネクタガイドを参照してください。

まだ利用できないコネクタに対する要望がある場合、またはコネクタの構築についての情報が必要な場合は、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。

アドオンコネクタのインストール

Informatica Intelligent Cloud Services のアドオンコネクタの無料トライアル版をインストールしたり、Informatica からコネクタを購入したりできます。アドオンコネクタをインストールすると、このコネクタは組織およびすべてのサブ組織で接続タイプとして利用可能になります。

注: サブ組織で使用するアドオンコネクタをインストールする場合は、このコネクタを親組織にインストールします。アドオンコネクタはサブ組織にインストールできません。

1. 管理者で **[アドオンコネクタ]** を選択します。
2. 次のいずれかの手順に従います。

- Informatica Intelligent Cloud Services の無料トライアル版を起動するには、コネクタの **【無料トライアル】** をクリックし、無料トライアル版の起動を確認します。
- 有効期限の切れた無料トライアル版のコネクタのライセンスを購入するには、**【お問い合わせ】** をクリックします。

Informatica の担当者から連絡があります。

コネクタをインストールすると、**【アドオンコネクタ】** ページに **【使用可能なコネクタ】** メッセージが表示され、接続タイプが組織およびサブ組織で使用できるようになります。接続タイプでは、「Teradata (Informatica Cloud)」など、命名規則に<コネクタ名> (<パブリッシャ名>) が使用されます。

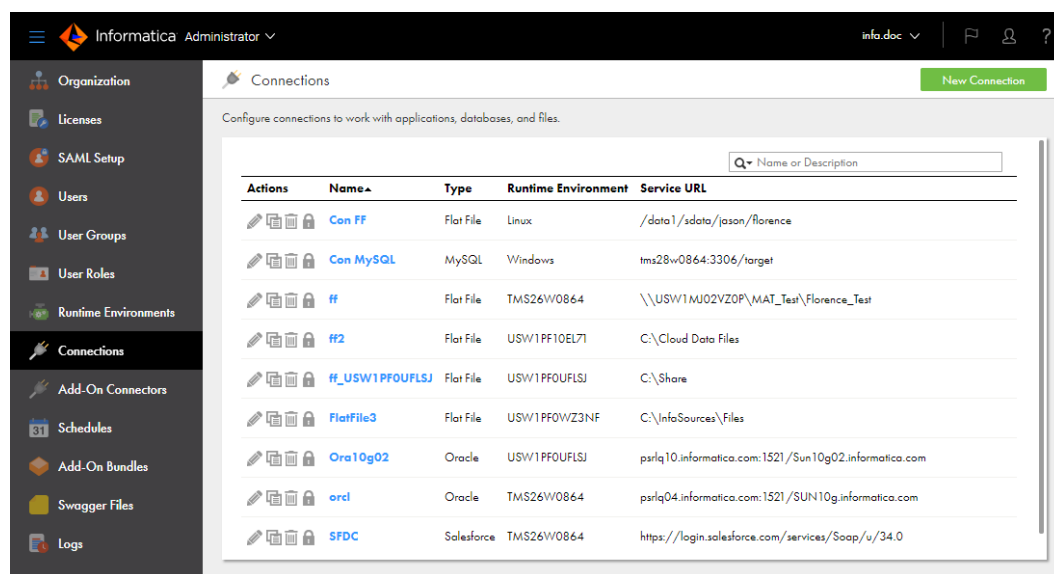
第 2 章

接続設定

接続を設定すると、この接続が組織内で利用可能になります。サブ組織を使用していて、複数の組織で接続を利用可能にするには、各組織でこの接続を作成します。

【接続】 ページで接続を設定します。**【接続】** ページには、組織で設定されているすべての接続のリストが表示されます。このページで、接続を作成できます。名前または説明、名前のみ、または説明のみで既存の接続を検索することもできます。

次の図は、**【接続】** ページを示しています。



ほとんどの接続タイプで接続を設定する場合は、接続のランタイム環境を指定します。ランタイム環境には実行中のエージェントを含める必要があります。その他の接続タイプの場合は、タスクの設定時にランタイム環境を指定します。

データベースに対する接続を設定できます。データベースに対するソース接続を作成する際には、データベースのテーブル、エイリアス、またはビューに対する接続を作成します。データベースに対するターゲット接続を作成する際には、データベーステーブルに対する接続を作成します。

マッピングまたはタスクでソースとターゲットの接続を設定する場合は、コードページが同じであることを確認します。タスクのソースシステムとターゲットシステムが異なるコードページを使用している場合、Informatica Intelligent Cloud Services はターゲットに予期しないデータをロードする可能性があります。

保存したクエリまたはタスクで接続が使用されていない限り、作成した接続を削除できます。

接続の設定

マッピングまたはタスクを設定する場合は、管理者またはウィザードの【接続】ページで接続を設定できます。

1. 次のいずれかの手順に従います。
 - 管理者で【接続】を選択します。
 - データ統合のマッピングまたはタスクで、ソース、ターゲット、またはルックアップオブジェクトを開きます。
2. 【新しい接続】をクリックします。
3. 次の接続の詳細を設定します。

プロパティ	説明
接続名	接続の名前。 各接続名は組織内で一意である必要があります。接続名には、英数字、スペース、および次の特殊文字を含めることができます。_ . + - 最大長は 100 文字です。接続名では大文字と小文字は区別されません。
説明	接続の説明。 最大長は 255 文字です。
タイプ	Salesforce や Oracle などの接続のタイプ。

4. 接続固有のプロパティを設定します。

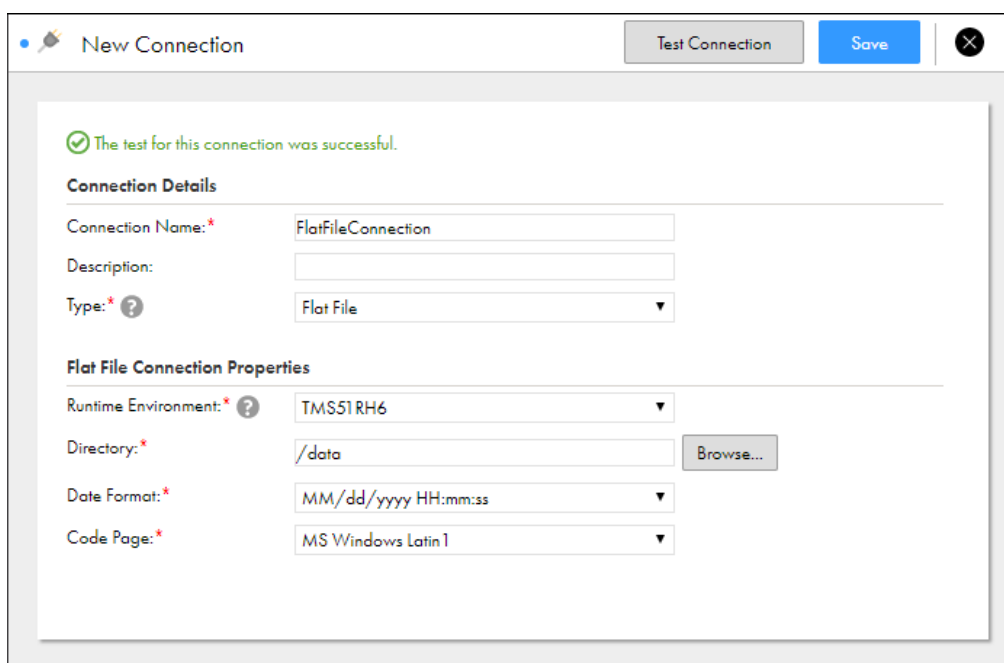
例えば、フラットファイル接続を設定する場合は、接続で使用するランタイム環境、ファイルの保存先ディレクトリ、ファイルの日付フィールドの日付形式、ファイルをホストするシステムのコードページを入力します。

次の画像は、フラットファイル接続のプロパティを示しています。

The screenshot shows a 'New Connection' dialog box with the following fields and values:

- Connection Name:** FlatFileConnection
- Description:** (empty)
- Type:** Flat File
- Flat File Connection Properties:**
 - Runtime Environment:** Select...
 - Directory:** (empty) with a 'Browse...' button
 - Date Format:** MM/dd/yyyy HH:mm:ss
 - Code Page:** (empty)

5. 接続をテストするには、**【テスト接続】** をクリックします。
次の画像に示すとおり、テスト結果がページに表示されます。



The screenshot shows a 'New Connection' dialog box with a success message: 'The test for this connection was successful.' Below the message, there are two sections: 'Connection Details' and 'Flat File Connection Properties'. The 'Connection Details' section includes fields for 'Connection Name' (FlatFileConnection), 'Description', and 'Type' (Flat File). The 'Flat File Connection Properties' section includes fields for 'Runtime Environment' (TMS51RH6), 'Directory' (/data), 'Date Format' (MM/dd/yyyy HH:mm:ss), and 'Code Page' (MS Windows Latin 1). There is a 'Browse...' button next to the 'Directory' field. At the top right of the dialog, there are buttons for 'Test Connection', 'Save', and a close button.

データベース接続に失敗する場合は、データベース管理者にお問い合わせください。

6. **【保存】** をクリックして接続を保存します。

第 3 章

Data Integration 接続

接続を設定する際には、接続の接続プロパティを指定します。接続プロパティによって、データソースに接続するためのエージェントが有効になります。

Informatica Intelligent Cloud Services にインストールされているコネクタの接続を作成できます。

Adobe Cloud Platform 接続のプロパティ

Adobe Cloud Platform 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

Adobe Cloud Platform では、JWT ベースの認証を使用します。サービスアカウント統合を設定する必要があります。サービスアカウントはユーザーアカウントと類似していますが、アプリケーションに固有であり、追加のセキュリティ要件があります。

統合用のアクセストークンを取得するには、まず、クライアント資格情報をカプセル化する JSON Web Token (JWT) を作成する必要があります。各 API セッションについて、Adobe IMS からアクセストークン用の JWT を交換できます。このトークンによって統合が認識され、設定したサービスへのアクセス権が付与されます。

サービスアカウント統合の詳細については、Adobe のマニュアルを参照してください。

次の表に、Adobe Cloud Platform 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
env	Adobe Cloud Platform 環境。Prod を選択します。
imsOrg	Adobe Identity Management System (IMS) 組織の ID。
privateKeyPath	Secure Agent のプライベートキーのパス。 例: file:///etc/secrets/secret.key
clientID	有効なアクセストークンを生成するために必要な Adobe Cloud Platform のクライアント ID。
clientSecret	有効なアクセストークンを生成するために必要な Adobe Cloud Platform のクライアント秘密鍵。
accountID	Adobe Cloud Platform のアカウント ID。

高度な FTP V2 接続のプロパティ

高度な FTP V2 接続をセットアップするには、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、高度な FTP V2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続の名前。この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。このプロパティは、接続を作成した後に変更できます。名前は 128 文字以内で指定し、空白および以下の特殊文字は使用できません。~`!\$%^&*()-+={[}] \:;'"<, >./?
説明	オプション。接続の説明。説明は、4,000 文字を超えることはできません。
タイプ	[高度な FTP V2] 接続タイプを選択します。
ランタイム環境	タスクを実行する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。
ホスト	FTP サーバーのホスト名または IP アドレス。
ポート	FTP サーバーへの接続に使用するためのポート番号。空白のままにすると、デフォルトのポート番号は 21 になります。
ユーザー名	FTP サーバーに接続するためのユーザー名。
パスワード	FTP サーバーに接続するためのパスワード。
フォルダパス	FTP サーバーへの接続後に使用するディレクトリ。
パッシブモードを使用	接続が パッシブ または アクティブ のどちらのモードを使用しているかを示します。 パッシブ モードを使用するには [はい] を指定します。 アクティブ モードを使用するには [いいえ] を指定します。 デフォルト値は [はい] です。 アクティブモードでは、サーバーはデータ転送を実行するために接続クライアント上のポートに接続しようとします。 パッシブモードでは、サーバーは接続クライアント上のポートに接続する必要はなく、ファイアウォールに優しいモードです。そのため、サーバーへの接続に問題がある場合は、このオプションで [はい] を選択して、モードをパッシブに変更することができます。
データ接続の開始ポート	データ接続に使用する開始ポート番号。
データ接続の終了ポート	データ接続に使用する終了ポート番号。
タイムアウト	サーバーへの接続を試行するときに待機する秒数。指定した時間内に接続を確立できない場合、タイムアウトになります。空白のままにすると、デフォルトのタイムアウトは 120 秒になります。

接続プロパティ	説明
接続の再試行	接続を確立できない場合に FTP 接続の再試行のために接続する回数。この設定は、最初の接続と接続の切断による再接続の試行の両方に使用されます。空白のままにすると、再試行は行われません。
接続再試行の間隔	接続の再試行ごとに待機する秒数。 注: 例えば、再試行ごとに 5 秒間空けて最大 10 回接続しようとする場合は、 接続の再試行回数 に 10 を指定し、 接続再試行の間隔 に 5 を指定します。
制御エンコーディング	空白のままにすると、接続では ISO 標準 ISO-8859-1 が使用されます。サーバーでサポートされている場合は、UTF-8 のような他のエンコーディングを指定すると、国際文字をサポートできます。
リストパーサー	サーバー接続に使用するリストパーサー。フィールドが空白のままの場合、高度な FTP V2 コネクタは MLSD パーサーを使用しようとします。MLSD パーサーがサーバーでサポートされていない場合は、UNIX パーサーが使用されます。ディレクトリのリストに問題が発生した場合は、別のリストパーサーを選択します。
日付形式	この日付形式は、サーバーが選択したリストパーサーのデフォルト値と異なる日付を返す場合に適用されます。別の日付形式 (d MMM yyyy など) が必要な場合は、このフィールドで日付形式を指定します。すべてのリストパーサーが日付形式の設定をサポートしているわけではありません。日付形式設定をサポートしていないリストパーサーは、ユーザーが指定した値を無視します。
最近の日付形式	各ファイルの最終更新日を解析する場合に使用する日付形式を指定します。最近の日付形式は UNIX ベースのシステムで適用され、1 年未満のエントリに表示されます。特定の日付形式 (d MMM HH:mm など) が必要な場合は、このフィールドでそのパターンを指定します。すべてのリストパーサーが最近の日付形式設定をサポートしているわけではありません。最近の日付形式設定をサポートしていないリストパーサーは、ユーザーが指定した値を無視します。

高度な FTPS V2 接続のプロパティ

高度な FTPS V2 接続をセットアップするには、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、高度な FTPS V2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続の名前。この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。このプロパティは、接続を作成した後に変更できます。名前は 128 文字以内で指定し、空白および以下の特殊文字は使用できません。~`!\$%^&*()-+={[] \:;'"<, >. ? /
説明	オプション。接続の説明。説明は、4,000 文字を超えることはできません。
タイプ	[高度な FTPS V2] 接続タイプを選択します。
ランタイム環境	タスクを実行する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。

接続プロパティ	説明
ホスト	サーバーのホスト名または IP アドレス。
ポート	サーバーへの接続に使用するためのポート番号。空白のままにすると、デフォルトのポート番号は 21 になります。
ユーザー名	FTPS サーバーに接続するためのユーザー名。
パスワード	FTPS サーバーに接続するためのパスワード。
フォルダパス	サーバーへの接続後に使用するディレクトリ。
パッシブモードを使用	<p>接続がパッシブまたはアクティブのどちらのモードを使用しているかを示します。パッシブモードを使用するには 【はい】 を指定します。アクティブモードを使用するには 【いいえ】 を指定します。</p> <p>デフォルト値は 【はい】 です。</p> <p>アクティブモードでは、サーバーはデータ転送を実行するために接続クライアント上のポートに接続しようとします。</p> <p>パッシブモードでは、サーバーは接続クライアント上のポートに接続する必要はなく、ファイアウォールに優しいモードです。そのため、サーバーへの接続に問題がある場合は、このオプションで 【はい】 を選択して、モードをパッシブに変更することができます。</p>
データ接続の開始ポート	データ接続に使用する開始ポート番号。
データ接続の終了ポート	データ接続に使用する終了ポート番号。
タイムアウト	サーバーへの接続を試行するときに待機する秒数。指定した時間内に接続を確立できない場合、タイムアウトになります。空白のままにすると、デフォルトのタイムアウトは 120 秒になります。
接続の再試行	接続を確立できない場合に高度な FTP V2 接続の再試行のために接続する回数。この設定は、最初の接続と接続の切断による再接続の試行の両方に使用されます。空白のままにすると、再試行は行われません。
接続再試行の間隔	<p>接続の再試行ごとに待機する秒数。</p> <p>注: 例えば、再試行ごとに 5 秒間空けて最大 10 回接続しようとする場合は、接続の再試行回数に 10 を指定し、接続再試行の間隔に 5 を指定します。</p>
制御エンコーディング	空白のままにすると、接続では ISO 標準 ISO-8859-1 が使用されます。サーバーでサポートされている場合は、UTF-8 のような他のエンコーディングを指定すると、国際文字をサポートできます。
信頼済みサーバー	FTPS サーバーが信頼済みサーバーであるかどうかを指定します。高度な FTP V2 コネクタは、信頼済みサーバーのみをサポートします。
リストパーサー	サーバー接続に使用するリストパーサー。フィールドが空白のままの場合、高度な FTP V2 コネクタは MLSD パーサーを使用しようとします。サーバーが MLSD パーサーをサポートしていない場合、コネクタは UNIX パーサーを使用します。ディレクトリのリストに問題が発生した場合は、別のリストパーサーを選択します。

接続プロパティ	説明
日付形式	この日付形式は、サーバーが選択したリストパーサーのデフォルト値と異なる日付を返す場合に適用されます。別の日付形式 (d MMM yyyy など) が必要な場合は、このフィールドで日付形式を指定します。すべてのリストパーサーが日付形式の設定をサポートしているわけではありません。日付形式設定をサポートしていないリストパーサーは、ユーザーが指定した値を無視します。
最近の日付形式	各ファイルの最終更新日を解析する場合に使用する日付形式を指定します。最近の日付形式は UNIX ベースのシステムで適用され、1 年未満のエントリに表示されます。特定の日付形式 (d MMM HH: mm など) が必要な場合は、このフィールドでそのパターンを指定します。すべてのリストパーサーが最近の日付形式設定をサポートしているわけではありません。最近の日付形式設定をサポートしていないリストパーサーは、ユーザーが指定した値を無視します。
接続タイプ	接続タイプが IMPLICIT_SSL または EXPLICIT_SSL のどちらであるかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> - IMPLICIT_SSL。接続は自動的に SSL 接続として開始されます。 - EXPLICIT_SSL。FTPS サーバーでの初期認証後、選択したセキュリティプロトコルに応じて、接続は SSL または TLS で暗号化されます。 デフォルトは IMPLICIT_SSL です。
セキュリティプロトコル	EXPLICIT_SSL 接続に SSL または TLS のどちらが使用されるかを指定します。 デフォルトは SSL です。
キーストアファイル	キーストアファイルのパスおよびファイル名。キーストアファイルには、FTPS サーバーを認証するための証明書が含まれます。
キーストアのパスワード	信頼済みサーバーの証明書ストアにアクセスするために必要なキーストアファイルのパスワード。
キーエイリアス	個別のキーのエイリアス。
キーストアタイプ	キーストアのタイプが Java KeyStore (JKS) または Public Key Cryptology Standard (PKCS12) のどちらであるかを指定します。 デフォルトは JKS です。

高度な SFTP V2 接続のプロパティ

高度な SFTP V2 接続をセットアップするには、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、高度な SFTP V2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続の名前。この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。このプロパティは、接続を作成した後に変更できます。名前は 128 文字以内で指定し、空白および以下の特殊文字は使用できません。~`!\$%^&*()-+={[}] \:;"'<, >. ? /
説明	オプション。接続の説明。説明は、4,000 文字を超えることはできません。
タイプ	[高度な SFTP V2] 接続タイプを選択します。
ランタイム環境	タスクを実行する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。
ホスト	サーバーのホスト名または IP アドレス。
ポート	サーバーへの接続に使用するためのポート番号。空白のままにすると、デフォルトのポート番号は 21 になります。
ユーザー名	SFTP サーバーに接続するためのユーザー名。
パスワード	SFTP サーバーに接続するためのパスワード。
フォルダパス	サーバーへの接続後に使用するディレクトリ。
タイムアウト	サーバーへの接続を試行するときに待機する秒数。指定した時間内に接続を確立できない場合、タイムアウトになります。空白のままにすると、デフォルトのタイムアウトは 120 秒になります。
接続の再試行	接続を確立できない場合に SFTP 接続の再試行のために接続する回数。この設定は、最初の接続と接続の切断による再接続の試行の両方に使用されます。空白のままにすると、再試行は行われません。
接続再試行の間隔	接続の再試行ごとに待機する秒数。 注: 例えば、再試行ごとに 5 秒間空けて最大 10 回接続しようとする場合は、 接続の再試行回数 に 10 を指定し、 接続再試行の間隔 に 5 を指定します。
プライベートキーファイル	SSH プライベートキーファイルの名前と、ファイルが保存されている場所へのパス。ファイルパスが、Secure Agent をホストするマシン上にあることを確認します。 例: C:/SSH/my_keys/key.ppk
プライベートキーパスフレーズ	SSH プライベートキーを暗号化するためのパスフレーズを指定します。

Amazon Aurora 接続のプロパティ

Amazon Aurora 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Amazon Aurora 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	Amazon Aurora にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
ホスト	Amazon Aurora サーバーのホスト名。 例: xyzcloud-cluster.cluster-cj8irztl1mku.us-west-2.rds.amazonaws.com
ポート	Amazon Aurora ディレクトリサーバーのポート番号。
データベース名	Amazon Aurora データベースの名前。
コードページ	接続に定義されているデータベースサーバーのコードページ。 次のいずれかのコードページを選択します。 <ul style="list-style-type: none">- MS Windows Latin1- UTF-8- Shift-JIS- ISO 8859-15 Latin 9 (Western European)。- ISO 8859-2 Eastern European。- ISO 8859-3 Southeast European。- ISO 8859-5 Cyrillic。- ISO 8859-9 Latin 5 (Turkish)。- IBM EBCDIC International Latin-1。
メタデータの 詳細接続プロ パティ	メタデータを取得するために、JDBC ドライバのオプションのプロパティを設定する値。 以下に例を示します。 <code>connectTimeout=180000</code> メタデータの詳細接続プロパティの詳細については、 https://mariadb.com/kb/en/mariadb/about-mariadb-connector-j/ を参照してください。
ランタイムの 詳細接続プロ パティ	ODBC ランタイムドライバのオプションのプロパティを設定する値。 以下に例を示します。 <code>charset=sjis;readtimeout=180</code> ランタイムの詳細接続プロパティの詳細については、 https://mariadb.com/kb/en/mariadb/about-mariadb-connector-odbc/ を参照してください。
ユーザー名	Amazon Aurora アカウントのユーザー名。
パスワード	Amazon Aurora アカウントのパスワード。

Amazon DynamoDB 接続のプロパティ

Amazon DynamoDB 接続をセットアップするには、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、AmazonDynamoDB 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
アクセスキー	Amazon アカウントリソースへのアクセスに使用するアクセスキー ID。 注: 接続を作成する前に有効な AWS 資格情報を所有していることを確認してください。
秘密鍵	Amazon アカウントリソースへのアクセス時に使用するシークレットアクセスキー。この値はアクセスキーに関連付けられており、アカウントを一意に識別します。
リージョン	アカウントに関連付けられている AWS リージョン。

Amazon Redshift 接続のプロパティ

Amazon Redshift 接続をセットアップするには、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Amazon Redshift 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	Amazon Redshift アカウントのユーザー名。
パスワード	Amazon Redshift アカウントのパスワード。
スキーマ	Amazon Redshift スキーマ名。 デフォルトは public です。
AWS アクセスキー ID	オプション。Amazon S3 バケットアクセスキー ID。 EC2 システムにインストールされた Secure Agent でタスクを実行するには、アクセスキー ID を空欄にする必要がある場合があります。 EC2 システムにインストールされたのでない Secure Agent でタスクを実行するには、アクセスキー ID を指定する必要があります。
AWS シークレットアクセスキー	オプション。Amazon S3 バケットシークレットアクセスキー ID。 EC2 システムにインストールされた Secure Agent でタスクを実行するには、シークレットアクセスキーを空欄にする必要がある場合があります。 EC2 システムにインストールされたのでない Secure Agent でタスクを実行するには、シークレットアクセスキーを指定する必要があります。
マスタ対称キー	オプション。Amazon S3 暗号化キー。 256 ビット AES 暗号化キーを Base64 形式で指定します。

接続プロパティ	説明
顧客マスタキー ID	オプション。AWS Key Management Service (AWS KMS) によって生成された顧客マスタキー ID またはエイリアス名を指定します。Amazon S3 バケットが存在するリージョンの顧客マスタキー ID を生成する必要があります。顧客が生成した顧客マスタキー ID またはデフォルトの顧客マスタキー ID を指定できます。
JDBC URL	Amazon Redshift 接続 URL。
Varchar 用のマルチバイトをサポートするために必要なバイト数	[ターゲットの作成] に適用されます。ソーステーブルの Varchar 精度を参照して、ソース精度の 1x/2x/3x/4x 倍のターゲットテーブルを作成し、ターゲットテーブルにマルチバイト文字が正常に書き込めるようにします。 注: Varchar 精度が、最大である 65535 を超えている場合、ターゲットテーブルは作成できません。

注: 接続をテストすると、Secure Agent が Redshift 接続を検証します。AWS アクセスキーと AWS 秘密鍵の検証には、Amazon S3 バケット名が高度なソースおよびターゲットのプロパティ内に指定されている必要があります。そのため、Secure Agent は、同期またはマッピングタスクの実行時に、AWS アクセスキーと AWS 秘密鍵を検証します。

Amazon Redshift V2 接続のプロパティ

Amazon Redshift V2 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Amazon Redshift V2 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	Amazon Redshift アカウントのユーザー名。
パスワード	Amazon Redshift アカウントのパスワード。
AWS アクセスキー ID	Amazon S3 バケットにアクセスするためのアクセスキー。
AWS シークレットアクセスキー	Amazon S3 バケットにアクセスするためのシークレットアクセスキー。

接続プロパティ	説明
マスタ対称キー	オプション。クライアントサイド暗号化を有効にする場合に、256ビットのAES暗号化キーをBase64形式で指定します。暗号化キーは、サードパーティ製ツールを使用して生成できます。
顧客マスタキーID	オプション。AWS Key Management Service (AWS KMS) によって生成された顧客マスタキーIDまたはエイリアス名を指定します。 Amazon S3 バケットが存在するリージョンの顧客マスタキーIDを生成する必要があります。顧客が生成した顧客マスタキーIDまたはデフォルトの顧客マスタキーIDを指定できます。
JDBC URL	Amazon Redshift V2 接続の URL。 次の形式で JDBC URL を入力します。jdbc:redshift:// <database_name><cluster_name>.<region_name>.redshift.amazonaws.com:<port_number>/<database_name>
クラスターリージョン	<p>オプション。アクセスするバケットが存在する AWS クラスターリージョンです。</p> <p>[JDBC URL] 接続プロパティで指定したカスタム JDBC URL にクラスターリージョン名が含まれていない場合にクラスターリージョンを選択します。</p> <p>[クラスターリージョン] と [JDBC URL] の両方の接続プロパティでクラスターリージョンを指定した場合、[JDBC URL] 接続プロパティで指定したクラスターリージョンは無視されます。</p> <p>[JDBC URL] 接続プロパティで指定したクラスターリージョン名を使用するには、このプロパティでクラスターリージョンとして【なし】を選択します。</p> <p>次のいずれかのクラスターリージョンを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - なし - アジアパシフィック (ムンバイ) - アジアパシフィック (ソウル) - アジアパシフィック (シンガポール) - アジアパシフィック (シドニー) - アジアパシフィック (東京) - AWS GovCloud (米国) - カナダ (中部) - 中国 (北京) - 中国 (寧夏) - 欧州 (アイルランド) - 欧州 (フランクフルト) - 欧州 (パリ) - 南米 (サンパウロ) - 米国東部 (バージニア北部) - 米国東部 (オハイオ) - 米国西部 (北カリフォルニア) - 米国西部 (オレゴン) <p>デフォルトは【なし】です。コネクタが使用する AWS SDK によってサポートされるクラスターリージョンに対してのみ、データの読み取りと書き込みを行うことができます。</p>

Amazon S3 接続のプロパティ

Amazon S3 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Amazon S3 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
アクセスキー	Amazon アカウントリソースへのアクセスに使用するアクセスキー ID。AWS Identity and Access Management (IAM) 認証を使用しない場合は必須です。 注: 接続を作成する前に有効な AWS 資格情報を所有していることを確認してください。
秘密鍵	Amazon アカウントリソースへのアクセス時に使用するシークレットアクセスキー。 この値はアクセスキーに関連付けられており、アカウントを一意に識別します。アクセスキー ID を指定する場合は、この値を指定する必要があります。AWS Identity and Access Management (IAM) 認証を使用しない場合は必須です。
フォルダパス	Amazon S3 オブジェクトへの完全なパス。バケット名と任意のフォルダ名が含まれている必要があります。フォルダパスの末尾にスラッシュを使用しないでください。例: <バケット名>/<フォルダ名>
マスタ対称キー	オプション。クライアントサイド暗号化を有効にする場合に、256 ビットの AES 暗号化キーを Base64 形式で指定します。暗号化キーは、サードパーティ製ツールを使用して生成できます。 この値を指定する場合は、[スケジュール] ページの詳細ターゲットプロパティで、暗号化タイプとしてクライアントサイド暗号化を指定してください。

接続プロパティ	説明
コードページ	<p>Amazon S3 ソースと互換性のあるコードページ。次のいずれかのコードページを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - MS Windows Latin 1。ISO 8859-1 Western European データの場合に選択します。 - UTF-8。Unicode および Unicode 以外のデータの場合に選択します。 - Shift-JIS。ダブルバイト文字データの場合に選択します。 - ISO 8859-15 Latin 9 (Western European)。 - ISO 8859-2 Eastern European。 - ISO 8859-3 Southeast European。 - ISO 8859-5 Cyrillic。 - ISO 8859-9 Latin 5 (Turkish)。 - IBM EBCDIC International Latin-1。
リージョン名	<p>Amazon S3 バケットが使用可能で、顧客マスタキー ID を生成したリージョンの名前を指定します。次のいずれかのリージョンを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - アジアパシフィック (東京) - アジアパシフィック (ソウル) - アジアパシフィック (シンガポール) - アジアパシフィック (シドニー) - AWS GovCloud - 中国 (北京) - 欧州 (アイルランド) - 欧州 (フランクフルト) - 南米 (サンパウロ) - 米国東部 (バージニア北部) - 米国西部 (北カリフォルニア) - 米国西部 (オレゴン) - 米国東部 (オハイオ) - カナダ (中部) - アジアパシフィック (ムンバイ) <p>Amazon S3 コネクタが使用する AWS SDK によってサポートされるリージョンに対してのみ、データの読み取り/書き込みを行うことができます。</p>

Amazon S3 V2 接続プロパティ

Amazon S3 V2 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Amazon S3 V2 接続プロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	<p>接続の名前。</p> <p>この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。このプロパティは、接続を作成した後に変更できます。名前は 128 文字以内で指定し、空白および次の特殊文字は使用できません。~`!\$%^&*()-+={[}] \:;'"<, >. ? /</p>
説明	<p>オプション。接続の説明。</p> <p>説明は、4,000 文字を超えることはできません。</p>
タイプ	Amazon S3 V2 接続タイプ。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
アクセスキー	Amazon S3 バケットにアクセスするためのアクセスキー。
秘密鍵	Amazon S3 バケットにアクセスするためのシークレットアクセスキー。 秘密鍵はアクセスキーに関連付けられており、アカウントを一意に識別します。
フォルダパス	Amazon S3 オブジェクトへのバケット名または完全なフォルダパス。 フォルダパスの末尾にスラッシュを使用しないでください。例: <バケット名>/<フォルダ名>。
マスタ対称キー	オプション。クライアントサイド暗号化を有効にする場合に、256 ビットの AES 暗号化キーを Base64 形式で指定します。暗号化キーは、サードパーティ製ツールを使用して生成できます。 注: マスタ対称キーを使用する場合は、既存の JCE ファイルを Secure Agent のインストール場所に格納された最新の JCE ファイルに置き換え、Secure Agent を再起動してください。
顧客マスタキー ID	オプション。AWS Key Management Service (AWS KMS) によって生成された顧客マスタキー ID またはエイリアス名を指定します。 Amazon S3 バケットが存在するリージョンの顧客マスタキーを生成する必要があります。次のマスタキーを指定できます。 顧客が生成した顧客マスタキー クライアントサイドまたはサーバーサイドの暗号化を有効にします。 デフォルトの顧客マスタキー クライアントサイドまたはサーバーサイドの暗号化を有効にします。アカウントの管理者ユーザーのみがデフォルトの顧客マスタキー ID を使用してクライアントサイド暗号化を有効にできます。
リージョン名	アクセス先のバケットの AWS リージョン。 次のいずれかのリージョンを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> - アジアパシフィック (ムンバイ) - アジアパシフィック (ソウル) - アジアパシフィック (シンガポール) - アジアパシフィック (シドニー) - アジアパシフィック (東京) - AWS GovCloud (米国) - カナダ (中部) - 中国 (北京) - 中国 (寧夏) - 欧州 (アイルランド) - 欧州 (フランクフルト) - 欧州 (ロンドン) - 欧州 (パリ) - 南米 (サンパウロ) - 米国東部 (オハイオ) - 米国東部 (バージニア北部) - 米国西部 (北カリフォルニア) - 米国西部 (オレゴン) デフォルトは [米国東部 (バージニア北部)] です。

Anaplan V2 接続のプロパティ

Anaplan V2 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Anaplan V2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Anaplan V2 接続の名前。この名前は、組織内で一意にする必要があります。
説明	Anaplan V2 接続の説明。
タイプ	接続タイプ。Anaplan V2 を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。
認証タイプ	[基本認証] または [証明書認証] を選択します。
ユーザー名	Anaplan にログインするユーザー名。例: firstname.lastname@anaplan.com。
パスワード	[ユーザー名] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
証明書パスの場所	Anaplan 認証証明書へのパス。証明書パスの場所が必要になるのは、Anaplan によって発行された証明書を使用する接続を設定し、API バージョン 1.3 を使用する場合のみです。 すなわち、証明書パスの場所が必要になるのは、認証タイプが証明書認証、メジャーバージョンが 1、およびマイナーバージョンが 3 の場合のみです。
ワークスペース ID	ワークスペース ID。ワークスペース ID を取得するには、Anaplan モデルを開き、URL から selectedWorkspaceId= の後の値をコピーします。
モデル ID	モデル ID。モデル ID を取得するには、Anaplan モデルを開き、URL から selectedModelId= の後の値をコピーします。
API ベース URL	API ベース URL を入力します。例: https://api.anaplan.com
API メジャーバージョン	Anaplan API バージョンには、メジャーバージョンとマイナーバージョンの 2 つの部分があります。 例: API バージョン 1.3 の場合、メジャーバージョンは 1 でマイナーバージョンは 3 です。 デフォルトでは、API メジャーバージョンは 1 に設定されています。 - Anaplan によって発行された証明書を使用するには、1 を選択します。API バージョン 1.x は、Anaplan によって発行された証明書をサポートします。 - 認証局によって発行された証明書を使用するには、2 を選択します。API バージョン 2.x は、認証局によって発行された証明書をサポートします。
API マイナーバージョン	デフォルトでは、API マイナーバージョンは 3 に設定されています。 - API バージョン x.3 を使用する場合は、3 を選択します。例: バージョン 1.3 - API バージョン x.0 を使用する場合は、0 を選択します。例: バージョン 2.0
最大タスク再試行回数	デフォルトでは、最大タスク再試行回数は 2 に設定されています。 これより大きい値を選択すると、同期タスクの速度が遅くなる可能性があります。
エラーダンプパスの場所	Secure Agent マシン上のエラーファイルの場所。

接続プロパティ	説明
API ベースのメタデータの使用	API ベースのメタデータを Anaplan からインポートし、同期タスクでファイルベースのフィールドマッピングの代わりに API ベースのフィールドマッピングを使用できます。API ベースのメタデータをインポートする際、Anaplan V2 コネクタは、Anaplan のファイルを参照せずに、Anaplan API からカラムヘッダー情報を直接読み取ります。
キーストアパスの場所	Secure Agent を使用するシステム上の JAVA KeyStore ファイルへのパス。 注: キーストアパスの場所、キーストアのエイリアス、およびキーストアのパスワードが必要になるのは、認証局によって発行された証明書を使用する接続を設定し、API バージョン 2.0 を使用する場合があります。
キーストアのエイリアス	キーストアファイルに保存されている証明書のエイリアス。
キーストアのパスワード	キーストアファイル内の証明書エイリアスのパスワード。

Ariba 接続のプロパティ

Ariba 接続をセットアップするには、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Ariba 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Ariba コネクタの名前。
説明	Ariba コネクタの説明。
タイプ	接続のタイプ。SOAP、HTTPS、または SOAP/HTTPS を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	SOAP または HTTPS 接続のユーザー名。
パスワード	SOAP または HTTPS 接続のパスワード。
共有済みシークレット	HTTPS (ITK) 接続の共有済みシークレット。
サービスの URL	SOAP または HTTPS Ariba 接続のサービスの URL。
領域/サイト	Ariba サンドボックスの領域。
依存ファイルの場所	依存ファイルのフォルダの場所。

AS2 接続のプロパティ

特定の AS2 サーバーの接続プロパティを設定します。

Administrator の **【接続】** ページで次のプロパティを設定します。

- AS2 接続プロパティ。AS2 サーバーへの接続を定義して、AS2 サーバーへのアクセスを有効にします。
- メッセージプロパティ。プライベートキーとパブリックキーへのアクセスおよびメッセージ暗号化設定を指定します。メッセージプロパティは、メッセージを圧縮するかどうか、およびメッセージの受信確認を送信または受信するかなど、メッセージを組織に渡す方法も定義します。
- 受信確認プロパティ。MDN 受信確認を要求するかどうか、証明書および転送エンコードのプロパティ、および MDN 受信確認を受け取る方法を指定します。

接続プロパティ

以下の表に、AS2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。
URL	メッセージを受信するサーバーの URL。URL 構文は、有効なサーバーと場所を指す必要があります。ホスト名には、IP アドレスまたはドメイン名を指定できます。ポート番号は、AS2 サーバーがリスンするポートです。
AS2 送信元 ID	送信者の名前または ID。受信側のサーバーがこの ID でフィルタリングする場合、ID が一致する必要があります。 値は大文字と小文字が区別され、1 から 128 文字の印刷可能な ASCII 文字を使用できます。値にスペースを含めることはできません。
AS2 送信先 ID	受信者の名前または ID。 値は大文字と小文字が区別され、1 から 128 文字の印刷可能な ASCII 文字を使用できます。値にスペースを含めることはできません。
ユーザー名	リモート AS2 サーバーに接続するためのユーザー名。
パスワード	リモート AS2 サーバーに接続するためのパスワード。
接続タイムアウト	サーバーへの接続を試行するときに待機する最大秒数。指定された時間内に接続が成功しない場合、タイムアウトが発生します。 値が 0 または空白の場合、待機時間は無限です。 デフォルトは 60 秒です。
読み取りタイムアウト	サーバーからファイルの読み取りを試行するときに待機する最大秒数。指定された時間内にファイルが読み取られない場合、タイムアウトが発生します。 値が 0 または空白の場合、待機時間は無限です。 デフォルトは 0 秒です。
接続の再試行	接続に成功しなかった場合に、AS2 サーバーへの接続を再試行する回数。この設定は、最初の接続と接続の切断による再接続の試行の両方に適用されます。 値が空白の場合、再試行は行われません。 デフォルトは空白です。

接続プロパティ	説明
接続再試行の間隔	接続の再試行ごとに待機する秒数。 例えば、5 秒間隔で最大 10 回接続を再試行する場合、 【接続の再試行】 を 10、 【接続再試行の間隔】 を 5 に設定します。 値が空白の場合、間隔は 0 秒になります。 デフォルトは空白です。
リダイレクトのフォロー	接続の作成時に、リダイレクトリンクをフォローするかどうか。 デフォルトは false です。
ユーザーエージェント	メッセージを作成または送信したアプリケーションを示すためにメッセージヘッダーで 사용되는値。
チャンクエンコードの使用	要求の長さを事前計算するかどうか、または要求をチャンクで送信するかどうか。大きなファイルを送信する場合、コンテンツの長さを事前計算すると、パフォーマンスが低下することがあります。ただし、すべての AS2 サーバーでチャンクエンコードがサポートされるわけではありません。 デフォルトは false です。
クライアント証明書エイリアス	受信側の AS2 サーバーから要求された場合に、クライアント認証に使用するデフォルトのキーストア内のキーのエイリアス。
SSL コンテキストプロトコル	SSLContext の作成時に使用されるプロトコル。指定するプロトコルは、Java Runtime Environment (JRE) にインストールされているセキュリティプロバイダによって異なります。 注: ほとんどの場合、デフォルト値の SSL が適しています。ただし、一部の IBM JRE 実装では、接続先のサーバーが SSLv3 をサポートしていない場合、デフォルト値の SSL は機能しません。 デフォルトは SSL です。

メッセージのプロパティ

以下の表に、メッセージのプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
トラストストアの場所	パブリックキー証明書を格納するトラストストアへのパス。Secure Agent マシン上、または Secure Agent がアクセス可能なサーバー上にある必要があります。
トラストストアのパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。
メッセージの暗号化	転送時にメッセージを暗号化するかどうか。暗号化されたトンネル内でのメッセージの暗号化は任意ですが、強く推奨されます。 デフォルトは false です。

接続プロパティ	説明
暗号化アルゴリズム	<p>メッセージの暗号化に使用するアルゴリズム。次のいずれかのアルゴリズムを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - AES128 - AES256 - CAST5 - IDEA - TRIPLE-DES - RC2 <p>デフォルトは AES128 です。</p>
暗号化証明書エイリアス	<p>デフォルトの信頼済み証明書キーストアで送信メッセージを暗号化するために使用する証明書エイリアス。</p>
メッセージの署名	<p>メッセージをデジタル署名で署名するかどうか。メッセージの署名は任意ですが、強く推奨されます。</p> <p>デフォルトは false です。</p>
プライベートキーストアの場所	<p>プライベートキーおよび関連する証明書を格納するキーストアの場所。メッセージの署名が有効になっている場合に適用されます。</p>
プライベートキーストアのパスワード	<p>キーストアにアクセスするためのパスワード。メッセージの署名が有効になっている場合に適用されます。</p>
署名アルゴリズム	<p>メッセージの署名に使用するアルゴリズム。メッセージの署名が有効になっている場合に適用されます。</p> <p>次のいずれかのアルゴリズムを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - SHA1 - SHA224 - SHA256 - SHA384 - SHA512 - MD5 <p>デフォルトは SHA1 です。</p>
署名証明書エイリアス	<p>メッセージの署名に使用するプライベートキーエイリアス。プライベートキーは、デフォルトのプライベートキーストアにあります。</p>
メッセージの圧縮	<p>帯域幅を削減するためにメッセージを圧縮するかどうか。このオプションを有効にすると、Informatica Intelligent Cloud Services は zlib 形式でメッセージを圧縮します。</p> <p>デフォルトは false です。</p>

受信確認のプロパティ

以下の表に、受信確認のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
受信確認証明書エイリアス	受信確認証明書のエイリアス。署名付き受信確認を要求するように接続を設定する場合に適用されます。 AS2 コネクタは受信確認証明書を使用して、受信確認に署名した証明書が、デフォルトの信頼済み証明書キーストアの証明書であることを確認します。 受信確認署名に埋め込み証明書が含まれる場合は、オプションです。受信確認署名に埋め込み証明書が含まれない場合は、受信確認証明書エイリアスを指定する必要があります。
受信確認転送エンコード	メッセージの受信確認に使用するエンコードのタイプ。これは、受信確認に転送エンコードが含まれない場合に便利です。 以下のいずれかの値を使用します。 <ul style="list-style-type: none">- base64- quoted-printable- 7bit- 8bit- binary
受信確認要求	サーバーがメッセージを受信するときに、MDN 受信確認を要求するかどうか。次のいずれかのオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none">- なし。受信確認を要求しません。- 署名済み。デジタル署名で署名された受信確認を要求します。- 署名なし。デジタル署名なしの受信確認を要求します。 デフォルトは [なし] です。
宛先	MDN を受け取るモード。受信確認を要求する場合に適用されます。 次のいずれかの値を選択します。 <ul style="list-style-type: none">- Joblog。MDN を、モニタでアクセスできるジョブログで受け取ります。- ファイル。MDN をファイルで受け取ります。- 電子メール。MDN を電子メールで受け取ります。- URL。MDN を、URL を介して受け取ります。- 破棄。MDN を破棄します。 デフォルトは Joblog です。
ファイル	MDN を保存するファイル名を含むパス。ファイルの宛先に適用されます。
ファイルが存在する場合	受信確認ファイルがすでに存在する場合に、名前の競合を解決する方法を決定します。ファイルの宛先に適用されます。 次のいずれかの値を選択します。 <ul style="list-style-type: none">- 名前の変更。連番を追加して、新しい受信確認ファイルの名前を変更します。例: fileMdn2.txt、fileMdn3.txt- 付加。既存のファイルに受信確認を付加します。- 上書き。既存の受信確認ファイルの内容を上書きします。- スキップ。受信確認をアップロードしません。- エラー。ファイル名が重複するとエラーが発生します。 デフォルトは [名前の変更] です。
電子メールアドレス	受信確認の送信先の電子メールアドレス。電子メールの宛先に適用されます。
受信確認 URL	受信確認を投稿する URL。URL の宛先に適用されます。

BigMachines 接続のプロパティ

BigMachines 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、BigMachines 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	BigMachines アカウントのユーザー名。
パスワード	BigMachines アカウントのパスワード。
DataTables スキーマのパス	データテーブルスキーマファイルのパスを指定します。 例: <code>:\...\...\BigMachines\config\Datatables.tbl</code> 注: データテーブルスキーマファイルの名前には、.tbl 拡張子が含まれる必要があります。スキーマファイル内に記述されるテーブルヘッダー名には、同じディレクトリ内の個別の.sch ファイルがある必要があります。.sch ファイルによって、スキーマファイル内にあるテーブル名のフィールドの詳細が定義されます。
WSDL フォルダのパス	WSDL ファイルのパスを指定します。 注: 接続プロパティで WSDL URL を指定しないと、デフォルトの WSDL ファイルのパスが、WSDL URL として選択されます。 デフォルトの WSDL URL ファイルのパスは次のとおりです。<Secure Agent のインストールディレクトリ>\downloads\<最新のコネクタ zip パッケージ>\package\plugins\<プラグイン ID>\<WSDL>\
エンドポイント URL	BigMachines エンドポイント URL のパス。
属性制御ファイルのパス	属性制御のパスを指定します。属性制御のパスによって、メタデータが制御されます。デフォルトの制御ファイルのパスは次のとおりです。<Secure Agent のインストールディレクトリ>\downloads\<最新のコネクタ zip パッケージ>\package\plugins\
ロギングの有効化	ロギングを有効にするには、このプロパティを選択します。
ページサイズ	各要求につき取得するレコード数。
トランザクションスキーマ名	トランザクションを取得するための REST ドキュメント名。
トランザクション行項目スキーマ名	トランザクション行項目の詳細を取得するための REST ドキュメント名。
バッチサイズ	データテーブルオブジェクトに対して一括更新/挿入操作を実行するためのバッチサイズを指定します。

Birst Cloud 接続のプロパティ

Birst Cloud 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Birst Cloud 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Birst Cloud 接続コネクタの名前。
説明	Birst Cloud 接続コネクタの説明。
タイプ	Birst Cloud 接続を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	Birst Cloud 接続アプリケーションのユーザー名。
パスワード	Birst Cloud 接続アプリケーションのパスワード。
エンドポイント URL	Birst Web サービスのエンドポイント URL。
スペース ID	データのアップロード元の Birst スペースの UDID。
デバッグロガーを有効にする	デバッグログを有効にする場合に選択します。
設定場所	内部設定の一時ストレージ。

Birst 接続のプロパティ

Birst 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Birst 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Birst コネクタの名前。
説明	Birst コネクタの説明。
タイプ	Birst 接続を選択します。
Secure Agent	Secure Agent を選択します。
ユーザー名	Birst アプリケーションのユーザー名。
パスワード	Birst アプリケーションのパスワード。
エンドポイント URL	Birst エンドポイント URL のパス。

接続プロパティ	説明
WSDL URI / URL	Birst WSDL URL のパス。
デバッグロガーを有効にする	デバッグログを有効にする場合に選択します。

Box 接続のプロパティ

Box 接続を設定するときは、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Box 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。 Box 内の CSV ファイルに対してデータの読み取りまたは書き込みを行うときは、Hosted Agent または Secure Agent を指定できます。
OAuth アクセストークン	Box によって生成されるアクセストークン。
URI 要求パラメータ	Box 内のファイルまたはフォルダを検索するためのパラメータ。 例えば、「generate」という語を含むオブジェクトを検索するには、 <code>query=generate;content_types=name;limit=0;offset=0</code> という文字列を使用します。 ワイルドカード文字を使用できます。また、フレーズまたは複数のクエリ文字列を二重引用符で囲むこともできます。
ソースファイルのパス	Box コネクタの場合は該当しません。
ターゲットファイルのパス	オプション。Secure Agent をホストするマシン内のディレクトリ。このディレクトリに Box 内のオブジェクトをダウンロードできます。Secure Agent マシンのルートディレクトリではなく、Box 内の特定の場所にファイルまたはフォルダをダウンロードするには、このプロパティの値を入力します。
応答フォルダのパス	Box コネクタの場合は該当しません。
Box ファイル ID または Box フォルダ ID	接続を使用するファイルまたはフォルダのファイル ID またはフォルダ ID。 ファイル ID またはフォルダ ID は、ファイルまたはフォルダの Box URL から取得できます。 例えば、Reports フォルダの Box URL は、 <code>https://company.app.box.com/files/0/f/1837615991/Reports</code> のようになっています。 この場合、1837615991 が Reports のフォルダ ID です。 注: この値をオーバーライドできるのは、同期タスクまたはマッピングを作成して、Box 内の CSV ファイルに対してデータの読み取りまたは書き込みを行うときです。

Box OAuth 接続のプロパティ

次の表に、Box OAuth 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
Box API	使用する Box API。 次の API のいずれかの値を使用できます。 - Search_Files_or_Folders。検索条件に基づいてファイルとフォルダのリストを返すタスクを実行するには、Search_Files_or_Folders を選択します。ファイルまたはフォルダを検索するために、Below_is_Search API を選択することもできます。 - Download_Files。Box からローカルファイルシステムの場所にファイルをダウンロードするには、Download_Files を選択します。 - Upload_Files。ローカルファイルシステムの場所から Box にファイルをアップロードするには、Upload_Files を選択します。 - Below_are_Lists_of_Files。Box 内の CSV ファイルとの間でファイルを読み書きするには、Below_are_Lists_of_Files を選択します。
Box API が動的かどうか	該当なし。
URI 要求パラメータ	Search_Files_or_Folders API を使用するときの検索パラメータ。 例えば、Search_Files_or_Folders API を使用するとき、「query=generate;limit=0;offset=0」という文字列を使用できます。
ソースファイルのパス	Box にアップロードするファイルを保存するために、Secure Agent を実行するマシン内のディレクトリ。Upload_Files API を使用するとき値を入力する必要があります。
ターゲットファイルのパス	Box からダウンロードするファイルを保存するために、Secure Agent を実行するマシン内のディレクトリ。Download_Files API を使用するとき値を入力する必要があります。
要求の種類	API の HTTP 要求タイプ。このバージョンでは POST のみがサポートされています。
クライアント ID	該当なし。
クライアント秘密鍵	該当なし。
承認コード	該当なし。
応答フォルダのパス	オプション。Search_Files_or_Folders API を使用するとき、JSON 応答全体を保存するために Secure Agent を実行するマシン内のフォルダのパス。
資格情報ファイル名の保護	該当なし。
config.csv ファイルの作成	該当なし。
認証	該当なし。

接続プロパティ	説明
アクセストークン	Box によって生成されるアクセストークン。 Box 開発者コンソール内でアクセストークンを生成できます。 アクセストークンは、生成の 2 時間後に期限切れになります。2 時間後、アクセストークンを更新するために接続を編集する必要があります。
Box ファイル ID または Box フォルダ ID	接続を使用するファイルまたはフォルダのファイル ID またはフォルダ ID。 ファイル ID またはフォルダ ID は、ファイルまたはフォルダの Box URL から取得できます。 例えば、Reports フォルダの Box URL は、 https://company.app.box.com/files/0/f/1837615991/Reports のようになっています。 この場合、1837615991 が Reports のフォルダ ID です。 この値をオーバーライドできるのは、同期タスクまたはマッピングタスクの作成時です。

CallidusCloud Badgeville 接続のプロパティ

CallidusCloud Badgeville 接続を作成するには、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、CallidusCloud Badgeville 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
apiUrl	ターゲットにする CallidusCloud Badgeville 環境の URL。
apiKey	CallidusCloud Badgeville プラットフォーム内のターゲット環境の Cairo API キー。
siteId	CallidusCloud Badgeville サイトの ID。例: 59672f5c7sad0e7c4700020c。

CallidusCloud Commissions 接続のプロパティ

CallidusCloud Commissions 接続を作成するには、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、CallidusCloud Commissions 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
UserName	CallidusCloud ポータルログインのユーザー名。
Password	CallidusCloud ポータルログインのパスワード。

プロパティ	説明
BaseURL	CallidusCloud アプリケーションに接続するためのベース URL。 ベース URL を指定するには、次のサンプルを使用します。 https://<domainName>/TrueComp-SaaS/services/rest/
PageSize	読み取り操作のページサイズ。 デフォルト値は 10 です。

CallidusCloud File Processor 接続のプロパティ

CallidusCloud File Processor 接続を作成するには、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、CallidusCloud File Processor 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
UserName	SFTP サーバーへの接続に使用するユーザー名。
Password	SFTP サーバーへの接続に使用するパスワード。
SFTP キー	SFTP サーバーへの接続に使用するプライベートキー。SFTP キーは単一の行内に指定する必要があります。
SFTP キーパスフレーズ	SFTP サーバーに接続するためのパスフレーズ。SFTP キーパスフレーズは単一の行内に指定する必要があります。
ホスト	SFTP サーバーのホスト名。
ポート	サーバーへの接続に使用するためのポート番号。 空白のままにすると、デフォルトのポート番号は 22 になります。
リモートディレクトリ	Secure Agent にアクセス可能な SFTP ホストのディレクトリ。 注: 指定するパスの末尾に/を追加します。

プロパティ	説明
Charset	<p>エンコードデータに使用する文字セットを指定します。</p> <p>CallidusCloud File Processor コネクタでは、次の文字セットがサポートされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - Big5 - Big5-HKSCS - CESU-8 - EUC-JP - EUC-KR - GB18030 - GB2312 - GBK - IBM00858 - IBM01140 - IBM01141 - IBM01142 - IBM01143 - IBM01144 - IBM01145 - UTF-8 <p>デフォルト値は UTF-8 であり、すべての文字データに対して機能します。</p>
区切り文字	<p>データのカラムを区切るためにファイル内で使用される区切り文字。</p> <p>区切り文字を選択します。デフォルトの区切り文字はカンマです。</p>
圧縮モード	<p>バイナリファイルの圧縮形式。次のいずれかのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - なし - gzip <p>デフォルトは [なし] です。</p>
暗号化モード	<p>SFTP サーバーがデータの暗号化に使用する暗号化のタイプ。次のいずれかのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - なし - GPG <p>デフォルトは [なし] です。</p>
暗号化パブリックキー	<p>[GPG] を [暗号化モード] として選択したときに必須です。データを暗号化するパブリックキーは、単一の行内に指定する必要があります。</p>
暗号化プライベートキー	<p>[GPG] を [暗号化モード] として選択したときに必須です。データを復号化するプライベートキーは、単一の行内に指定する必要があります。</p>
暗号化パスフレーズ	<p>[GPG] を [暗号化モード] として選択したときに必須です。データを暗号化するパスフレーズは、単一の行内に指定する必要があります。</p>

注: 複数行のキーファイルまたはパスフレーズを単一行のキー文字列に変換するには、次の URL をクリックします。

<https://connect.calliduscloud.com/ce/KeyConverter>

Cassandra 接続のプロパティ

Cassandra 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Cassandra 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	接続の名前。この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。このプロパティは、接続を作成した後に変更できます。名前は 128 文字以内で指定し、空白および以下の特殊文字は使用できません。 ~`!\$%^&*()-+={[}] \:;'"<,>./
説明	オプション。接続の説明。説明は、4,000 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。[Cassandra] を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ホスト名	Cassandra サーバーのホスト名または IP アドレス。
ポート	Cassandra サーバーのポート番号。デフォルトは 9042 です。
ユーザー名	Cassandra サーバーにアクセスするためのユーザー名。
パスワード	Cassandra サーバーにアクセスするためのユーザー名に対応するパスワード。
デフォルトキースペース	デフォルトで使用する Cassandra キースペースの名前。
追加接続プロパティ	以下の形式で、1 つ以上の JDBC 接続パラメータを入力します。 <param1>=<value>;<param2>=<value>;<param3>=<value> JDBC 接続パラメータは、キーと値のペアをセミコロンで区切って指定する必要があります。 Cassandra 接続では、次の JDBC 接続パラメータを設定できます。 <ul style="list-style-type: none">- BinaryColumnLength- DecimalColumnScale- EnableCaseSensitive- EnableNullInsert- EnablePaging- QueryMode- RowsPerPage- StringColumnLength- VTTableNameSeparator- LogLevel- LogPath
SSL モード	Cassandra コネクタには適用されません。 [無効] を選択します。
SSL トラストストアパス	Cassandra コネクタには適用されません。

プロパティ	説明
SSL トラストストアパスワード	Cassandra コネクタには適用されません。
SSL キーストアパス	Cassandra コネクタには適用されません。
SSL キーストアパスワード	Cassandra コネクタには適用されません。

Cassandra JDBC 接続パラメータの設定の詳細については、Informatica How-To ライブラリの記事「Configuring the Simba Cassandra JDBC Driver Options for Cassandra Connector」を参照してください。

<https://kb.informatica.com/h2l/HowTo%20Library/1/1252-ConfiguringtheSimbaCassandraJDBCDriverOptionsforCassandraConnector-H2L.pdf>

Chatter 接続のプロパティ

Chatter コネクタを同期タスクで使用するには、データ統合で接続を作成し、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Chatter 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続の名前。
タイプ	接続タイプ。【Chatter】を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	Chatter アカウントのユーザー名。
パスワード	Chatter アカウントのパスワード。
セキュリティトークン	SalesForce から生成されたセキュリティトークン。
サービスの URL	API バージョンが付いたサービスエンドポイント URL。Chatter コネクタは、API バージョン V 25.0 までをサポートします。
添付パス	フィードの添付ファイルがコピーされる必要がある場所のパス。

CMMS MVP Plant 接続のプロパティ

CMMS MVP Plant 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、CMMS MVP Plant 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
MvpPlantApiHostName	CMMS MVP Plant のホスト名。 例 CMMS MVP Plant が Secure Agent と同じネットワーク上でホストされているときのホスト名。 <code>http://localhost/</code> CMMS MVP Plant が Cloud 内の CMMS でホストされているときのホスト名。 <code>https://CustomerName.mvplant.com/</code>
MvpPlantApiUserName	CMMS MVP Plant REST API とオブジェクトに対する管理者特権を持つ CMMS MVP Plant アカウントのユーザー名。
MvpPlantApiPassword	CMMS MVP Plant アカウントのパスワード。

Concur V2 接続のプロパティ

Concur V2 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Concur V2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
認証	Secure Agent は、Concur データに対してユーザーを認証してアクセスを承認するために OAuth を使用します。
ユーザー名	Concur Web ページにログインするためのユーザー名。
[パスワード]	ユーザー名に関連付けられるパスワード。
コンシューマキー	Concur 管理者が組織のパートナーアプリケーションの登録時に生成したキー。
フォルダ	アクセス先の Concur オブジェクトへの相対パス。

Coupa 接続のプロパティ

Coupa 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Coupa 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続の名前。
タイプ	接続タイプ。[Coupa] を選択します。
Secure Agent	Coupa コネクタをインストールした場所の Secure Agent。
ドメイン名	Coupa ドメイン名。例: https://servicemaster-test.coupahost.com
Coupa API キー	Coupa の固有の API キー。
UTC タイムゾーン	Coupa UTC タイムゾーン（このタイムゾーンに、日付と時刻データ型のフィールドのフィルタ値が追加されます）。
ロギングの有効化	ロギングを有効にするには、このボックスを選択します。

Coupa V2 接続のプロパティ

Coupa V2 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Coupa V2 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	Coupa にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
認証	[Coupa V2] を選択します。
ベース URL	Coupa API に接続するためのベース URL。ベース URL を次の形式で指定します。 <code>https://{instance_name}.coupahost.com/</code> 例: <code>https://companyname.coupahost.com/</code>

プロパティ	説明
COUPA API KEY	Coupa インスタンスに接続するための固有の API キー。 Coupa API キーの作成方法の詳細については、次の URL をクリックしてください。 https://success.coupa.com/Integrate/Technical_Documentation/API/Get_Started/API_Key_Security
カスタムフィールド設定	Coupa オブジェクトのカスタムフィールドを指定します。 次の形式を使用して、Coupa のカスタムフィールドを指定します。ここで fieldName は Coupa のカスタムフィールドの値であり、FieldType はカスタムフィールドの型です。 Object1=FieldName1,FieldType,DataType;\nFieldName2,Mode,DataType Object2=FieldName1,FieldType,DataType;\nFieldName2,Mode,DataType Coupa V2 コネクタは、簡易カスタムフィールドのみをサポートします。 以下に例を示します。 user-summary=custom_field1,Simple,String;\ncustom_field2,Simple,String requisition-header=requisition_cf1,Simple,String;\nrequisition_cf2,Simple,Integer user=user_customfield1,Simple,String;\nuser_customfield_2,Simple,String 注: Secure Agent は、カスタムフィールド名内のアンダースコアをハイフンに置き換えて、 【フィールドマッピング】 タブ内のカスタムフィールド名を表示します。

カスタムフィールドを設定するときは、次のルールおよびガイドラインを考慮します。

- **【カスタムフィールド設定】** 接続プロパティ内にカスタムフィールドを指定するときは、異なるオブジェクトのカスタムフィールドを新しい行に指定する必要があります。
- 特定のオブジェクトに関する複数のカスタムフィールドを指定するときは、カスタムフィールドを新しい行に分けて指定する必要があります。

Couchbase 接続のプロパティ

Couchbase 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Couchbase 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	接続の名前。この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。このプロパティは、接続を作成した後に変更できません。名前は 128 文字以内で指定し、空白および以下の特殊文字は使用できません。 ~`!\$%^&*()-+={[}] \:;'"<,>./?
説明	オプション。接続の説明。説明は、4,000 文字を超えることはできません。

プロパティ	説明
タイプ	接続タイプ。【Couchbase】を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ホスト名	Couchbase サーバーのホスト名または IP アドレス。
ポート	Couchbase サーバーのポート番号。デフォルトは 9042 です。
ユーザー名	Couchbase サーバーにアクセスするためのユーザー名。
パスワード	Couchbase サーバーにアクセスするためのユーザー名に対応するパスワード。
SSL モード	Couchbase コネクタには適用されません。 【無効】を選択します。
SSL 証明書パス	Couchbase コネクタには適用されません。
追加接続プロパティ	以下の形式で、1 つ以上の JDBC 接続パラメータを入力します。 <param1>=<value>;<param2>=<value>;<param3>=<value> Couchbase コネクタは、次の接続パラメータをサポートします。 QueryMode Couchbase サーバーへのクエリの送信に使用します。 LogLevel Secure Agent がセッションログにエラーメッセージを記録するかどうかを指定します。 LogPath ロギングが有効な場合にドライバがログファイルを保存するフォルダの完全パス。 AuthMech ドライバが Couchbase サーバーへの接続に使用する認証メカニズム。

Couchbase JDBC 接続パラメータの設定の詳細については、Informatica How-To ライブラリの記事「Configuring the Simba Couchbase JDBC Driver Options for Couchbase Connector」を参照してください。

<https://kb.informatica.com/h2l/HowTo%20Library/1/1253-ConfiguringtheSimbaCouchbaseJDBCDriverOptionsforCouchbaseConnector-H2L.pdf>

Cvent 接続のプロパティ

Cvent 接続を設定するときは、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Cvent 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続の名前。
説明	説明を入力します。
タイプ	必要な Cvent 接続を選択します。
ランタイム環境	必要な Secure Agent を選択します。
アカウント番号	アカウント番号を指定します。
ユーザー名	Cvent API のユーザー名。
パスワード	Cvent API のパスワード。
エンドポイント URL	Cvent アプリケーションに接続するためのエンドポイント URL を入力します。
バッチサイズ	一度に取得するレコード数。デフォルト値は 100 です。
UTC タイムゾーン	Cvent UTC タイムゾーン。タイムゾーンに、日付データ型と時刻データ型のフィールドのフィルタ値を追加します。
ロギングの有効化	必要に応じてロギングを有効にするには、このボックスを選択します。

Db2 for i CDC 接続のプロパティ

Db2 for i CDC 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、Db2 for i CDC 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	Db2 for i CDC 接続の名前。この名前は、組織内で一意にする必要があります。接続名には、英数字、スペース、および次の特殊文字を含めることができます。_ . + - 名前の先頭または末尾のスペースはトリミングされ、名前の一部として保存されません。最大長は 100 文字です。接続名では大文字と小文字は区別されません。
説明	Db2 for i CDC 接続の説明。最大長は 255 文字です。
タイプ	接続タイプ。Db2 for i CDC の場合、タイプは Db2 for i CDC である必要があります。
ランタイム環境	マッピングタスクの実行に使用する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。

プロパティ	説明
リスナの場所	Db2 変更データのための PWX CDC リーダー要求を処理する PowerExchange リスナがあり、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を実行するシステムのホスト名または IP アドレス。リスナのポート番号も含まれます。次の形式で値を入力します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。 <i>host_name:port_number</i> 以下に例を示します。 DB2CDC1A:1467
ユーザー名	PowerExchange リスナセキュリティが有効化されているときに、PowerExchange リスナにアクセスするために使用できるユーザー名。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。
パスワード	[ユーザー名] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
コレクション名	Db2 ソーステーブルの登録が含まれる登録グループの [インスタンス] フィールド内に指定される Db2 for i インスタンス名。このインスタンス名は、DBMOVER メンバの AS4J CAPI_CONNECTION 文の INST パラメータでも指定されます。この値は、接続の使用時に、PWX CDC メタデータアダプタがインポートする抽出マップメタデータをフィルタするために使用されます。
CAPI 接続名	PowerExchange DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される CAPX CAPI_CONNECTION 文の名前。この文には、PWX CDC リーダーが PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) ログファイルからの変更データを抽出するために使用するパラメータが含まれます。PWX CDC リーダーにこのプロパティ値が必要であり、DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される任意のデフォルトの CAPI_CONNECTION 文を無視します。
接続リトライ期限	初期接続の試行の失敗後、PWX CDC リーダーが PowerExchange リスナへの再接続を試行する秒数。接続が再試行時間中に確立できない場合、マッピングタスクに失敗します。デフォルト値は 0 であり、接続の再試行は無効になります。
圧縮	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを圧縮するかどうかを制御します。データを圧縮するには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティは選択されていません。
暗号化	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを暗号化するかどうかを制御します。また、使用する暗号化の種類も指定します。次のいずれかのオプションを選択します。 - なし。暗号化は使用しません。 - AES 128 ビット。128 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 192 ビット。192 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 256 ビット。256 暗号化キーを使用します。 デフォルトは [なし] です。
パーシングサイズ	後続データ用に次の PWX CDC リーダー要求を待機する一時停止までに、ソースシステムが PowerExchange リスナに渡す行数またはキロバイト単位でのデータ量。この値を減らすと、セッションのパフォーマンスが向上します。パフォーマンスを最大にするには、0 を使用します。 デフォルトである最小値は 0 です。
パーシング単位	[パーシングサイズ] プロパティと一緒に使用する単位の種類。 [行] または [キロバイト] のいずれかを選択します。デフォルトは [行] です。

プロパティ	説明
マップの場所	<p>抽出マップがあるシステムのホスト名または IP アドレス。ポート番号も含めます。</p> <p>この値は、PowerExchange リスナが、抽出マップからリモートにある PowerExchange ロッガー（Linux、UNIX、Windows 用）マシン上で実行されている場合に必要です。リスナは、変更データ抽出要求を処理するために、抽出マップへのアクセスを必要とします。</p> <p>次の形式で値を入力します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。</p> <p><i>host_name:port_number</i></p> <p>以下に例を示します。</p> <p>DB2CDC01:25100</p> <p>注: 接続をテストして抽出マップメタデータをインポートするための 【マップの場所】 の値は、【リスナの場所】 の値よりも優先されます。</p>
マップの場所のユーザー	【マップの場所】 プロパティ内に指定された場所の PowerExchange リスナにアクセスできるユーザー名。
マップの場所のパスワード	【マップの場所のユーザー】 プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
イベントテーブル	ユーザー定義イベントに基づく変更データ抽出を停止するためにイベントテーブルを作成した場合、イベントテーブルの PowerExchange 抽出マップの名前を入力します。イベントテーブルは、CDC ソースシステム上の Db2 for i テーブルである必要があります。
Low-Value をスペースで置換	文字データ内の NULL をスペースに置き換えるかどうかを制御します。文字データ内の NULL を置き換えるには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティが選択されています。
カスタムプロパティ	<p>PowerExchange のデフォルト設定よりも優先するために指定できるカスタムプロパティ。セミコロン (;) を区切り文字として使用することで、複数のプロパティを入力できます。通常は、グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ、カスタムプロパティを設定します。</p> <p>注: これらのプロパティは、PowerCenter での PWXPC Db2 CDC アプリケーション接続の PWX 上書きオプションと同じです。</p> <p>さらに、PowerExchange クライアントとリモートの PowerExchange リスナとの間で保護された接続を確立するために、次のプロパティを指定できます。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,{Y N})</p> <p>SSL パラメータと {Y N} パラメータを、接続を介したクライアント通信のための設定に追加します。このプロパティは、次の方法のいずれかで入力します。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,Y)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,N)</p> <p>オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> - SSL。クライアント通信に対して SSL 認証を有効にします。 - {Y N}。SSL 認証が有効なときに、クライアント SSL 証明書の検証が発生するかどうかを制御します。「N」を入力すると、クライアント証明書の検証が無効になり、サブジェクト証明書とプライベートキーがロードされるのが防止されます。デフォルトは Y です。 <p>注: DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に証明書がすでに指定されている場合、保護された接続を無効にするために、このパラメータを使用することはできません。コンフィギュレーションファイル内に証明書が指定されていない場合、保護された接続を追加できるだけです。</p>

Db2 for LUW CDC 接続のプロパティ

Db2 for LUW CDC 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、Db2 for LUW CDC 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	Db2 for LUW CDC 接続の名前。この名前は、組織内で一意にする必要があります。接続名には、英数字、スペース、および次の特殊文字を含めることができます。_ . + - 名前の先頭または末尾のスペースはトリミングされ、名前の一部として保存されません。 最大長は 100 文字です。接続名では大文字と小文字は区別されません。
説明	Db2 for LUW CDC 接続の説明。最大長は 255 文字です。
タイプ	接続タイプ。Db2 for LUW CDC の場合、タイプは Db2 for LUW CDC である必要があります。
ランタイム環境	マッピングタスクの実行に使用する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。
リスナの場所	Db2 変更データのための PWX CDC リーダー要求を処理する PowerExchange リスナがあり、PowerExchange ロgger (LUW 用) を実行するシステムのホスト名または IP アドレス。リスナのポート番号も含まれます。次の形式で値を入力します。host_name は、ホスト名または IP アドレスにできます。 <i>host_name:port_number</i> 以下に例を示します。 DB2RHL1:1467
ユーザー名	PowerExchange リスナセキュリティが有効化されているときに、PowerExchange リスナにアクセスするために使用できるユーザー名。PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にした場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名です。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。
パスワード	[ユーザー名] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
コレクション名	Db2 ソーステーブルの登録が含まれる登録グループの [データベース] フィールド内に指定される Db2 インスタンス名。この値は、接続の使用時に、PWX CDC メタデータアダプタがインポートする抽出マップメタデータをフィルタするために使用されます。
CAPI 接続名	PowerExchange DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される CAPX CAPI_CONNECTION 文の名前。この文には、PWX CDC リーダーが PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) ログファイルからの変更データを抽出するために使用するパラメータが含まれます。PWX CDC リーダーにこのプロパティ値が必要であり、DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される任意のデフォルトの CAPI_CONNECTION 文を無視します。

プロパティ	説明
接続リトライ時間	初期接続の試行の失敗後、PWX CDC リーダーが PowerExchange リスナへの再接続を試行する秒数。接続が再試行時間中に確立できない場合、マッピングタスクに失敗します。デフォルト値は 0 であり、接続の再試行は無効になります。
圧縮	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを圧縮するかどうかを制御します。データを圧縮するには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティは選択されていません。
暗号化	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを暗号化するかどうかを制御します。また、使用する暗号化の種類も指定します。次のいずれかのオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> - なし。暗号化は使用しません。 - AES 128 ビット。128 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 192 ビット。192 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 256 ビット。256 暗号化キーを使用します。 デフォルトは [なし] です。
パーシングサイズ	後続データ用に次の PWX CDC リーダー要求を待機する一時停止までに、ソースシステムが PowerExchange リスナに渡す行数またはキロバイト単位のデータ量。この値を減らすと、セッションのパフォーマンスが向上します。パフォーマンスを最大にするには、0 を使用します。デフォルトである最小値は 0 です。
パーシング単位	[パーシングサイズ] プロパティと一緒に使用する単位の種類。 [行] または [キロバイト] のいずれかを選択します。
マップの場所	抽出マップが含まれるシステムのホスト名または IP アドレスを入力します。ポート番号も含めます。 この値は、PowerExchange リスナが、抽出マップからリモートにある PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) マシン上で実行されている場合に必要です。リスナは、変更データ抽出要求を処理するために、抽出マップへのアクセスを必要とします。 次の形式で値を入力します。host_name は、ホスト名または IP アドレスにできます。 <i>host_name:port_number</i> 以下に例を示します。 DB2UNIX2B:25100 接続をテストして抽出マップメタデータをインポートするための [マップの場所] の値は、[リスナの場所] の値よりも優先されます。
マップの場所のユーザー	[マップの場所] プロパティ内に指定された場所の PowerExchange リスナにアクセスできるユーザー名。
マップの場所のパスワード	[マップの場所のユーザー] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
イベントテーブル	ユーザー定義イベントに基づく変更データ抽出を停止するためにイベントテーブルを作成した場合、イベントテーブルの PowerExchange 抽出マップの名前を入力します。イベントテーブルは、CDC ソースシステム上の Db2 テーブルである必要があります。

プロパティ	説明
Low-Value をスペースで置換	文字データ内の NULL をスペースに置き換えるかどうかを制御します。文字データ内の NULL を置き換えるには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティが選択されています。
カスタムプロパティ	<p>PowerExchange のデフォルト設定よりも優先するために指定できるカスタムプロパティ。セミコロン (;) を区切り文字として使用することで、複数のプロパティを入力できます。通常は、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ、カスタムプロパティを設定します。</p> <p>注: これらのプロパティは、PowerCenter での PWXPC Db2 CDC アプリケーション接続の PWX 上書きオプションと同じです。</p> <p>さらに、PowerExchange クライアントとリモートの PowerExchange リスナとの間で保護された接続を確立するために、次のプロパティを指定できます。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,{Y N})</p> <p>SSL パラメータと {Y N} パラメータを、接続を介したクライアント通信のための設定に追加します。このプロパティは、次の方法のいずれかで入力します。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,Y)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,N)</p> <p>オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> - SSL。クライアント通信に対して SSL 認証を有効にします。 - {Y N}。SSL 認証が有効なときに、クライアント SSL 証明書の検証が発生するかどうかを制御します。「N」を入力すると、クライアント証明書の検証が無効になり、サブジェクト証明書とプライベートキーがロードされるのが防止されます。デフォルトは Y です。 <p>注: DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に証明書がすでに指定されている場合、保護された接続を無効にするために、このパラメータを使用することはできません。コンフィギュレーションファイル内に証明書が指定されていない場合、保護された接続を追加できるだけです。</p>

Db2 for z/OS CDC 接続のプロパティ

Db2 for z/OS CDC 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Db2 for z/OS CDC 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	Db2 for z/OS CDC 接続の名前。この名前は、組織内で一意にする必要があります。接続名には、英数字、スペース、および次の特殊文字を含めることができます。_ . + - 名前の先頭または末尾のスペースはトリミングされ、名前の一部として保存されません。最大長は 100 文字です。接続名では大文字と小文字は区別されません。
説明	Db2 for z/OS CDC 接続の説明。最大長は 255 文字です。
タイプ	接続タイプ。Db2 for z/OS CDC の場合、このタイプは Db2 for zOS CDC である必要があります。

プロパティ	説明
ランタイム環境	マッピングタスクの実行に使用する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。
リスナの場所	Db2 変更データのための PWX CDC リーダー要求を処理する PowerExchange リスナがあり、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を実行するシステムのホスト名または IP アドレス。リスナのポート番号も含まれます。次の形式で値を入力します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。 <i>host_name:port_number</i> 以下に例を示します。 DB2CDC1A:1467
ユーザー名	PowerExchange リスナセキュリティが有効化されているときに、PowerExchange リスナにアクセスするために使用できるユーザー名。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。
パスワード	[ユーザー名] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
コレクション名	Db2 ソーステーブルの登録が含まれる登録グループの [データベースインスタンス名] フィールド内に指定される Db2 for z/OS サブシステム ID またはデータ共有グループ名。この値は、接続の使用時に、PWX CDC メタデータアダプタがインポートする抽出マップメタデータをフィルタするために使用されます。
CAPI 接続名	PowerExchange DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される CAPX CAPI_CONNECTION 文の名前。この文には、PWX CDC リーダーが PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) ログファイルからの変更データを抽出するために使用するパラメータが含まれます。PWX CDC リーダーにこのプロパティ値が必要であり、DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される任意のデフォルトの CAPI_CONNECTION 文を無視します。
接続リトライ期限	初期接続の試行の失敗後、PWX CDC リーダーが PowerExchange リスナへの再接続を試行する秒数。接続が再試行時間中に確立できない場合、マッピングタスクに失敗します。デフォルト値は 0 であり、接続の再試行は無効になります。
圧縮	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを圧縮するかどうかを制御します。データを圧縮するには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティは選択されていません。
暗号化	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを暗号化するかどうかを制御します。また、使用する暗号化の種類も指定します。次のいずれかのオプションを選択します。 - なし。暗号化は使用しません。 - AES 128 ビット。128 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 192 ビット。192 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 256 ビット。256 暗号化キーを使用します。 デフォルトは [なし] です。
ページングサイズ	後続データ用に次の PWX CDC リーダー要求を待機する一時停止までに、ソースシステムが PowerExchange リスナに渡す行数またはキロバイト単位のデータ量。この値を減らすと、セッションのパフォーマンスが向上します。パフォーマンスを最大にするには、0 を使用します。 デフォルトである最小値は 0 です。
ページング単位	[ページングサイズ] プロパティと一緒に使用する単位の種類。 [行] または [キロバイト] のいずれかを選択します。

プロパティ	説明
マップの場所	<p>抽出マップがあるシステムのホスト名または IP アドレス。ポート番号も含めます。この値は、PowerExchange リスナが、抽出マップからリモートにある PowerExchange ロッガー（Linux、UNIX、Windows 用）マシン上で実行されている場合に必要です。リスナは、変更データ抽出要求を処理するために、抽出マップへのアクセスを必要とします。次の形式で値を入力します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。</p> <p><i>host_name:port_number</i></p> <p>以下に例を示します。</p> <p>DB2CDC01:25100</p> <p>注: 接続をテストして抽出マップメタデータをインポートするための 【マップの場所】 の値は、【リスナの場所】 の値よりも優先されます。</p>
マップの場所のユーザー	<p>【マップの場所】 プロパティ内に指定された場所の PowerExchange リスナにアクセスできるユーザー名。</p>
マップの場所のパスワード	<p>【マップの場所のユーザー】 プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。</p>
イベントテーブル	<p>ユーザー定義イベントに基づく変更データ抽出を停止するためにイベントテーブルを作成した場合、イベントテーブルの PowerExchange 抽出マップの名前を入力します。イベントテーブルは、CDC ソースシステム上の Db2 for z/OS テーブルである必要があります。</p>
Low-Value をスペースで置換	<p>文字データ内の NULL をスペースに置き換えるかどうかを制御します。文字データ内の NULL を置き換えるには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティが選択されています。</p>
カスタムプロパティ	<p>PowerExchange のデフォルト設定よりも優先するために指定できるカスタムプロパティ。セミコロン (;) を区切り文字として使用することで、複数のプロパティを入力できます。通常は、グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ、カスタムプロパティを設定します。</p> <p>注: これらのプロパティは、PowerCenter での PWXPC Db2 CDC アプリケーション接続の PWX 上書きオプションと同じです。</p> <p>さらに、PowerExchange クライアントと z/OS 上のリモートの PowerExchange リスナとの間で保護された接続を確立するために、次のプロパティを指定できます。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(ZOSSL,{Y N})</p> <p>ZOSSL パラメータと {Y N} パラメータを、接続を介したクライアント通信のための設定に追加します。このプロパティは、次の方法のいずれかで入力します。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(ZOSSL)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(ZOSSL,Y)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(ZOSSL,N)</p> <p>オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> - ZOSSL。ZOSSL を入力し、PowerExchange クライアントが z/OS ソースシステム上のリモートの PowerExchange リスナと通信するための SSL 認証を有効にします。 - {Y N}。SSL 認証が有効なときに、クライアント SSL 証明書の検証が発生するかどうかを制御します。「N」を入力すると、クライアント証明書の検証が無効になり、サブジェクト証明書とプライベートキーがロードされるのが防止されます。デフォルトは Y です。 <p>注: DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に証明書がすでに指定されている場合、保護された接続を無効にするために、このパラメータを使用することはできません。コンフィギュレーションファイル内に証明書が指定されていない場合、保護された接続を追加できます。</p>

Db2 Warehouse on Cloud 接続のプロパティ

Db2 Warehouse on Cloud 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。
次の表に、Db2 Warehouse on Cloud 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続の名前。
説明	Db2 Warehouse on Cloud 接続の説明。最大長は 255 文字です。
タイプ	接続タイプ。[Db2 Warehouse on Cloud] を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー ID	IBM Db2 Warehouse on Cloud にログインするためのユーザー ID。
パスワード	IBM Db2 Warehouse on Cloud に接続するユーザー ID のパスワード。
ホスト名	IBM Db2 Warehouse on Cloud のホスト名。
ポート番号	IBM Db2 Warehouse サーバーへの接続に使用するネットワークポート番号。
データベース名	接続する IBM Db2 Warehouse のデータベース名。
SSL 接続	Secure Agent が IBM Db2 Warehouse とのセキュアな接続を確立するかどうかを決定します。 IBM Db2 Warehouse とのセキュアな接続を確立するには、SSL を選択します。
高度な接続のプロパティ	オプション。使用する追加接続パラメータ。 接続パラメータをキーと値のペアとして次の形式で指定し、キーと値の各ペアをセミコロンで区切ります。 <param1>=<value>&<param2>=<value>&<param3>=<value>....
スキーマ	メタデータをフェッチする IBM Db2 Warehouse on Cloud のスキーマ名。 注: スキーマ名を指定しないと、Secure Agent は IBM Db2 Warehouse on Cloud 内のすべてのスキーマを参照します。

Domo 接続のプロパティ

Domo 接続を設定するときは、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Domo 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Domo 接続の名前。
説明	接続の説明。説明は、765 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。Domo 接続を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
Customer	Domo アカウントに接続するユーザー名。
開発トークン	Domo アカウントに接続するアクセストークン。
UpdateMode	Domo 内の既存のデータセットにデータを追加するか、置き換えます。APPEND または REPLACE を選択します。

Dropbox 接続のプロパティ

次の表に、Dropbox 接続の接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続の名前。
説明	接続の説明。
タイプ	接続タイプ。一覧から Dropbox を選択します。
Secure Agent	すべての Secure Agent が一覧表示されます。一覧から該当する Secure Agent を選択します。
App キー	Dropbox アカウント名。Dropbox App コンソールから取得した App キーを入力します。
App シークレット	Dropbox アカウントのパスワード。Dropbox App コンソールから取得した App シークレットを入力します。
このシステム上でホストされるエージェント	システムが Secure Agent をホストするかどうかを指定します。

接続プロパティ	説明
承認コード	<ul style="list-style-type: none"> - システムが Secure Agent をホストする場合は該当しません。 - システムが Secure Agent をホストしない場合、アクセストークンを取得するために承認コードを入力する必要があります。ターゲットフォルダを接続パラメータで指定後、接続をテストします。接続のテスト時に、承認コードを指定する接続ページに URL リンクが表示されます。
アクセストークン	接続のテスト後に取得されるアクセストークン。
ターゲットフォルダ	Dropbox がダウンロードするファイルを保存するためのターゲットディレクトリの場所。例; \..\..\Dropbox\Target\
ログgingsの有効化	接続を作成するユーザーをログに記録します。ログgingsを有効化するチェックボックスを選択します。

注: 接続の作成中、Dropbox App 設定ページ内にリダイレクト URI `http://localhost:4000` を指定します。

The screenshot shows the 'Details' tab of the Dropbox App Settings for 'InfalclQa'. The page includes a sidebar with navigation links and a main content area with various settings. Key elements are highlighted with green boxes:

- App key:** qgjj4uo7ytew6b7
- App secret:** rtms1n649b7pmcp
- Redirect URIs:** A list containing `http://localhost:4000` and `https:// (http allowed for localhost)`. The 'Add' button next to the second URI is also highlighted.

Doxee 接続のプロパティ

Doxee 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Doxee 接続のプロパティを示します。

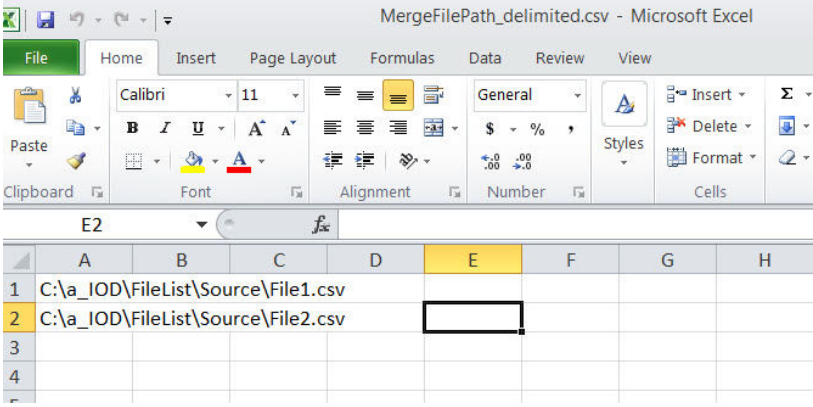
接続プロパティ	説明
ランタイム環境	Doxee にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
プラットフォーム URL	Doxee 環境の URL。
セキュリティトークン	Doxee アプリケーションから生成されたセキュリティトークン。
作業ディレクトリ	Doxee コネクタの作業ディレクトリ。Secure Agent は、ランタイム中に必要なフォルダまたはファイルを作成または削除します。
ソフトウェアサービス	ジョブを処理する Doxee サービス。[オンデマンド本番] または [バッチ本番] のいずれかを選択できます。 デフォルトは [オンデマンド本番] です。
スコープ	スコープによって、Doxee で実行されるジョブの場所が定義されます。[テスト] または [production] のいずれかを選択できます。 [テスト] を選択した場合、作業ディレクトリにファイルが格納されます。 [production] を選択した場合、作業ディレクトリにファイルは格納されません。 デフォルトは [テスト] です。
ユーザー名	Doxee アカウントのユーザー名。

File List 接続のプロパティ

File List 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、File List 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続に固有の名前を入力します。
説明	接続の説明を入力します。
タイプ	一覧から [File List] を選択します。
Secure Agent	一覧から Secure Agent を選択します。
ファイルタイプ	一覧からファイル形式を選択します。接続では、固定長形式と区切り文字ファイル形式がサポートされます。
区切り文字	区切り文字を選択します。デフォルトの区切り文字はカンマです。

接続プロパティ	説明
スキーマファイルのパス	スキーマファイルパスを指定します。Informatica Secure Agent フォルダ内に、スキーマファイルのサンプルがあります。パスは<Secure Agent のインストールディレクトリ>\apps\Data_Integration_Server\ext\deploy_to_main\tomcat\plugins\<プラグイン ID>です。
カスタムヘッダーファイルパス	ヘッダーファイルパスを指定します。header.hdr ファイルは Informatica Secure Agent フォルダ内にあります。パスは<Secure Agent のインストールディレクトリ>\apps\Data_Integration_Server\ext\deploy_to_main\tomcat\plugins\<プラグイン ID>です。
ファイルの先頭の N 行をスキップ	ファイルのマージ中にスキップする行数を指定します。この設定によって、ファイルの先頭から行をスキップできます。
ファイルの末尾の N 行をスキップ	ファイルのマージ中にスキップする行数を指定します。この設定によって、ファイルの末尾から行をスキップできます。
ファイルパスのマージ	<p>これは、File List コネクタを使用してマージする必要がある複数のすべてのファイルの詳細が格納されたファイルです。</p> <p>このファイルの場所のパスを指定します。次の図に、File1 と File2 がマージ対象の 2 つのファイルであるマージファイルのパスを示します。</p>  <p>The screenshot shows a Microsoft Excel spreadsheet titled 'MergeFilePath_delimited.csv'. The spreadsheet has columns A through H and rows 1 through 4. Row 1 contains the path 'C:\a_IOD\FileList\Source\File1.csv' in column A. Row 2 contains the path 'C:\a_IOD\FileList\Source\File2.csv' in column A. The cell in row 2, column E is highlighted with a black border.</p>
バッチごとの行数	パフォーマンスを最適化するために必要なバッチサイズを指定します。デフォルト値は 100 です。
日付形式	日付形式を指定します。デフォルトの日付形式は dd-MM-yyyy HH:mm:ss です。

Eloqua 接続のプロパティ

Eloqua 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Eloqua 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続名を入力します。
説明	接続に関連する説明を入力します。

接続プロパティ	説明
タイプ	一覧から Eloqua を選択します。
Secure Agent	Eloqua へのアクセスに使用される Secure Agent を選択します。
ユーザー名	Eloqua アカウントのユーザー名。
パスワード	Eloqua アカウントのパスワード。
ドメイン名	Eloqua アプリケーションへのアクセスを提供する Eloqua インスタンス名。
特徴	Eloqua アプリケーション内の一覧から特徴を選択します。 デフォルトは [ベース] です。
タイムゾーンオフセット	Eloqua システム内での GMT との相対タイムゾーンを入力します。
エンドポイント URL	エンドポイントの WDSL ファイルパスを入力します。
キャンペーンエンドポイント URL	エンドポイントの WDSL ファイルパスを入力します。 注: 【特徴】 接続プロパティの値として [キャンペーン] を選択した場合に適用されます。
読み取りバッチサイズ	Eloqua 読み取りバッチサイズを入力します。最大読み取りバッチサイズの値は 200 です。 デフォルトは 50 です。
書き込みバッチサイズ	Eloqua 書き込みバッチサイズを入力します。デフォルトは 100 です。
デバッグロガーを有効にする	ログを有効にする場合に選択します。

Eloqua Bulk API 接続のプロパティ

次の表に、Eloqua Bulk API コネクタの接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	システム内にインストールされている必要な Secure Agent。
ベース URL	Eloqua アプリケーションに接続するためのベース URL。 https://secure.eloqua.com をベース URI として入力するか、ベース URI の指定に次の形式を使用できます。 <code>https://<host>.eloqua.com/api/bulk/2.0</code> ここで、<host>は Eloqua インスタンスをホストするポッドに基づいて、secure、www02.secure、または secure.p03 の場合があります。 <code>https://<host>.eloqua.com/api/bulk/2.0</code> の URL では、2.0 はバージョン番号を表します。ベース URL にバージョン番号を指定しない場合、Secure Agent では、デフォルトバージョンを使用すると見なされます。 Eloqua アプリケーションに接続するためのベース URL を特定するには、URL https://community.oracle.com/community/topliners/code-it/blog/2012/11/30/using-the-eloqua-api-determining-endpoint-urls-logineloquacom をクリックします。

接続プロパティ	説明
認証タイプ	Eloqua アプリケーションへの接続に必要なユーザー認証のタイプです。
ドメイン名	必要なドメイン名。
ユーザー名	Eloqua アカウントのユーザー名。
パスワード	Eloqua アカウントのパスワード。
ClientID	Eloqua への接続の OAuth 2.0 認証を完了するためのクライアント ID。OAuth 2.0 認証タイプを選択した場合、クライアント ID を入力する必要があります。
クライアントシークレット	Eloqua への接続の OAuth 2.0 認証を完了するためのクライアント秘密鍵。OAuth 2.0 認証タイプを選択した場合、クライアント秘密鍵を入力する必要があります。
タイムゾーンオフセット	Eloqua システム内での GMT との相対タイムゾーン。
デバッグロガーを有効にする	SOAP 要求と応答をセッションログに登録するために、デバッグロガーを有効にできます。
プレビュー用のデータの取得	Eloqua Bulk API オブジェクト内の最初の 5 列の最初の 10 行をプレビューできます。 デフォルトではオンに設定されています。
アクティビティまたはカスタムフィールド設定	ソース内およびターゲット内のコンタクトオブジェクトとアカウントオブジェクトのアクティビティオブジェクトおよびカスタムフィールドを JSON 形式で使用できます。

Eloqua REST 接続のプロパティ

Eloqua REST 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Eloqua REST 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	Eloqua にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
ベース URL	Eloqua アプリケーションサーバーのエンドポイント URL。ベース URL と一緒にクエリパラメータを指定しないでください。 例: https://rest.apisandbox.eloqua.com
ユーザー名	Eloqua アプリケーションのユーザー名。
ドメイン	Eloqua アプリケーションのドメイン。
パスワード	Eloqua アプリケーションのパスワード。

プロパティ	説明
クライアント ID	Eloqua アプリケーションで作成されるクライアント ID。 【認証タイプ】として【OAuth 2.0】を選択した場合、クライアント ID を入力する必要があります。
クライアントシークレット	Eloqua アプリケーションで作成されるクライアント秘密鍵。 【認証タイプ】として【OAuth 2.0】を選択した場合、クライアント秘密鍵を入力する必要があります。
認証タイプ	Eloqua アプリケーションへの接続に必要なユーザー認証のタイプです。Eloqua REST コネクタが Eloqua アプリケーションにログインするために使用する必要がある認証タイプを選択します。 次の認証タイプを選択できます。 - 基本認証 - OAuth 2.0 デフォルトは OAuth 2.0 です。
デバッグロガーを有効にする	マッピングをデバッグするためのセッションログ内のメッセージを表示します。 デフォルトは false です。
Eloqua Swagger	Eloqua REST 接続に使用する Swagger ファイル。【Eloqua Swagger API V1_2017_09_06】を選択します。

FileIO 接続のプロパティ

FileIO 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、FileIO 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続に固有の名前を入力します。
説明	接続に関連する説明を入力します。
タイプ	一覧から【FileIO】を選択します。
Secure Agent	一覧から該当する Secure Agent を選択します。
親ディレクトリ	親ディレクトリパスを入力します。親ディレクトリは、読み取り操作および書き込み操作を実行するためのファイルが格納されたフォルダです。親ディレクトリには、空の .infaccess ファイルが格納される必要があります。 親ディレクトリ内に、inprocess、success、error 以外の任意の名前でフォルダを作成します。例えば、read、write、test などのフォルダを作成できます。空のファイルは、タスク内でこの接続をソースまたはターゲットとして選択するときに、オブジェクトとして表示されます。

接続プロパティ	説明
ファイルコンテンツを次の形式で処理	<p>ファイルコンテンツを処理するための選択可能なオプションの一覧から、必要なオプションを選択します。次のファイル処理オプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - バイナリ: バイナリを選択した場合、同期タスクの【フィールドマッピング】タブ内で FileContentAsBinary をマップする必要があります。 - base 64 のエンコードされた文字列: デフォルトでは、このオプションが選択されています。このオプションを選択した場合、同期タスクの【フィールドマッピング】タブ内で FileContentAsBase64String をマップする必要があります。
ターゲットファイルの上書き	<p>ターゲットファイルの上書きを有効にするには、このボックスを選択します。そうしないと、カウンタを使用した増分の命名順で、同じ名前を持つファイルが作成されます。例えば、ターゲットファイルの上書きオプションを有効にしないと、既存のファイル ABCD は上書きされません。代わりに、新しい ABCD(1)ファイルが作成されます。</p>
ソースファイルの自動アーカイブ	<p>ソースファイルの自動アーカイブを有効にするには、このボックスを選択します。このオプションによって、ファイルの処理後、ソースディレクトリからファイルを移動できます。</p>
処理中のディレクトリ	<p>ファイルの処理に使用されるディレクトリパスを指定します。デフォルトでは、親ディレクトリと見なされます。</p>
成功ディレクトリ	<p>処理後にファイルが移動されるディレクトリパスを指定します。デフォルトでは、親ディレクトリと見なされます。成功ディレクトリパスは、【ソースファイルの自動アーカイブ】オプションが有効な場合にのみ指定します。</p>
エラーディレクトリ	<p>エラーディレクトリパスを指定します。ファイルの処理中に問題やエラーが発生する場合があります。このようなファイルは、エラーディレクトリに移動されます。</p>

File Processor 接続のプロパティ

File Processor 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、File Processor 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ソースファイルディレクトリ	転送するファイルが含まれる場所。
ターゲットファイルディレクトリ	転送されたファイルを配置する場所。
ファイルの選択	転送するファイル。フィールドに基づいてファイルを選択することができます。
ファイルパターン	<p>転送するファイルのパターン。例えば、日付パターンに基づいてファイルを選択する場合は、【ファイルパターン】フィールドに日付形式を DD/MM/YYYY として指定できます。</p> <p>注: 【ファイルの選択】接続プロパティから【すべて】を選択した場合は、【ファイルパターン】フィールドは適用できません。</p>

接続プロパティ	説明
日数計算	<p>日数計算を使用して、指定された日付より前または指定された日付の後に作成または変更されたファイルを選択します。[日付パターンを含む]に基づいてファイルを選択し、指定された日付の前後に変更されたファイルを選択できるように日数計算の値を指定します。値を日数で指定します。月と年で値を指定することはできません。</p> <p>例えば、[日付パターンを含む]に基づいてファイルを選択した場合は、データフィルタを使用して、LastModDate を DD/MM/YYYY 形式で 02/02/2016 と指定し、日数計算を-1 と指定します。01/02/2016 までに変更されたファイルが選択されます。</p>
PassKey	<p>FTP サーバーまたは SFTP サーバーに接続するための資格情報。例えば、FTP サーバーまたは SFTP サーバーのパスワードおよびパスフレーズを値 passkey1 および passkey2 として指定できます。</p>

フラットファイル接続

フラットファイル接続を使用すると、フラットファイルの作成、アクセス、保存を実行できます。マッピングタスク、PowerCenter タスク、レプリケーションタスク、同期タスクでは、フラットファイル接続を使用できます。Linux 上で動作する Secure Agent を選択した場合は、フラットファイルターゲットに Windows ディレクトリを指定することはできません。

フラットファイル接続を選択する際には、フラットファイルの書式設定オプションを選択します。ソース、バックアップ、またはターゲットの各トランスフォーメーションの書式設定オプションを選択する際には、フラットファイルが区切り形式なのか固定長なのかを指定します。フラットファイルが固定長の場合は、設定した固定長形式のリストからいずれかの固定長形式を選択します。固定長フラットファイルを使用する予定の場合は、Mapping Designer で固定長フラットファイルを選択する前に少なくとも 1 つの固定長形式を作成しておく必要があります。

フラットファイル接続のプロパティ

次の表に、フラットファイル接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	フラットファイルにアクセスする際に使用する Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
ディレクトリ	<p>フラットファイルの保存先ディレクトリ。完全ディレクトリを入力するか、[参照] をクリックして目的のディレクトリを特定し選択します。</p> <p>最大長は 100 文字です。ディレクトリ名には、英数字、スペース、および次の特殊文字を含めることができます。</p> <p>\\: _ ~</p> <p>ディレクトリは、この接続タイプのサービス URL です。</p> <p>Windows では、[ディレクトリの参照] ダイアログボックスにマッピング済みドライブは表示されません。[マイネットワークプレイス] を参照して目的のディレクトリを特定するか、次の形式でディレクトリ名を入力します: \\<サーバー名>\<ディレクトリパス>。ネットワークディレクトリが表示されない場合は、Secure Agent サービスのログインを設定します。</p> <p>フラットファイルの名前を含めないでください。ファイル名はタスクを作成するときに指定します。</p>
[参照] ボタン	フラットファイルの保存先ディレクトリを特定および選択するために使用します。
日付形式	フラットファイルの日付フィールドの日付形式。デフォルトの日付形式は次のとおりです。 MM/dd/yyyy HH:mm:ss
コードページ	<p>フラットファイルをホストしているシステムのコードページ。次のいずれかのコードページを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - MS Windows Latin 1。ISO 8859-1 Western European データの場合に選択します。 - UTF-8。Unicode データの場合に選択します。 - Shift-JIS。ダブルバイト文字データの場合に選択します。 - ISO 8859-15 Latin 9 (Western European)。 - ISO 8859-2 Eastern European。 - ISO 8859-3 Southeast European。 - ISO 8859-5 Cyrillic。 - ISO 8859-9 Latin 5 (Turkish)。 - IBM EBCDIC International Latin-1。 - Japanese EUC (with \ <-> Yen mapping) - IBM EBCDIC Japanese - IBM EBCDIC Japanese CP939 - PC Japanese SJIS-78 syntax (IBM-942) - PC Japanese SJIS-90 (IBM-943) - MS Windows Traditional Chinese, superset of Big 5 - Taiwan Big-5 (w/o euro update) - Chinese EUC - ISO 8859-8 Hebrew - PC Hebrew (old) - PC Hebrew (w/o euro update) - EBCDIC Hebrew (updated with new sheqel, control characters) <p>注: Shift-JIS コードページと UTF データオブジェクトでフラットファイル接続を使用する場合は、必ず Unicode を完全にサポートするフォントをインストールしてください。</p>

Linux でのフラットファイル接続のロケールの設定

Linux 上で、フラットファイル接続を使用する同期タスクまたはレプリケーションタスクでマルチバイトデータをサポートするには、デフォルトのロケールを UTF-8 に設定する必要があります。

1. 現在のロケールを表示するには、シェルコマンドラインに、「locale」と入力します。
2. デフォルトのロケールを UTF-8 に設定する場合は、次の例を参照してください。
 - bash 系 UNIX シェルの場合:
`export LC_ALL=en_US.UTF-8`
 - csh 系 UNIX シェルの場合:
`setenv LC_ALL en_US.UTF-8`
3. Secure Agent を再起動します。

FTP/SFTP 接続

File Transfer Protocol (FTP) 接続を使用すると、FTP を使用してソースファイルおよびターゲットファイルにアクセスできます。Secure File Transfer Protocol (SFTP) 接続を使用すると、SSH などの安全なプロトコルを使用して、ソースファイルとターゲットファイルにアクセスできます。

FTP/SFTP 接続を設定する際には、次のディレクトリを指定します。

ローカルディレクトリ

ソースファイルまたはターゲットファイルのコピーを保存する Secure Agent のローカルディレクトリ。

リモートディレクトリ

ソースまたはターゲットとして使用するファイルの場所。

Informatica Intelligent Cloud Services は、リモートディレクトリではなく、ローカルディレクトリにあるファイルを検証します。FTP/SFTP 接続を設定する際には、ローカルディレクトリに、すべてのソースファイルおよびターゲットファイルの有効なコピーが保存されていることを確認してください。ユーザーが FTP/SFTP 接続を使用するタスクを設定する場合、Informatica Intelligent Cloud Services は、ローカルファイルのファイル構造を使用して、タスクのソースまたはターゲットを定義します。ローカルファイルのファイル構造は、リモートディレクトリにあるソースファイルまたはターゲットファイルと一致していなければなりません。また、Informatica Intelligent Cloud Services はローカルファイルを使用してデータプレビューも生成します。ローカルファイルのデータがリモートディレクトリにあるソースファイルまたはターゲットファイルと一致しない場合は、データプレビューによって間違った結果が表示される可能性があります。

Informatica Intelligent Cloud Services は、FTP/SFTP ターゲット接続を使用したデータ統合タスクを実行する際に、そのタスクに定義されているターゲットに基づいてターゲットファイルを作成します。Informatica Intelligent Cloud Services は、タスクが完了すると、ターゲットファイルをリモートディレクトリに書き込んで、既存のファイルを上書きします。

FTP/SFTP 接続のプロパティ

次の表に、FTP/SFTP 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	ファイルにアクセスする際に使用する Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
ユーザー名	FTP サーバーにログインするために使用するユーザー名。
パスワード	FTP サーバーにログインするために使用するユーザー名に対するパスワードです。
ホスト	FTP/SFTP ホストのホスト名または IP アドレス。
ポート	FTP/SFTP 接続に接続するとき使用するネットワークポート番号。デフォルトポートは、FTP の場合は 21、SFTP の場合は 22 です。
ローカルディレクトリ	ローカルファイルを保存するローカルマシン上のディレクトリ。ローカルマシンでは、対応するタスクを実行するために使用する Secure Agent も稼働している必要があります。ローカルディレクトリを入力するか、[参照] ボタンを使用してローカルディレクトリを選択します。
リモートディレクトリ	リモートフラットファイルが保存されている FTP/SFTP ホスト上のディレクトリ。FTP/SFTP サーバーによっては、ディレクトリを入力するためのオプションが限定されている場合があります。詳細については、FTP/SFTP サーバーのドキュメントを参照してください。
日付形式	フラットファイルの日付フィールドの日付形式。 デフォルトの日付形式は、MM/dd/yyyy HH:mm:ss です。
コードページ	ソースまたはターゲットのフラットファイルが存在するシステムと互換性のあるコードページ。次のいずれかのコードページを選択します。 <ul style="list-style-type: none">- MS Windows Latin 1。ISO 8859-1 Western European データの場合に選択します。- UTF-8。Unicode データの場合に選択します。- Shift-JIS。ダブルバイト文字データの場合に選択します。- ISO 8859-15 Latin 9 (Western European)。- ISO 8859-2 Eastern European。- ISO 8859-3 Southeast European。- ISO 8859-5 Cyrillic。- ISO 8859-9 Latin 5 (Turkish)。- IBM EBCDIC International Latin-1。- Japanese EUC (with \ <-> Yen mapping- IBM EBCDIC Japanese- IBM EBCDIC Japanese CP939- PC Japanese SJIS-78 syntax (IBM-942)- PC Japanese SJIS-90 (IBM-943)- MS Windows Traditional Chinese, superset of Big 5- Taiwan Big-5 (w/o euro update)- Chinese EUC- ISO 8859-8 Hebrew- PC Hebrew (old)- PC Hebrew (w/o euro update)- EBCDIC Hebrew (updated with new sheqel, control characters)
これはセキュアな FTP 接続です	接続がセキュアかどうかを示します。SFTP 接続を作成する場合に選択します。

FTP/SFTP 接続のルールとガイドライン

FTP/SFTP 接続に関するルールおよびガイドラインは、次のとおりです。

- Informatica Intelligent Cloud Services はファイルへの書き込み中にターゲットファイルをロックしません。ファイルの破損を防ぐため、いかなるときでも複数のタスクが同時に 1 つのターゲットファイルに書き込むことがないことを確認してください。
- ローカルターゲットファイルとリモートターゲットファイルのメタデータが異なっている場合、Informatica Intelligent Cloud Services は、実行時に、リモートターゲットファイルのメタデータをローカルターゲットファイルで上書きします。Informatica Intelligent Cloud Services
- ローカルターゲットファイルにロードされた行の行数を確認するには、**[すべてのジョブ]** ページまたは **[自分のジョブ]** からジョブの詳細を開きます。
- Windows では、**[ディレクトリの参照]** ダイアログボックスを使用してマッピング済みドライブ上の FTP/SFTP ディレクトリを選択することはできません。ネットワークディレクトリにアクセスするには、**[マイネットワーク]** を探します。次の形式でディレクトリを入力することもできます。
`\\<server_name>\<directory_path>`
[ディレクトリの参照] ダイアログボックスに **[マイネットワーク]** が表示されない場合は、Secure Agent サービスのネットワークログインを設定する必要があります。
- FTP/SFTP 接続のエラーメッセージは、FTP または SFTP のみを参照していることがあります。FTP または SFTP を参照しているエラーメッセージは FTP/SFTP 接続のエラーメッセージと理解してください。

Google Analytics 接続のプロパティ

Google Analytics 接続を作成するには、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Google Analytics 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
サービスアカウント ID	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある <code>client_email</code> 値を指定します。
サービスアカウントキー	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある <code>private_key</code> 値を指定します。
APIVersion	Google Analytics レポートからの読み取りに使用される API。 【Core Reporting API v3】を選択します。 注: Google Analytics コネクタは、Analytics Reporting API v4 をサポートしていません。

Google BigQuery 接続のプロパティ

Google BigQuery 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Google BigQuery 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	接続の名前。この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。このプロパティは、接続を作成した後に変更できます。名前は 128 文字以内で指定し、空白および以下の特殊文字は使用できません。~`!\$%^&*()-+={[}] \:;'"<, >./?
説明	オプション。接続の説明。説明は、4,000 文字を超えることはできません。
タイプ	Google BigQuery の接続タイプ。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
サービスアカウント ID	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある client_email 値を指定します。
サービスアカウントキー	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある private_key 値を指定します。
接続モード	Google BigQuery との間でのデータの読み書きに使用するモード。 次のいずれかの接続モードを選択します。 <ul style="list-style-type: none">- 簡易。レコードデータ型フィールド内の各フィールドを、マッピング内の個別のフィールドとしてフラット化します。- 混合。レコードデータ型のフィールドを含む Google BigQuery テーブル内のすべての最上位のフィールドを表示します。Google BigQuery コネクタは、最上位のレコードデータ型のフィールドを、マッピング内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。- 複合。Google BigQuery テーブル内のすべての列を、マッピング内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。 デフォルトは [簡易] です。
スキーマ定義のファイルパス	Secure Agent が、Google BigQuery テーブルのサンプルスキーマと一緒に JSON ファイルを作成する必要がある場所の Secure Agent マシン上のディレクトリを指定します。JSON ファイル名は、Google BigQuery テーブル名と同じです。 または、Secure Agent が、Google BigQuery テーブルのサンプルスキーマと一緒に JSON ファイルを作成する必要がある場所の Google Cloud Storage 内のストレージパスを指定します。JSON ファイルは、Google Cloud Storage 内の指定したパスからローカルマシンにダウンロードできます。 複合接続モードを次のシナリオで設定する場合、スキーマ定義ファイルが必要です。 <ul style="list-style-type: none">- リレーショナルソースからのデータの読み取りと、Google BigQuery ターゲットへのデータの書き込みのために、マッピング内に階層ビルドトランスフォーメーションを追加する場合。- Google BigQuery ソースからのデータの読み取りと、リレーショナルターゲットへのデータの書き込みのために、マッピング内に階層パーサトランスフォーメーションを追加する場合。

プロパティ	説明
プロジェクト ID	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある <code>project_id</code> 値を指定します。 同じサービスアカウントを使用して複数のプロジェクトを作成した場合、接続先のデータセットが含まれるプロジェクトの ID を入力します。
データセット ID	接続先のソーステーブルとターゲットテーブルが含まれるデータセットの名前。
ストレージパス	このプロパティは、大量のデータを読み書きするときに適用されます。 データを一時的に格納するために、Secure Agent がローカルステージファイルを作成する場所の Google Cloud Storage 内のパス。 バケット名、またはバケット名とフォルダ名のいずれかを入力できます。 例えば、 <code>gs://<bucket_name></code> または <code>gs://<bucket_name>/<folder_name></code> を入力します。

接続モード

Google BigQuery 接続は、次のいずれかの接続モードを使用するように設定できます。

簡易モード

簡易モードを使用する場合、Google BigQuery コネクタは、レコードデータ型フィールド内の各フィールドを、フィールドマッピング内の個別のフィールドとしてフラット化します。

混合モード

混合モードを使用する場合、Google BigQuery コネクタは、レコードデータ型のフィールドを含む Google BigQuery テーブル内のすべての最上位のフィールドを表示します。Google BigQuery コネクタは、最上位のレコードデータ型のフィールドを、フィールドマッピング内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。

複合モード

複合モードを使用する場合、Google BigQuery は、Google BigQuery テーブル内のすべての列を、フィールドマッピング内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。

接続モードの例

Google BigQuery コネクタは、Google BigQuery 接続に対して設定する接続モードに基づいて、Google BigQuery データを読み書きします。

プリミティブフィールドとレコードデータ型の **Address** フィールドを持つ Google BigQuery 内に、Customers テーブルがあります。この Address フィールドには、2 つのプリミティブサブフィールドである、文字列データ型の **City** と **State** が含まれます。

次の図に、Google BigQuery 内の Customers テーブルのスキーマを示します。

ID	INTEGER	NULLABLE
Name	STRING	NULLABLE
Address	RECORD	NULLABLE
Address.City	STRING	NULLABLE
Address.State	STRING	NULLABLE
Mobile	STRING	REPEATED
Totalpayments	FLOAT	NULLABLE
age	INTEGER	REPEATED

次の表に、Google BigQuery 内の Customers テーブルのデータを示します。

ID	名前	Address.City	Address.State	Mobile	Totalpayments
14	John	LOS ANGELES	CALIFORNIA	+1-9744884744	18433.90
				+1-8267389993	
29	Jane	BOSTON	MANHATTAN	+1-8789390309	28397.33
				+1-9876553784	
				+1-8456437848	

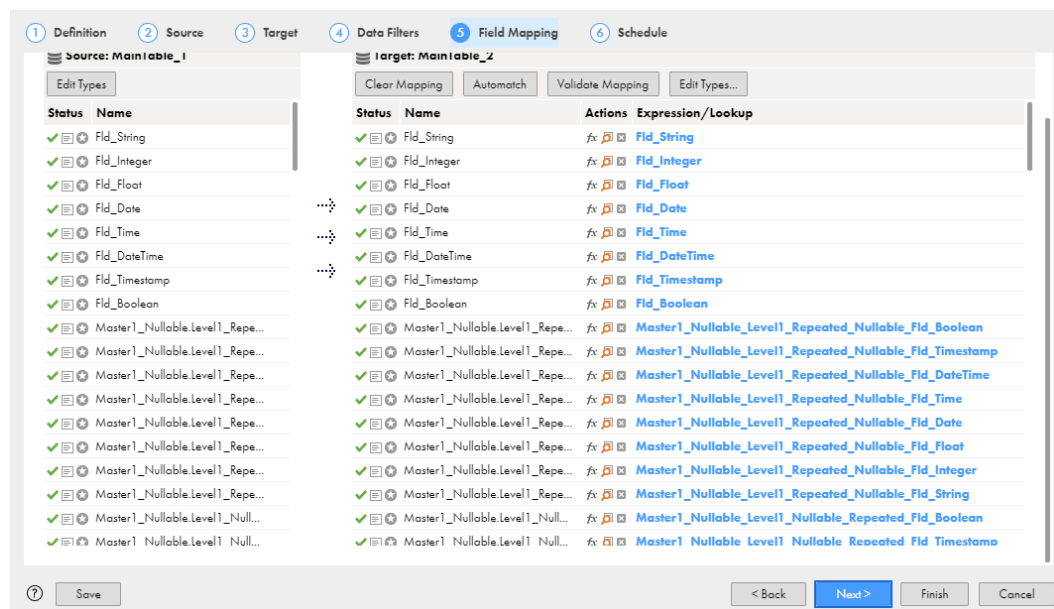
簡易モード

簡易モード接続を使用する場合、Google BigQuery コネクタは、レコードデータ型フィールド内の各フィールドを、【フィールドマッピング】タブ内の個別のフィールドとしてフラット化します。

次の表に、Customers テーブル内の Address Record フィールドの各サブフィールドに対応する Address_City と Address_State の 2 つの個別のフィールドを示します。

ID	名前	Address_City	Address_State	Mobile	Totalpayments
14	John	LOS ANGELES	CALIFORNIA	+1-9744884744	18433.90
14	John	LOS ANGELES	CALIFORNIA	+1-8267389993	18433.90
29	Jane	BOSTON	MANHATTAN	+1-8789390309	28397.33
29	Jane	BOSTON	MANHATTAN	+1-9876553784	28397.33
29	Jane	BOSTON	MANHATTAN	+1-8456437848	28397.33

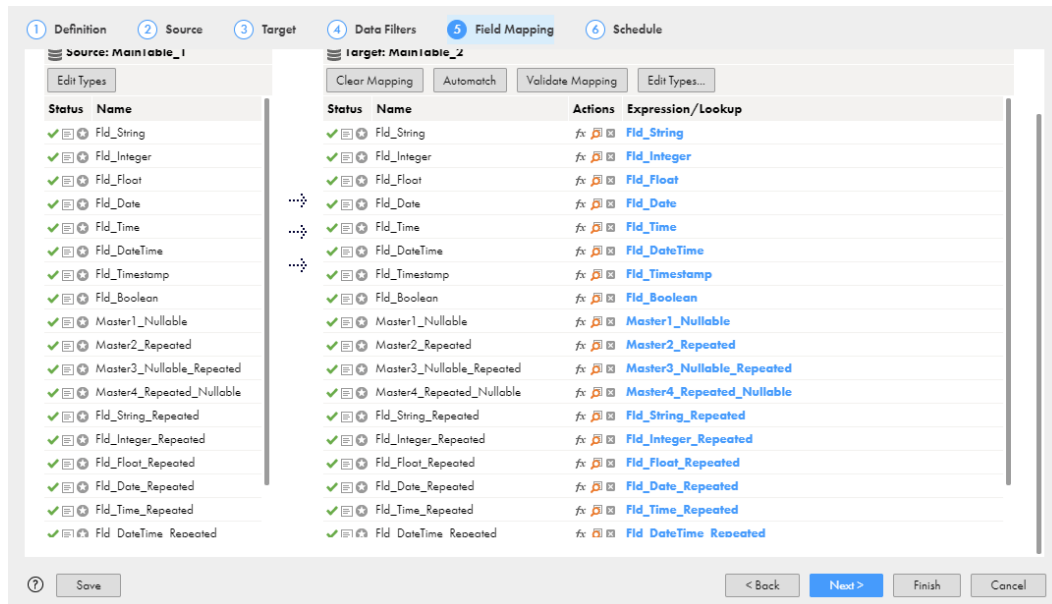
次の図に、同期タスクの【フィールドマッピング】タブ内のフィールドを示します。



混合モード

混合モード接続を使用する場合、Google BigQuery コネクタは、レコードデータ型のフィールドを含む Google BigQuery テーブル内のすべての最上位のフィールドを表示します。Google BigQuery コネクタは、最上位のレコードデータ型のフィールドを、【フィールドマッピング】タブ内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。

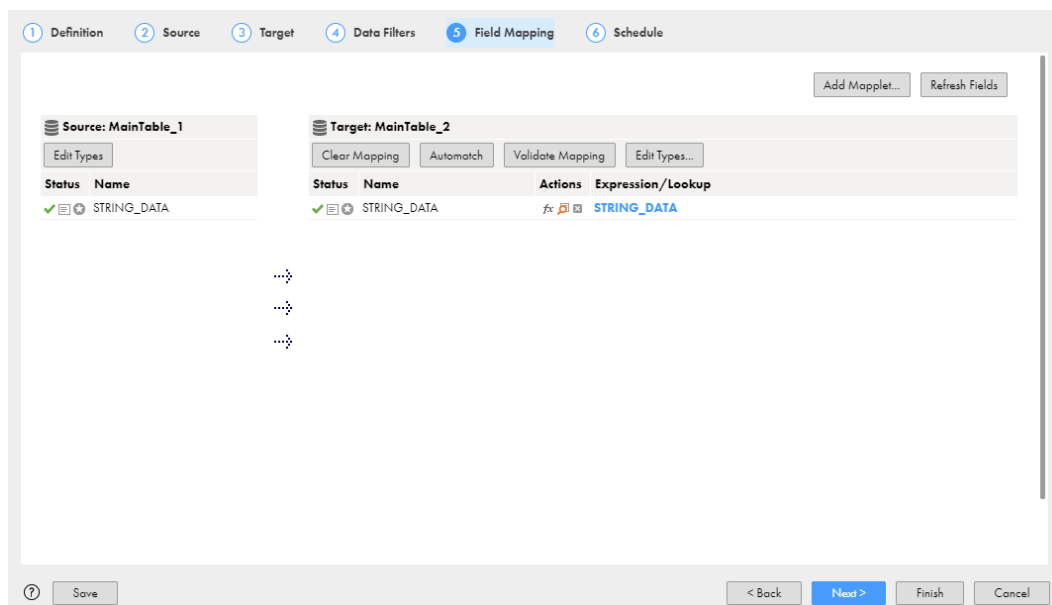
次の図に、同期タスクの【フィールドマッピング】タブを示します。



複合モード

複合モード接続を使用する場合、Google BigQuery コネクタは、Google BigQuery テーブル内のすべての列を、[フィールドマッピング] タブ内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。

次の図に、同期タスクの [フィールドマッピング] タブ内の [STRING_DATA] フィールドを示します。



Google BigQuery 接続モードのルールとガイドライン

簡易モード

Google BigQuery 接続を設定して簡易接続モードを使用する場合は、次のルールとガイドラインを考慮します。

- 繰り返しカラムが含まれる Google BigQuery ターゲットテーブルは、**[ターゲットの作成]** オプションを使用して作成できません。
- Google BigQuery ソーステーブルに繰り返しカラムが含まれる場合は、これらのカラムに対してデータフィルタを設定できません。
- Google BigQuery テーブルに複数の繰り返しカラムが含まれる場合は、データをプレビューできません。
- Google BigQuery ターゲットテーブルに繰り返しカラムが含まれる場合は、これらのカラムに対して更新操作や削除操作を設定できません。
- Record データ型のカラムや繰り返しカラムに更新/挿入操作を設定できません。
- Google BigQuery ソースからデータを読み取るときは、1 つのマッピングに複数の繰り返しカラムをマッピングすることはできません。繰り返しカラムごとに、複数のマッピングを作成する必要があります。

混合モード

Google BigQuery 接続を設定して混合接続モードを使用する場合は、次のルールとガイドラインを考慮します。

- データはプレビューできません。
- Google BigQuery ターゲットテーブルは、**[ターゲットの作成]** オプションを使用して作成できません。
- Google BigQuery ソーステーブルに、Record データ型のカラムと繰り返しカラムが含まれる場合は、これらのカラムに対してデータフィルタを設定できません。
- Record データ型のカラムや繰り返しカラムに、更新、更新/挿入、および削除の操作を設定できません。
- 詳細ターゲットプロパティのステージングファイルのデータ形式として、JSON（改行区切り）形式を選択する必要があります。
- ステージングファイルのデータ形式として CSV 形式を使用できません。詳細ターゲットプロパティの次の CSV 形式オプションは、適用されません。
 - 引用符付きの改行の許可
 - フィールド区切り文字
 - ジャグ行の許可

複合モード

Google BigQuery 接続を設定して複合接続モードを使用する場合は、次のルールとガイドラインを考慮します。

- データはプレビューできません。
- Google BigQuery ターゲットテーブルは、**[ターゲットの作成]** オプションを使用して作成できません。
- Google BigQuery ソース接続を設定して複合接続モードを使用する場合は、ソースにデータフィルタを設定できません。
- 更新、更新/挿入、および削除の操作は設定できません。
- 詳細ターゲットプロパティのステージングファイルのデータ形式として、JSON（改行区切り）形式を選択する必要があります。

- ステージングファイルのデータ形式として CSV 形式を使用できません。詳細ターゲットプロパティの次の CSV 形式オプションは、適用されません。
 - 引用符付きの改行の許可
 - フィールド区切り文字
 - ジャグ行の許可
- Google BigQuery ソースには、キー範囲パーティションを使用できません。

Google BigQuery V2 接続のプロパティ

Google BigQuery V2 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Google BigQuery V2 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	接続の名前。この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。このプロパティは、接続を作成した後に変更できます。名前は 128 文字以内で指定し、空白および以下の特殊文字は使用できません。~`!\$%^&*()-+={[}] \:;'"<, >. ? /
説明	オプション。接続の説明。説明は、4,000 文字を超えることはできません。
タイプ	Google Big Query V2 接続タイプ。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
サービスアカウント ID	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある client_email 値を指定します。
サービスアカウントキー	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある private_key 値を指定します。
プロジェクト ID	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある project_id 値を指定します。 同じサービスアカウントを使用して複数のプロジェクトを作成した場合、接続先のデータセットが含まれるプロジェクトの ID を入力します。
ストレージパス	このプロパティは、大量のデータを読み書きするときに適用されます。 データを一時的に格納するために、Secure Agent がローカルステージファイルを作成する場所の Google Cloud Storage 内のパス。 バケット名、またはバケット名とフォルダ名のいずれかを入力できます。 例えば、gs://<bucket_name>または gs://<bucket_name>/<folder_name>を入力します。

プロパティ	説明
接続モード	<p>Google BigQuery との間でのデータの読み書きに使用するモード。</p> <p>次のいずれかの接続モードを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 簡易。レコードデータ型フィールド内の各フィールドを、マッピング内の個別のフィールドとしてフラット化します。 - 混合。レコードデータ型のフィールドを含む Google BigQuery テーブル内のすべての最上位のフィールドを表示します。Google BigQuery V2 コネクタは、最上位のレコードデータ型のフィールドを、マッピング内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。 - 複合。Google BigQuery テーブル内のすべての列を、マッピング内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。 <p>デフォルトは [簡易] です。</p>
スキーマ定義のファイルパス	<p>Secure Agent が、Google BigQuery テーブルのサンプルスキーマと一緒に JSON ファイルを作成する必要がある場所の Secure Agent マシン上のディレクトリを指定します。JSON ファイル名は、Google BigQuery テーブル名と同じです。</p> <p>または、Secure Agent が、Google BigQuery テーブルのサンプルスキーマと一緒に JSON ファイルを作成する必要がある場所の Google Cloud Storage 内のストレージパスを指定します。JSON ファイルは、Google Cloud Storage 内の指定したパスからローカルマシンにダウンロードできます。</p> <p>複合接続モードを次のシナリオで設定する場合、スキーマ定義ファイルが必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> - リレーショナルソースからのデータの読み取りと、Google BigQuery ターゲットへのデータの書き込みのために、マッピング内に階層ビルダトランスフォーメーションを追加する場合。 - Google BigQuery ソースからのデータの読み取りと、リレーショナルターゲットへのデータの書き込みのために、マッピング内に階層パーサトランスフォーメーションを追加する場合。
従来の SQL をカスタムクエリに使用	<p>このオプションは、カスタムクエリを定義するための従来の SQL を使用する場合に選択します。このオプションを選択しない場合、カスタムクエリの定義に標準 SQL を使用する必要があります。</p>
カスタムクエリのデータセット名	<p>カスタムクエリを定義する際は、Google BigQuery データセットを指定する必要があります。</p>

接続モード

Google BigQuery V2 接続は、次のいずれかの接続モードを使用するように設定できます。

簡易モード

簡易モードを使用する場合、Google BigQuery V2 コネクタは、レコードデータ型フィールド内の各フィールドを、フィールドマッピング内の個別のフィールドとしてフラット化します。

混合モード

混合モードを使用する場合、Google BigQuery V2 コネクタは、レコードデータ型のフィールドを含む Google BigQuery テーブル内のすべての最上位のフィールドを表示します。Google BigQuery V2 コネクタは、最上位のレコードデータ型のフィールドを、フィールドマッピング内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。

複合モード

複合モードを使用する場合、Google BigQuery は、Google BigQuery テーブル内のすべての列を、フィールドマッピング内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。

接続モードの例

Google BigQuery V2 コネクタは、Google BigQuery V2 接続に対して設定する接続モードに基づいて、Google BigQuery データを読み書きします。

プリミティブフィールドとレコードデータ型の **Address** フィールドを持つ Google BigQuery 内に、Customers テーブルがあります。この Address フィールドには、2つのプリミティブサブフィールドである、文字列データ型の **City** と **State** が含まれます。

次の図に、Google BigQuery 内の Customers テーブルのスキーマを示します。

ID	INTEGER	NULLABLE
Name	STRING	NULLABLE
Address	RECORD	NULLABLE
Address.City	STRING	NULLABLE
Address.State	STRING	NULLABLE
Mobile	STRING	REPEATED
Totalpayments	FLOAT	NULLABLE
age	INTEGER	REPEATED

次の表に、Google BigQuery 内の Customers テーブルのデータを示します。

ID	名前	Address.City	Address.State	Mobile	Totalpayments
14	John	LOS ANGELES	CALIFORNIA	+1-9744884744	18433.90
				+1-8267389993	
29	Jane	BOSTON	MANHATTAN	+1-8789390309	28397.33
				+1-9876553784	
				+1-8456437848	

簡易モード

簡易モード接続を使用する場合、Google BigQuery V2 コネクタは、レコードデータ型フィールド内の各フィールドを、**【フィールドマッピング】** タブ内の個別のフィールドとしてフラット化します。

次の表に、Customers テーブル内の Address Record フィールドの各サブフィールドに対応する Address_City と Address_State の 2 つの個別のフィールドを示します。

ID	名前	Address_City	Address_State	Mobile	Totalpayments
14	John	LOS ANGELES	CALIFORNIA	+1-9744884744	18433.90
14	John	LOS ANGELES	CALIFORNIA	+1-8267389993	18433.90
29	Jane	BOSTON	MANHATTAN	+1-8789390309	28397.33
29	Jane	BOSTON	MANHATTAN	+1-9876553784	28397.33
29	Jane	BOSTON	MANHATTAN	+1-8456437848	28397.33

次の図に、ターゲットトランスフォーメーションの **【フィールドマッピング】** タブ内のフィールドを示します。

Field map options: Automatic Note: This option will automatically map any fields added later by name. Options

Incoming Fields: (112 of 112 mapped) Find

Field Name	Mapped Field
Fld_String	Fld_String
Fld_Integer	Fld_Integer
Fld_Float	Fld_Float
Fld_Date	Fld_Date
Fld_Time	Fld_Time
Fld_DateTime	Fld_DateTime
Fld_Timestamp	Fld_Timestamp
Fld_Boolean	Fld_Boolean
Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Boolean	Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Boolean
Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Timestamp	Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Timestamp
Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_DateTime	Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_DateTime
Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Time	Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Time
Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Date	Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Date
Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Float	Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Float
Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Integer	Master1_Nullable_Level1_Repeated_Nullable_Fld_Integer

混合モード

混合モード接続を使用する場合、Google BigQuery V2 コネクタは、レコードデータ型のフィールドを含む Google BigQuery テーブル内のすべての最上位のフィールドを表示します。Google BigQuery V2 コネクタは、最上位のレコードデータ型のフィールドを、**【フィールドマッピング】** タブ内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。

次の図に、ターゲットトランスフォーメーションの **【フィールドマッピング】** タブを示します。

Field map options: Automatic Note: This option will automatically map any fields added later by name. Options

Incoming Fields: (20 of 20 mapped) Find

Field Name ^
Fld_String
Fld_Integer
Fld_Float
Fld_Date
Fld_Time
Fld_DateTime
Fld_Timestamp
Fld_Boolean
Master1_Nullable
Master2_Repeated
Master3_Nullable_Repeated
Master4_Repeated_Nullable
Fld_String_Repeated
Fld_Integer_Repeated
Fld_Float_Repeated

Target Fields: (20 of 20 mapped) Find

Field Name ^	Mapped Field
Fld_String	Fld_String
Fld_Integer	Fld_Integer
Fld_Float	Fld_Float
Fld_Date	Fld_Date
Fld_Time	Fld_Time
Fld_DateTime	Fld_DateTime
Fld_Timestamp	Fld_Timestamp
Fld_Boolean	Fld_Boolean
Master1_Nullable	Master1_Nullable
Master2_Repeated	Master2_Repeated
Master3_Nullable_Repeated	Master3_Nullable_Repeated
Master4_Repeated_Nullable	Master4_Repeated_Nullable
Fld_String_Repeated	Fld_String_Repeated
Fld_Integer_Repeated	Fld_Integer_Repeated
Fld_Float_Repeated	Fld_Float_Repeated

複合モード

複合モード接続を使用する場合、Google BigQuery V2 コネクタは、Google BigQuery テーブル内のすべての列を、【フィールドマッピング】タブ内の文字列データ型の単一のフィールドとして表示します。

次の図に、ターゲットトランスフォーメーションの【フィールドマッピング】タブ内の [STRING_DATA] フィールドを示します。

Field map options: Automatic Note: This option will automatically map any fields added later by name. Options

Incoming Fields: (1 of 1 mapped) Find

Field Name ^
STRING_DATA

Target Fields: (1 of 1 mapped) Find

Field Name ^	Mapped Field
STRING_DATA	STRING_DATA

Google BigQuery V2 接続モードのルールとガイドライン

簡易モード

Google BigQuery V2 接続を設定して簡易接続モードを使用する場合は、次のルールとガイドラインを考慮します。

- 繰り返しカラムが含まれる Google BigQuery ターゲットテーブルは、【ターゲットの作成】オプションを使用して作成できません。
- Google BigQuery ソーステーブルに繰り返しカラムが含まれる場合は、これらのカラムに対してデータフィルタを設定できません。
- Google BigQuery テーブルに複数の繰り返しカラムが含まれる場合は、データをプレビューできません。
- Google BigQuery ターゲットテーブルに繰り返しカラムが含まれる場合は、これらのカラムに対して更新操作や削除操作を設定できません。
- Record データ型のカラムや繰り返しカラムに更新/挿入操作を設定できません。
- Google BigQuery ソースからデータを読み取るときは、1つのマッピングに複数の繰り返しカラムをマッピングすることはできません。繰り返しカラムごとに、複数のマッピングを作成する必要があります。

混合モード

Google BigQuery V2 接続を設定して混合接続モードを使用する場合は、次のルールとガイドラインを考慮します。

- データはプレビューできません。
- Google BigQuery ターゲットテーブルは、**【ターゲットの作成】** オプションを使用して作成できません。
- Google BigQuery ソーステーブルに、Record データ型のカラムと繰り返しカラムが含まれる場合は、これらのカラムに対してデータフィルタを設定できません。
- Record データ型のカラムや繰り返しカラムに、更新、更新/挿入、および削除の操作を設定できません。
- 詳細ターゲットプロパティのステージングファイルのデータ形式として、JSON（改行区切り）形式を選択する必要があります。
- ステージングファイルのデータ形式として CSV 形式を使用できません。詳細ターゲットプロパティの次の CSV 形式オプションは、適用されません。
 - 引用符付きの改行の許可
 - フィールド区切り文字
 - ジャグ行の許可

複合モード

Google BigQuery V2 接続を設定して複合接続モードを使用する場合は、次のルールとガイドラインを考慮します。

- データはプレビューできません。
- Google BigQuery ターゲットテーブルは、**【ターゲットの作成】** オプションを使用して作成できません。
- Google BigQuery ソース接続を設定して複合接続モードを使用する場合は、ソースにデータフィルタを設定できません。
- 更新、更新/挿入、および削除の操作は設定できません。
- 詳細ターゲットプロパティのステージングファイルのデータ形式として、JSON（改行区切り）形式を選択する必要があります。
- ステージングファイルのデータ形式として CSV 形式を使用できません。詳細ターゲットプロパティの次の CSV 形式オプションは、適用されません。
 - 引用符付きの改行の許可
 - フィールド区切り文字
 - ジャグ行の許可
- Google BigQuery ソースには、キー範囲パーティションを使用できません。

Google Cloud Spanner 接続のプロパティ

Google Cloud Spanner 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Google Cloud Spanner 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	接続の名前。この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。このプロパティは、接続を作成した後に変更できません。名前は 128 文字以内で指定し、空白および次の特殊文字は使用できません。~`!\$%^&*()-+=[]\ ';",<, > . ? /
説明	オプション。接続の説明。説明は、4,000 文字を超えることはできません。
タイプ	Google Cloud Spanner の接続タイプ。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
プロジェクト ID	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある Project_id 値。同じサービスアカウントを使用して複数のプロジェクトを作成した場合、接続先の Cloud Spanner インスタンスが含まれるプロジェクトの ID を入力します。
インスタンス ID	Google Cloud Spanner 内で作成したインスタンスの名前。
サービスアカウント ID	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある Client_email 値。
サービスアカウントキー	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある Private_key 値。

Google Cloud Storage 接続のプロパティ

Google Cloud Storage 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Google Cloud Storage 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	Google Cloud Storage にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
プロジェクト ID	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある project_id 値を指定します。 同じサービスアカウントを使用して複数のプロジェクトを作成した場合、接続先のバケットが含まれるプロジェクトの ID を入力します。
サービスアカウント ID	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある client_email 値を指定します。

プロパティ	説明
サービスアカウントキー	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある <code>private_key</code> 値を指定します。
ファイルパス	データを読み書きする場所の Google Cloud Storage 内のパス。バケット名、またはバケット名とフォルダ名のいずれかを入力できます。 例えば、 <code><bucket name></code> または <code><bucket name>/<folder name></code> と入力します。

Google Cloud Storage V2 接続のプロパティ

Google Cloud Storage V2 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Google Cloud Storage 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	接続の名前。この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。このプロパティは、接続を作成した後に変更できます。名前は 128 文字以内で指定し、空白および以下の特殊文字は使用できません。~`!\$%^&*()-+={[}] \:;'"<, > . ? /
説明	オプション。接続の説明。説明は、4,000 文字を超えることはできません。
タイプ	Google Cloud Storage V2 の接続タイプ。
ランタイム環境	Google Cloud Storage にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
サービスアカウント ID	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある <code>client_email</code> 値を指定します。
サービスアカウントキー	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある <code>private_key</code> 値を指定します。
プロジェクト ID	サービスアカウントの作成後にダウンロードする JSON ファイル内にある <code>project_id</code> 値を指定します。 同じサービスアカウントを使用して複数のプロジェクトを作成した場合、接続先のバケットが含まれるプロジェクトの ID を入力します。

Google Drive 接続のプロパティ

Google Drive 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Google Drive 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
クライアント ID	Google 開発者コンソールからのクライアント ID。
クライアントシークレット	Google 開発者コンソールからのクライアントシークレット。
リフレッシュトークン	承認コードの交換後に受け取るリフレッシュトークン。
ファイルのダウンロードパス	ファイルをダウンロードする必要がある場所のディレクトリ。
ファイルのアップロードパス	ファイルを格納し、アップロードする必要がある場所のディレクトリ。
PageSize	読み取り操作のページサイズ。デフォルト値は 10 です。

Google Sheets 接続のプロパティ

Google Sheets 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Google Sheets 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ClientId	Google 開発者コンソールからのクライアント ID。
ClientSecret	Google 開発者コンソールからのクライアントシークレット。
RefreshTokenForSheet	Google Sheets のための承認コードの交換後に受け取るリフレッシュトークン。
RefreshTokenForDrive	Google Drive のための承認コードの交換後に受け取るリフレッシュトークン。このオプションは、【SpreadSheetName】フィールド内にスプレッドシート名を入力した場合に必要です。
SpreadSheetName	Google Sheets 内のスプレッドシート名。
SpreadSheetId	Google Sheets 内のスプレッドシート ID。

プロパティ	説明
HeaderPresent	このオプションは、シートにヘッダーが含まれることを指定する場合に選択します。このオプションを選択し、シートにヘッダーが含まれていない場合、最初の行はヘッダーとして扱われます。
CreateNewSpreadsheet	このオプションは、Google Sheets 内に新しいスプレッドシートを作成する場合に選択します。 Google Sheets コネクタは、[SpreadSheetName] フィールドで指定する名前を使用して、空のスプレッドシートを作成します。 接続のテスト後は、このオプションを無効にします。そうしないと、Google Sheets コネクタは、毎回同じ名前の新しいスプレッドシートを作成します。

Greenplum 接続のプロパティ

Greenplum 接続を設定するときは、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Greenplum 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ホスト名	Greenplum サーバーのホスト名または IP アドレス。
ポート	Greenplum サーバーのポート番号。0 を入力すると、gpload ユーティリティは環境変数 \$PGPORT から読み取ります。デフォルトは 5432 です。
データベース	データベースの名前。
スキーマ	Greenplum ソースまたはターゲットのメタデータを含むスキーマの名前。 デフォルトは public です。
証明書パス	Greenplum サーバーの SSL 証明書が保存されている場所へのパス。gpload ユーティリティと Greenplum サーバーの間に SSL 経由のセキュアな接続を確立する場合は、パスを指定します。 証明書パスで使用可能にする必要があるファイルの詳細については、gpload のマニュアルを参照してください。 注: SSL 設定は、Greenplum ライタにのみ適用されます。
メタデータ追加 接続設定	使用する追加のメタデータ接続プロパティ。 次の形式を使用します。 <parameter name1>=<value1>, <parameter name2>=<value2>
ドライバ名	ドライバ名。DataDirect 7.1 Greenplum Wire プロトコルを指定します。
ユーザー名	Greenplum データベースにアクセスする権限を持つユーザー名。
パスワード	Greenplum データベースに接続するためのパスワード。

Hadoop ファイル接続のプロパティ

Hadoop ファイル接続を設定するときに、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Hadoop ファイル接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Hadoop ファイル接続の名前。
説明	接続の説明。説明は、765 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。Hadoop ファイルを選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	HDFS からデータを読み取るため必要。データの読み書きのために、単一ノードの HDFS の場所へのアクセス権限を持つユーザーの名前を入力します。
NameNode の URI	<p>HDFS にアクセスするための URI。</p> <p>Cloudera、Amazon EMR、Hortonworks ディストリビューションでは、以下の形式を使用して名前ノード URI を指定します。</p> <pre>hdfs://<namenode>:<port>/</pre> <p>ここで</p> <ul style="list-style-type: none">- <namenode>は、名前ノードのホスト名または IP アドレスです。- <port>は、名前ノードがリモートプロシージャコール (RPC) をリスンするポートです。 <p>Hadoop クラスタが高可用性に設定されている場合、core-site.xml ファイルの fs.defaultFS 値をコピーし、/を追加して名前ノード URI を指定する必要があります。</p> <p>例として、次のスニペットにサンプル core-site.xml ファイルの fs.defaultFS 値を示します。</p> <pre><property> <name>fs.defaultFS</name> <value>hdfs://nameservice1</value> <source>core-site.xml</source> </property></pre> <p>上のスニペットで、fs.defaultFS 値は次のとおりです。</p> <pre>hdfs://nameservice1</pre> <p>対応する名前ノード URI は次のとおりです。</p> <pre>hdfs://nameservice1/</pre> <p>注: 名前ノード URI またはローカルパスのいずれかを指定します。ローカルファイルシステムパスとの間でデータを読み書きする場合、名前ノード URI は指定しません。</p>
ローカルパス	<p>データを読み書きする場所のローカルファイルシステムパス。HDFS との間でデータを読み書きする場合、ローカルパスは指定しません。ローカルパスを指定するには、次の条件を参照します。</p> <ul style="list-style-type: none">- 名前ノード URI を指定する場合、ローカルパスに NA を入力する必要があります。ローカルパスに NA が含まれていない場合、名前ノード URI は機能しません。- 名前ノード URI およびローカルパスを指定する場合、ローカルパスが優先されます。その接続は、すべてのタスクを実行するためにローカルパスを使用します。- ローカルパスを空欄にした場合、エージェントはその接続内でルートディレクトリ (/) を設定します。その接続は、すべてのタスクを実行するためにローカルパスを使用します。

接続プロパティ	説明
Hadoop ディストリビューション	Hadoop ディストリビューション名。接続に使用する HDFS インスタンスに基づいて、CLLOUDERA、EMR、または HDP を入力します。 Cloudera CDH と Hortonworks HDP Hadoop ディストリビューションに、Kerberos 認証を使用できます。 注: Hadoop ディストリビューション名を指定するには、すべて大文字を使用します。
キータブファイル	マシンを認証するための暗号化キーと Kerberos プリンシパルが格納されたファイル。
プリンシパル名	スーパーユーザー特権に割り当てられたユーザーは、管理者特権を持つユーザーが行うことができるすべてのタスクを実行することができます。
偽装ユーザー名	Kerberos 認証を使用する Hadoop クラスタ内でマッピングを実行する、または Kerberos 認証を使用するソースおよびターゲットに接続するために、異なるユーザーを有効にできます。マッピングの実行またはビッグデータのソースおよびターゲットへの接続のために、異なるユーザーを有効にするには、ユーザーの偽装を設定する必要があります。

Cloudera CDH 5.8 または Hortonworks HDP 2.5 Hadoop ディストリビューションの使用

Hadoop ファイルコネクタは、次の Cloudera CDH と Hortonworks HDP Hadoop ディストリビューションのバージョンをサポートしています。

- Cloudera CDH 5.4 および 5.8
- Hortonworks HDP 2.3 および 2.5

デフォルトでは、Hadoop ファイルコネクタは、古いバージョンの Cloudera CDH と Hortonworks HDP Hadoop ディストリビューション (Cloudera CDH 5.4 および Hortonworks HDP 2.3) を使用します。Hadoop ファイルコネクタは、Cloudera CDH 5.8 または Hortonworks HDP 2.5 ディストリビューションを使用するように設定できます。

Hadoop ファイルコネクタを Cloudera CDH 5.8 または Hortonworks HDP 2.5 ディストリビューションを使用するように設定するには、古いバージョンのすべてのファイルとフォルダを、新しいバージョンのディストリビューションのファイルとフォルダで置き換える必要があります。

Hadoop ファイルコネクタでの Cloudera CDH 5.8 ディストリビューションの使用

Hadoop ファイルコネクタを Cloudera CDH 5.8 ディストリビューションを使用するように設定するには、次の手順を実行します。

1. Cloudera CDH 5.4 と 5.8 を Secure Agent がインストールされているマシンにダウンロードします。
2. すべてのファイルとフォルダを<Secure Agent のインストールディレクトリ>/download/package-Cloudera_5.8.1/package/cloudera_cdh5u8 から<Secure Agent のインストールディレクトリ>/download/package-Cloudera_5.4.1/package/cloudera_cdh5u4 にコピーして、ファイルを置き換えます。
3. **CLLOUDERA** を接続プロパティの [**Hadoop ディストリビューション**] フィールドの値として入力します。
4. [**テスト接続**] をクリックして接続を評価します。
5. [**保存**] をクリックして接続を保存します。

Hadoop ファイルコネクタでの Hortonworks HDP 2.5 ディストリビューションの使用

Hadoop ファイルコネクタを Hortonworks HDP 2.5 ディストリビューションを使用するように設定するには、次の手順を実行します。

1. Hortonworks HDP 2.3 と 2.5 を Secure Agent がインストールされているマシンにダウンロードします。
2. すべてのファイルとフォルダを<Secure Agent のインストールディレクトリ>/download/package-Hortonworks_2_5.1/package/hortonworks_2.5 から<Secure Agent のインストールディレクトリ>/download/package-Hortonworks_2_3.1/package/hortonworks_2.3 にコピーして、ファイルを置き換えます。
3. **HDP** を接続プロパティの **[Hadoop ディストリビューション]** フィールドの値として入力します。
4. **[テスト接続]** をクリックして接続を評価します。
5. **[保存]** をクリックして接続を保存します。

Hadoop ファイル V2 接続のプロパティ

Hadoop ファイル V2 接続を設定するときに、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Hadoop ファイル V2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Hadoop ファイル V2 接続の名前。
説明	接続の説明。説明は、765 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。Hadoop ファイル V2 を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	HDFS からデータを読み取るため必要。データの読み書きのために、単一ノードの HDFS の場所へのアクセス権限を持つユーザーの名前を入力します。

接続プロパティ	説明
NameNode の URI	<p>HDFS にアクセスするための URI。</p> <p>Cloudera、Amazon EMR、Hortonworks ディストリビューションでは、以下の形式を使用して名前ノード URI を指定します。</p> <pre>hdfs://<namenode>:<port>/</pre> <p>ここで</p> <ul style="list-style-type: none"> - <namenode>は、名前ノードのホスト名または IP アドレスです。 - <port>は、名前ノードがリモートプロシージャコール (RPC) をリスンするポートです。 <p>Hadoop クラスタが高可用性に設定されている場合、core-site.xml ファイルの fs.defaultFS 値をコピーし、/を追加して名前ノード URI を指定する必要があります。例として、次のスニペットにサンプル core-site.xml ファイルの fs.defaultFS 値を示します。</p> <pre><property> <name>fs.defaultFS</name> <value>hdfs://nameservice1</value> <source>core-site.xml</source> </property></pre> <p>上のスニペットで、fs.defaultFS 値は次のとおりです。</p> <pre>hdfs://nameservice1</pre> <p>対応する名前ノード URI は次のとおりです。</p> <pre>hdfs://nameservice1/</pre> <p>注: 名前ノード URI またはローカルパスのいずれかを指定します。ローカルファイルシステムパスとの間でデータを読み書きする場合、名前ノード URI は指定しません。</p>
ローカルパス	<p>データを読み書きする場所のローカルファイルシステムパス。HDFS との間でデータを読み書きする場合、ローカルパスは指定しません。ローカルパスを指定するには、次の条件を参照します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 名前ノード URI を指定する場合、ローカルパスに NA を入力する必要があります。ローカルパスに NA が含まれていない場合、名前ノード URI は機能しません。 - 名前ノード URI およびローカルパスを指定する場合、ローカルパスが優先されます。その接続は、すべてのタスクを実行するためにローカルパスを使用します。 - ローカルパスを空欄にした場合、エージェントはその接続内でルートディレクトリ (/) を設定します。その接続は、すべてのタスクを実行するためにローカルパスを使用します。 <p>[ローカルパス] のデフォルト値は [NA] です。</p>
構成ファイルのパス	Hadoop 構成ファイルを格納するディレクトリ。
キータブファイル	マシンを認証するための暗号化キーと Kerberos プリンシパルが格納されたファイル。
プリンシパル名	スーパーユーザー特権に割り当てられたユーザーは、管理者特権を持つユーザーが行うことができるすべてのタスクを実行することができます。
偽装ユーザー名	Kerberos 認証を使用する Hadoop クラスタ内でマッピングを実行する、または Kerberos 認証を使用するソースおよびターゲットに接続するために、異なるユーザーを有効にできます。マッピングの実行またはビッグデータのソースおよびターゲットへの接続のために、異なるユーザーを有効にするには、ユーザーの偽装を設定する必要があります。

Hive 接続のプロパティ

Hive コネクタをマッピングタスクで使用するには、データ統合で接続を作成する必要があります。

Hive 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Hive 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
認証タイプ	以下のいずれかの認証タイプを選択できます。 <ul style="list-style-type: none">- Kerberos。Kerberos クラスタに対して [Kerberos] を選択します。- LDAP。LDAP 対応クラスタに対して [LDAP] を選択します。- なし。保護されていない、または LDAP 対応でないクラスタに対して [なし] を選択します。
JDBC URL	Hive に接続するための JDBC URL。
JDBC ドライバ	Hive に接続するための JDBC ドライバクラス。
ユーザー名	LDAP モードまたはなしモードで Hive に接続するためのユーザー名。
パスワード	LDAP モードまたはなしモードで Hive に接続するためのパスワード。
プリンシパル名	Kerberos 認証を介して Hive に接続するためのプリンシパル名。
偽装ユーザー名	Hadoop クラスタでマッピングを実行するために Secure Agent が偽装するユーザーのユーザー名。マッピングの実行または Hive への接続に別のユーザーを有効にするために、ユーザーの偽装を設定できます。クラスタが Kerberos 認証を使用する場合、Hadoop 接続に偽装名が必要です。
キータブの場所	Kerberos ログインのためのキータブファイルへのパスとファイル名。
構成ファイルのパス	クライアントのための Hadoop 設定ファイルが格納されているディレクトリ。
NameNode の URI	HDFS にアクセスするための URI。クラスタの core-site.xml ファイル内の fs.defaultFS プロパティの値を参照し、同じ値を [NameNode の URI] フィールドに入力します。
HDFS ステージングディレクトリ	Secure Agent がターゲットにデータを書き込む前に、Secure Agent がデータをステージングするクラスタ内のステージングディレクトリ。HDFS ステージングディレクトリの完全な権限を持っている必要があります。
Hive ステージングデータベース	外部テーブルまたは一時テーブルが作成される Hive データベース。データを作成して挿入するためには、Hive ステージングデータベースの完全な権限を持っている必要があります。

JDBC 接続プロパティ

JDBC 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、JDBC 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
JDBC 接続 URL	データベースの URL スキーマ。次の各データベースに対応するスキーマを使用します。 <ul style="list-style-type: none">- Microsoft SQL Server。jdbc:sqlserver://<Host>\<Instance>:<Port>;databaseName=<Database>- MySQL。jdbc:mysql://<Host>:<Port>/<Database>- Oracle。jdbc:oracle:thin:@//<Host>:<Port>/<Service>- PostgreSQL。jdbc:postgresql://<Host>:<Port>/<Database>
JDBC Jar ディレクトリ	オプション。JDBC ドライバ jar ファイルへのパス。例えば、次のディレクトリを入力できます: C:/jdbc。ディレクトリパスを指定しない場合、Secure Agent は、CLASSPATH システム変数に指定されたディレクトリから jar ファイルを取得します。
JDBC ドライバクラス名	オプション。JDBC ドライバを自動クラス読み込み機能なしで使用している場合、JDBC ドライバのクラス名を指定します。このプロパティを指定しない場合、Secure Agent は JDBC ドライバの jar ファイルからドライバのクラス名を読み込みます。
スキーマ	スキーマ名。データベースによって異なります。次のスキーマ名のガイドラインに従ってください。 <ul style="list-style-type: none">- Microsoft SQL Server。正しいオブジェクトを指定するためにスキーマ名を使用します。- MySQL。オプション。スキーマ名はデータベース名です。- Oracle。オプション。スキーマ名はユーザー名です。- PostgreSQL。正しいオブジェクトを指定するためにスキーマ名を使用します。 JDBC 接続 URL から十分なコンテキストが得られない場合は、スキーマ名を入力してメタデータを取得する必要があります。
ユーザー名	データベースに接続するためのユーザー名。
パスワード	データベースに接続するためのパスワード。

JD Edwards EnterpriseOne 接続のプロパティ

JD Edwards EnterpriseOne 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。
次の表に、JD Edwards EnterpriseOne 接続プロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ホスト名	JD Edwards EnterpriseOne サーバーのホスト名。
エンタープライズポート	JD Edwards EnterpriseOne サーバーのポート番号。デフォルトは 6016 です。
ユーザー名	JD Edwards EnterpriseOne データベースユーザーの名前。
パスワード	JD Edwards EnterpriseOne データベースユーザーのパスワード。
環境	接続先の JD Edwards EnterpriseOne 環境の名前。
ロール	JD Edwards EnterpriseOne ユーザーのロール。デフォルトは [すべて] です。
ユーザー名	JD Edwards EnterpriseOne データベースユーザーの名前。
パスワード	データベースユーザーのパスワード。
ドライバクラス名	<p>該当するデータベースタイプに入力できるドライバクラス名を示します。インタフェーステーブルの書き込みオプションを使用して、データを一括で書き込むために必要です。次の JDBC ドライバクラス名を使用しません。</p> <ul style="list-style-type: none">- Oracle 用 DataDirect JDBC ドライバクラス名: com.informatica.jdbc.oracle.OracleDriver- IBM DB2 用 DataDirect JDBC ドライバクラス名: com.informatica.jdbc.db2.DB2Driver- Microsoft SQL Server 用 DataDirect JDBC ドライバクラス名: com.informatica.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver <p>特定のデータベースで使用するドライバクラスの詳細については、ベンダ提供のドキュメントを参照してください。</p>
接続文字列	<p>データベースへの接続に使用する接続文字列。インタフェーステーブルの書き込みオプションを使用して、データを一括で書き込むために必要です。</p> <p>JDBC 接続文字列では、次の構文を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none">- Oracle の場合: jdbc:informatica:oracle://<host name>:<port>,ServiceName=<db service name>- DB2 の場合: jdbc:informatica:db2://<host name>:<port>;databaseName=<db name>- Microsoft SQL の場合: jdbc:informatica:sqlserver://<host name>:<port>;databaseName=<db name>
JDE 製品コード	<p>JD Edwards EnterpriseOne 内のテーブルとビューのための製品コード。 注:説明なしで、製品コードのみを指定する必要があります。有効でないスキーマを指定した場合、Java の例外が表示されます。</p>

JIRA 接続のプロパティ

JIRA 接続を設定するときは、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、JIRA 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	JIRA 接続の名前。
説明	JIRA 接続の説明。
タイプ	接続タイプ。一覧から [JIRA] を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	JIRA アカウントのユーザー名。
パスワード	JIRA アカウントのパスワード。
URI	接続先の JIRA インスタンスのベース JIRA URI。例: https://abcd.atlassian.net/
UTC オフセット	日時フィールドに追加するための UTC 時間のオフセットを選択します。デフォルト値は UTC です。

JIRA Cloud 接続のプロパティ

JIRA Cloud 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

JIRA Cloud 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、JIRA Cloud 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	JIRA Cloud 接続の名前。
説明	JIRA Cloud 接続の説明。
タイプ	接続タイプ。一覧から [JiraCloud (Informatica)] を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
認証	接続の認証タイプ。[JiraCloud] を選択します。
URI	接続先の JIRA インスタンスのベース JIRA URI。例: https://abcd.atlassian.net/
ユーザー名	JIRA アカウントのユーザー名。
パスワード	JIRA アカウントのパスワード。

JSON Target 接続のプロパティ

JSON Target 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、JSON Target 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
Secure Agent	一覧から該当する Secure Agent を選択します。
サンプル JSON スキーマ名	サンプル JSON ファイルパスを入力します。 例: ABCD.JSON
JSON 作業ディレクトリ	JSON 作業ディレクトリのフォルダパスを入力します。
最終 JSON ファイル名	最終 JSON ファイルのパスとファイル名を入力します。
JSON カスタマイズが必要	JSON のカスタマイズを可能にします。 デフォルトは [いいえ] です。
最終カスタマイズ JSON ファイル名	最終カスタマイズ JSON ファイルのパスとファイル名を入力します。

LDAP 接続のプロパティ

LDAP 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、LDAP 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。 注: Secure Agent のみを、LDAP 接続のランタイム環境として指定できません。
ホスト名	必須。LDAP ディレクトリサーバーのホスト名。 LDAP または LDAPS プロトコルを LDAP サーバーへの接続に使用できません。 - LDAP プロトコルを使用するには、次の形式のいずれかを使用します。 - ldap://<hostname> - <hostname> - LDAPS プロトコルを使用するには、ldaps://<hostname>の形式を使用します。 注: SSL を使用する場合、SSL 証明書内に指定したホスト名を使用します。
ポート	必須。LDAP ディレクトリサーバーのポート番号。デフォルトは 389 です。

プロパティ	説明
匿名接続	LDAP ディレクトリサーバーとの匿名接続を確立します。匿名接続を選択し、認証不要の匿名ユーザーとしてディレクトリサーバーにアクセスします。 注: Active Directory とは匿名接続を確立できません。
ユーザー名	LDAP ディレクトリサーバーに接続するための LDAP ユーザー名。 Active Directory に接続する場合に必要です。
パスワード	LDAP ディレクトリサーバーに接続するためのパスワード。パスワードを入力しないと、クライアントは匿名接続を確立します。 Active Directory に接続する場合に必要です。
セキュアな接続	TLS プロトコル経由で LDAP ディレクトリサーバーとのセキュアな接続を確立します。
TrustStore のファイル名	LDAP ディレクトリサーバーとの一方向のセキュアな接続を確立するための TLS 証明書を含むトラストストアのファイル名。 トラストストアのファイル名とパスワードについては、LDAP 管理者にお問い合わせください。
TrustStore のパスワード	SSL 証明書を含むトラストストアファイルのパスワード。
KeyStore のファイル名	LDAP ディレクトリサーバーとの双方向のセキュアな通信を確立するために必要なキーと証明書を含むキーストアのファイル名。 キーストアのファイル名とパスワードについては、LDAP 管理者にお問い合わせください。
KeyStore のパスワード	通信を安全に行うために必要なキーストアファイルのパスワードです。
ベース DN。	必須。LDAP ディレクトリサーバー内のルートディレクトリの識別名 (DN)。 例えば、Informatica ドメインに接続するには、dc=informatica-connector,dc=com というベース DN を使用します。 ベース DN を指定しない場合、Secure Agent はメタデータの取得に失敗します。

Litmos 接続のプロパティ

Litmos 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Litmos 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
BaseURI	Litmos API に接続するためのエンドポイント URI を指定します。 例: https://api.litmos.com/v1.sv

プロパティ	説明
ApiKey	アカウント所有者のプロファイルからの API キー。
ソース	アカウント所有者のプロファイルからのソース。
PageSize	読み取り操作のページサイズ。 デフォルト値は 100 です。

Marketo V3 接続のプロパティ

Marketo V3 接続をセットアップするには、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Marketo V3 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Marketo V3 接続の名前。
説明	接続の説明。説明は、765 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。Marketo V3 接続を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
client_ID	有効なアクセストークンを生成するために必要なカスタムサービスのクライアント ID。
client_secret	有効なアクセストークンを生成するために必要な Marketo カスタムサービスのクライアントシークレット。
grant_type	管理者が Marketo REST API を呼び出して Marketo に対してデータの読み取りおよび書き込みを実行するためのアクセス権限。Marketo では、client_credentials 許可タイプのみサポートしています。
REST API URL	Secure Agent が Marketo REST API に接続するために使用する URL。 URL の形式は次のとおりです: https://<Marketo Rest API Server のホスト名>。 REST API URL については Marketo 管理者にお問い合わせください。
プロキシのバイパス	Marketo には、proxy.ini ファイル内で定義されているプロキシサーバー設定を使用して、または Secure Agent Manager を介して接続します。 [プロキシのバイパス] を選択すると、Secure Agent Manager を使用して Marketo に接続します。[プロキシのバイパス] をオフにすると、プロキシサーバーを使用して Marketo に接続します。 デフォルトではプロキシのバイパスが選択されています。

Microsoft Access 接続のプロパティ

Microsoft Access 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
データソース名	システム DSN 名。
コードページ	Microsoft Access ソースと互換性のあるコードページ。次のいずれかのコードページを選択します。 <ul style="list-style-type: none">- MS Windows Latin 1。ISO 8859-1 Western European データの場合に選択します。- UTF-8。Unicode および Unicode 以外のデータの場合に選択します。- Shift-JIS。ダブルバイト文字データの場合に選択します。- ISO 8859-15 Latin 9 (Western European)。- ISO 8859-2 Eastern European。- ISO 8859-3 Southeast European。- ISO 8859-5 Cyrillic。- ISO 8859-9 Latin 5 (Turkish)。- IBM EBCDIC International Latin-1。

Microsoft Azure Blob ストレージ接続のプロパティ

Microsoft Azure Blob ストレージ接続を作成するときには、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、Microsoft Azure Blob ストレージ接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
アカウント名	Microsoft Azure Blob ストレージアカウント名。
アカウントキー	Microsoft Azure Blob ストレージアクセスキー。
コンテナ名	Microsoft Azure Blob ストレージコンテナ名。
ファイルの区切り文字	ファイル内のフィールドを区切るために使用する文字。デフォルトはカンマ (,) です。

Microsoft Azure Blob ストレージ V2 接続のプロパティ

Microsoft Azure Blob ストレージ V2 接続を作成するときには、接続プロパティを設定する必要があります。以下の表に、Microsoft Azure Blob ストレージ V2 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
アカウント名	Microsoft Azure Blob ストレージアカウント名。
アカウントキー	Microsoft Azure Blob ストレージアクセスキー。
コンテナ名	Microsoft Azure Blob ストレージコンテナ名。

Microsoft Azure Blob ストレージ V3 接続のプロパティ

Microsoft Azure Blob ストレージ V3 接続を作成するときには、接続プロパティを設定する必要があります。以下の表に、Microsoft Azure Blob ストレージ V3 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
アカウント名	Microsoft Azure Blob ストレージアカウント名。
アカウントキー	Microsoft Azure Blob ストレージアクセスキー。
コンテナ名	Microsoft Azure Blob ストレージコンテナ名。
エンドポイントサフィックス	Microsoft Azure エンドポイントのタイプ。以下の任意のエンドポイントを選択できます。 <ul style="list-style-type: none">- core.windows.net: デフォルト- core.usgovcloudapi.net: 米国合衆国政府の Microsoft Azure エンドポイントを選択する場合- core.chinacloudapi.cn: 該当なし

Microsoft Azure Cosmos DB SQL API 接続のプロパティ

Cosmos DB 接続を使用して、Cosmos DB データベースに接続します。Cosmos DB 接続の作成時には、メタデータおよびデータアクセスの情報を入力します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
Cosmos DB URI	Microsoft Azure Cosmos DB アカウントの URI。
キー	Microsoft Azure Cosmos DB アカウント内のリソースへの完全な管理アクセス権限を提供するプライマリーキーまたはセカンダリキー。
データベース	JSON ドキュメントとの間での読み書きするコレクションが格納されているデータベース名。

注: Cosmos DB URI とキー値は、Azure ポータルのキー設定から見つかります。詳細については、Azure 管理者にお問い合わせください。

Microsoft Azure Data Lake 接続のプロパティ

Microsoft Azure Data Lake 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、Microsoft Azure Data Lake 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Microsoft Azure Data Lake 接続の名前。
説明	接続の説明。説明は、765 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。Microsoft Azure Data Lake 接続を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
AzureDataLakeAccountName	Microsoft Azure Data Lake Store の名前。
AzureActiveDirectoryUserName	Microsoft Azure Active Directory のユーザー名。 [AzureDataLakeAccountName] で指定した Microsoft Azure Data Lake Store と、[ディレクトリ] で指定した Microsoft Azure Data Lake ディレクトリへのアクセス権限を持っている必要があります。 注: Microsoft Azure Active Directory 内でエイリアスがある場合、そのエイリアスを使用してログインすることはできず、Azure Active Directory ユーザー名を使用してログインする必要があります。
AzureActiveDirectoryPassword	Microsoft Azure Active Directory のパスワード。

接続プロパティ	説明
ColumnDelimiter	データの列を区切るために使用される文字。デフォルトはカンマ (,) です。
ディレクトリ	データの読み取りまたは書き込みに使用する Microsoft Azure Data Lake Store ディレクトリ。ディレクトリ名の前に、スラッシュ (/) のプレフィックスを付ける必要があります。例: /sampleDir

Microsoft Azure Data Lake Store V2 接続のプロパティ

Microsoft Azure Data Lake 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。以下の表に、Microsoft Azure Data Lake 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Microsoft Azure Data Lake Store 接続の名前。
説明	接続の説明。説明は、765 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。Microsoft Azure Data Lake 接続を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ADLS アカウント名	Microsoft Azure Data Lake Store の名前。
ClientID	Active Directory で OAuth 認証を完了するためのアプリケーションの ID。
クライアントシークレット	Active Directory で OAuth 認証を完了するためのクライアント秘密鍵。
ディレクトリ	データの読み取りまたは書き込みに使用する Microsoft Azure Data Lake Store ディレクトリ。デフォルトはルートディレクトリです。
AuthEndpoint	クライアント ID およびクライアントシークレットに基づく認証が完了する OAuth 2.0 トークンエンドポイント。

クライアント ID、クライアントシークレット、および AuthEndpoint の作成の詳細については、Microsoft Azure Data Lake Store のマニュアルを参照してください。

Microsoft Azure Data Lake Store V3 接続のプロパティ

Microsoft Azure Data Lake 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。
以下の表に、Microsoft Azure Data Lake 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Microsoft Azure Data Lake Store 接続の名前。
説明	接続の説明。説明は、765 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。Microsoft Azure Data Lake 接続を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ADLS アカウント名	Microsoft Azure Data Lake Store の名前。
ClientID	Active Directory で OAuth 認証を完了するためのアプリケーションの ID。
クライアントシークレット	Active Directory で OAuth 認証を完了するためのクライアント秘密鍵。
ディレクトリ	データの読み取りまたは書き込みに使用する Microsoft Azure Data Lake Store ディレクトリ。デフォルトはルートディレクトリです。
AuthEndpoint	クライアント ID およびクライアントシークレットに基づく認証が完了する OAuth 2.0 トークンエンドポイント。

クライアント ID、クライアントシークレット、および AuthEndpoint の作成の詳細については、Microsoft Azure Data Lake Store のマニュアルを参照してください。

Microsoft Azure Data Lake Store Gen2 接続プロパティ

Microsoft Azure Data Lake Store Gen2 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、Microsoft Azure Data Lake Store Gen2 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Azure Data Lake Store Gen2 接続の名前。
説明	接続の説明。説明は、765 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。Azure Data Lake Store Gen2 接続を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。

接続プロパティ	説明
アカウント名	Azure Data Lake Store Gen2 アカウントの名前。
クライアント ID	Azure Active Directory (AD) で OAuth 認証を完了するためのアプリケーションの ID。
クライアントシークレット	Azure AD で OAuth 認証を完了するためのクライアント秘密鍵。
テナント ID	Azure AD のディレクトリ ID。
ファイルシステム名	Azure Data Lake Store Gen2 アカウントの既存のファイルシステムの名前。
ディレクトリパス	特定のファイルシステムの下に既存のディレクトリのパス。

クライアント ID とクライアントシークレットの作成の詳細については、*Microsoft Azure Data Lake Store* のドキュメントを参照してください。

Microsoft Azure SQL Data Warehouse 接続のプロパティ

次の表に、Microsoft Azure SQL Data Warehouse 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
Azure DW JDBC URL	Microsoft Azure Data Warehouse JDBC 接続文字列。例えば、次の接続文字列を入力できます: jdbc:sqlserver://<Server>.database.windows.net:1433;database=<Database>。
Azure DW JDBC ユーザー名	Microsoft Azure SQL Data Warehouse アカウントに接続するためのユーザー名。
Azure DW JDBC パスワード	Microsoft Azure SQL Data Warehouse アカウントに接続するためのパスワード。
Azure DW スキーマ名	Microsoft Azure SQL Data Warehouse 内のスキーマの名前。
Azure Blob アカウント名	ファイルをステージングする Microsoft Azure ストレージアカウントの名前。
Azure Blob アカウントキー	ファイルをステージングするための Microsoft Azure ストレージアクセスキー。

Microsoft Azure SQL Data Warehouse V2 接続のプロパティ

次の表に、Microsoft Azure SQL Data Warehouse V2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
Azure DW JDBC URL	Microsoft Azure Data Warehouse JDBC 接続文字列。 Microsoft SQL Server 認証の例: <code>jdbc:sqlserver://<Server>.database.windows.net:1433;database=<Database></code> Azure Active Directory (AAD) 認証の例: <code>jdbc:sqlserver://<Server>.database.windows.net:1433; database=<Database>;encrypt=true;trustServerCertificate=false; hostNameInCertificate=*.database.windows.net;loginTimeout=30; Authentication=ActiveDirectoryPassword;</code> デフォルトの認証は、Microsoft SQL Server 認証です。
Azure DW JDBC ユーザー名	Microsoft Azure SQL Data Warehouse アカウントに接続するためのユーザー名。AAD 認証の AAD ユーザー名を指定します。
Azure DW JDBC パスワード	Microsoft Azure SQL Data Warehouse アカウントに接続するためのパスワード。
Azure DW スキーマ名	Microsoft Azure SQL Data Warehouse 内のスキーマの名前。
Azure Blob アカウント名	ファイルをステージングする Microsoft Azure ストレージアカウントの名前。
Azure Blob アカウントキー	ファイルをステージングするための Microsoft Azure ストレージアクセスキー。

Microsoft Azure SQL Data Warehouse V3 接続のプロパティ

次の表に、Microsoft Azure SQL Data Warehouse V3 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
Azure DW JDBC URL	Microsoft Azure Data Warehouse JDBC 接続文字列。 Microsoft SQL Server 認証の例: <code>jdbc:sqlserver://<Server>.database.windows.net:1433;database=<Database></code> Azure Active Directory (AAD) 認証の例: <code>jdbc:sqlserver://<Server>.database.windows.net:1433; database=<Database>;encrypt=true;trustServerCertificate=false; hostNameInCertificate=*.database.windows.net;loginTimeout=30; Authentication=ActiveDirectoryPassword;</code> デフォルトの認証は、Microsoft SQL Server 認証です。
Azure DW JDBC ユーザー名	Microsoft Azure SQL Data Warehouse アカウントに接続するためのユーザー名。AAD 認証の AAD ユーザー名を指定します。
Azure DW JDBC パスワード	Microsoft Azure SQL Data Warehouse アカウントに接続するためのパスワード。
Azure DW スキーマ名	Microsoft Azure SQL Data Warehouse 内のスキーマの名前。
Azure Blob アカウント名	ファイルをステージングする Microsoft Azure ストレージアカウントの名前。
Azure Blob アカウントキー	ファイルをステージングするための Microsoft Azure ストレージアクセスキー。
Blob エンドポイント	Microsoft Azure エンドポイントのタイプ。以下の任意のエンドポイントを選択できます。 - core.windows.net: デフォルト - core.usgovcloudapi.net: 米国合衆国政府の Microsoft Azure エンドポイントを選択する場合 - core.chinacloudapi.cn: 該当なし

Microsoft Dynamics AX V3 接続のプロパティ

Microsoft Dynamics AX V3 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Microsoft Dynamics AX V3 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続に固有の名前を入力します。
説明	オプション。接続に関連する説明を入力します。
タイプ	一覧から [Microsoft Dynamics AX V3] を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
認証	Microsoft Dynamics AX 2012 にアクセスするユーザーの認証。Microsoft Dynamics AX V3 コネクタは、基本認証と NTLM 認証をサポートしています。
WSDL URI	必要な WSDL ファイルパスを入力します。 注: WSDL URI を見つけるには、Microsoft Dynamics AX 2012 インスタンスの [システム管理] > [受信ポート] に移動します。例えば、WSDL URI の形式は http://<Hostname>:<Port>/<App_Pool_Name>/<Port name>/xppservice.svc のようになります。
ユーザー名	Microsoft Dynamics AX 2012 Web ページにログインするユーザーの名前。
パスワード	NT ログインユーザーに関連付けられているパスワード。
会社名	オプション。会社名を入力します。複数の会社名をセミコロンで区切って入力することができます。例: ceu;ceed。
言語	オプション。Microsoft Dynamics AX 2012 に対して読み書きするデータをローカライズします。言語コードを指定します。

Microsoft Dynamics CRM 接続のプロパティ

Microsoft Dynamics CRM 接続を使用して、Microsoft Dynamics CRM オブジェクトに接続します。

次の表に、Microsoft Dynamics CRM 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
認証タイプ	接続の認証タイプ。有効な認証タイプを選択してください。次のいずれかの認証タイプを使用します。 - Active Directory - インターネットに接続する展開 (IFD) - Microsoft Live
ユーザー名	Microsoft Dynamics CRM アカウントに接続するためのユーザー名。 Microsoft Live 認証の場合は、Microsoft Live ユーザー名を使用します。
パスワード	Microsoft Dynamics CRM アカウントに接続するためのパスワード。 Microsoft Live 認証の場合は、Microsoft Live パスワードを使用します。

接続プロパティ	説明
組織名	Microsoft Dynamics CRM 組織名。組織名の大文字と小文字は区別されます。 Microsoft Live 認証の場合は、Microsoft Live 組織独自の名前を使用します。 組織独自の名前を見つけるには、Microsoft Live インスタンスにログインして、[設定] > [カスタマイズ] > [開発者リソース] をクリックします。
ドメイン	Microsoft Dynamics CRM ドメイン名。 IFD と Active Directory 認証のために、接続プロパティに指定するドメインを使用できます。
サービス URL	Microsoft Dynamics CRM サービスの URL。 Active Directory 認証の場合は、次のいずれかの形式を使用します。 <a href="http://<server.company.com>:<port>">http://<server.company.com>:<port> または <a href="https://<server.company.com>:<port>">https://<server.company.com>:<port> IFD 認証の場合は、次の形式を使用します。 <a href="https://<server.company.com>:<port>">https://<server.company.com>:<port> Microsoft Live 認証の場合は、Microsoft Live 探索サービス URL を使用します。 探索サービス URL を見つけるには、Microsoft Live インスタンスにログインして、[設定] > [カスタマイズ] > [開発者リソース] をクリックします。
セキュリティトークンサービス URL	Microsoft Dynamics CRM セキュリティトークンサービス URL。 例: sts1.company.com IFD 認証の場合のみ。

Microsoft Dynamics NAV 接続のプロパティ

Microsoft Dynamics NAV 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Microsoft Dynamics NAV 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	NAV アカウントのユーザー名。
パスワード	NAV アカウントのパスワード。
ホスト名	NAV サーバーのホストの名前。
ポート	NAV Web サービスのポート番号。
サービスインスタンス	Web サービスのための Microsoft Dynamics NAV サーバーインスタンスの名前。

プロパティ	説明
会社名	NAV 内のユーザーが属する会社名。
Domain_Name	ドメイン名。

Microsoft Dynamics 365 for Sales 接続のプロパティ

Microsoft Dynamics 365 for Sales 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Microsoft Dynamics 365 for Sales 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
認証タイプ	コネクタが Web アプリケーションにログインするために使用する必要がある認証メソッドを選択します。次のいずれかの認証タイプを選択します。 OAuth 2.0 パスワード付与。Web API URL、ユーザー名、パスワード、アプリケーション ID を選択する必要があります。 OAuth 2.0 クライアント証明書付与。Web API URL、アプリケーション ID、テナント ID、キーストアファイル、キーストアパスワード、キーエイリアス、キーパスワードを選択する必要があります。
Web API URL	Microsoft Dynamics 365 for Sales エンドポイントの URL。
ユーザー名	Microsoft Dynamics 365 for Sales アカウントに接続するためのユーザー名。
パスワード	Microsoft Dynamics 365 for Sales アカウントに接続するためのパスワード。
アプリケーション ID	Microsoft Dynamics 365 for Sales の Azure アプリケーション ID。
テナント ID	Azure Active Directory のディレクトリ ID。
キーストアファイル	キーストアの場所およびファイル名。Hosted Agent を使用する場合には適用されません。
キーストアのパスワード	通信を安全に行うために必要なキーストアファイルのパスワード。
キーエイリアス	個々のキーのエイリアス名。
キーパスワード	通信を安全に行うために必要なキーストアファイルの個々のキーのパスワード。Hosted Agent を使用する場合には適用されません。
再試行エラーコード	再試行を実行するカンマ区切りの HTTP エラーコード。

プロパティ	説明
RETRY_COUNT	再試行間隔に基づいて、エンドポイントから応答を取得する再試行回数。 デフォルト値は 5 です。
再試行間隔	Microsoft Dynamics 365 for Sales コネクタが応答を再試行するまでに待機する秒数。 デフォルト値は 60 秒です。

Microsoft Dynamics 365 for Operations 接続のプロパティ

Microsoft Dynamics 365 for Operations 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Microsoft Dynamics 365 for Operations 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
サービスの URL	Microsoft Dynamics 365 for Operations サービスの URL を次の形式で入力します。 http/https:<server_name>:<port number> URL にポート番号を指定しない場合、エージェントはポート番号 443 をクエリに使用します。
ユーザー名	Microsoft Dynamics 365 for Operations アカウントに接続するためのユーザー名。
パスワード	Microsoft Dynamics 365 for Operations アカウントに接続するためのパスワード。
アプリケーション ID	Microsoft Dynamics 365 for Operations のネイティブアプリケーション ID。

Microsoft Excel 接続のプロパティ

Microsoft Excel 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Microsoft Excel 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Microsoft Excel 接続の名前。
説明	接続の説明。説明は、765 文字を超えることはできません。

接続プロパティ	説明
タイプ	接続タイプ。一覧から Microsoft Excel ソースを選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
フォルダ URI	Microsoft Excel ファイルが格納されているディレクトリ。Microsoft Excel ファイルは、Secure Agent が実行されているのと同じマシン上にある必要があります。
TreatFirstRowAsHeader	ファイル内の最初の行がヘッダー行かどうかを指定します。
ファイル名	Microsoft Excel ファイルの名前。 注: ファイル名に、.xlsx 拡張子を追加する必要があります。

Microsoft SharePoint 接続のプロパティ

Microsoft SharePoint 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Microsoft SharePoint 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	Microsoft SharePoint 接続の名前を入力します。
説明	接続に関連する説明を入力します。
タイプ	Microsoft SharePoint 接続の接続タイプを選択します。
ランタイム環境	Microsoft SharePoint にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
ユーザー名	Microsoft SharePoint アカウントのユーザー名を入力します。
パスワード	Microsoft SharePoint アカウントのパスワードを入力します。
SharePoint の URL	OData プロトコルレイヤを介して公開するデータソースの URI を入力します。すべての要求は、この URI の拡張です。例: https://infasharepoint.abcd.com/Site/_vti_bin/Data.svc
UTC オフセット	日時フィールドに追加するための UTC 時間のオフセットを選択します。デフォルト値は UTC です。 データフィルタで \$LastRuntime 変数を使用するときは、\$LastRuntime 変数をオフセットするために、タイムゾーンを使用します。
添付ファイルパス	オプション。Microsoft SharePoint との間でのファイルのダウンロードと添付の場所のフォルダパスを指定します。
バッチサイズ	Microsoft SharePoint サーバーから取得する行数を定義します。
ロギングの有効化	ロギングを有効化するチェックボックスを選択します。

Microsoft Sharepoint Online 接続のプロパティ

Microsoft Sharepoint Online 接続を作成するには、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Microsoft Sharepoint Online 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	Microsoft Sharepoint Online 接続の名前を入力します。
説明	接続に関連する説明を入力します。
タイプ	Microsoft Sharepoint Online 接続の接続タイプを選択します。
ランタイム環境	Microsoft Sharepoint Online にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
Client_Id	有効なアクセストークンを生成するために必要な Microsoft Sharepoint Online のクライアント ID。
Client_Secret	有効なアクセストークンを生成するために必要な Microsoft Sharepoint Online のクライアントシークレット。
Refresh_Token	Microsoft Sharepoint Online のリフレッシュトークン。
Redirect_URL	Microsoft Sharepoint Online アカウントからのリダイレクト先の URL を入力します。
URL	Microsoft Sharepoint Online アカウントへの URL を入力します。
Attachment_File_Path	Microsoft Sharepoint Online との間でのファイルのダウンロードと添付の場所のフォルダパスを指定します。
Subsite_URL	オプション。Microsoft Sharepoint Online アカウントのサブサイト URL を入力します。 サブサイト URL を入力しない場合、Microsoft Sharepoint Online コネクタはファイルを URL プロパティに指定した URL から読み取ります。

Microsoft SQL Server CDC 接続のプロパティ

SQL Server CDC 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、SQL Server CDC 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	SQL Server CDC 接続の名前。この名前は、組織内で一意にする必要があります。接続名には、英数字、スペース、および次の特殊文字を含めることができます。_ . + - 名前の先頭または末尾のスペースはトリミングされ、名前の一部として保存されません。最大長は 100 文字です。接続名では大文字と小文字は区別されません。
説明	SQL Server CDC 接続の説明。最大長は 255 文字です。
タイプ	接続タイプ。SQL Server CDC の場合、タイプは SQL Server CDC である必要があります。
ランタイム環境	マッピングタスクの実行に使用する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。
リスナの場所	SQL Server 変更データのための PWX CDC リーダー要求を処理する PowerExchange リスナがあり、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を実行するシステムのホスト名または IP アドレス。リスナのポート番号も含めます。次の形式で値を入力します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。 <i>host_name:port_number</i> 以下に例を示します。 MSSCDC1A:1467
ユーザー名	PowerExchange リスナセキュリティが有効化されているときに、PowerExchange リスナにアクセスするために使用できるユーザー名。PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にした場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名です。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。
パスワード	[ユーザー名] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
コレクション名	SQL Server ソーステーブルの登録が含まれる登録グループの [インスタンス] フィールド内に指定される SQL Server インスタンス名。この値は、接続の使用時に、PWX CDC メタデータアダプタがインポートする抽出マップメタデータをフィルタするために使用されます。
CAPI 接続名	PowerExchange DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される CAPX CAPI_CONNECTION 文の名前。この文には、PWX CDC リーダーが PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) ログファイルからの変更データを抽出するために使用するパラメータが含まれます。PWX CDC リーダーにこのプロパティ値が必要であり、DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される任意のデフォルトの CAPI_CONNECTION 文を無視します。
ロッガー DBID	PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) 構成ファイル pwxcl.cfg で指定されている DBID パラメータ値。 この値は、PowerExchange ロgger で複数のパブリケーションデータベース内の記事の変更データを抽出する場合にのみ必要です。この場合は、PowerExchange dbmover.cfg 構成ファイルで MSQL CAPI_CONNECTION 文の MULTIPUB パラメータを Y に設定する必要があります。設定しない場合、抽出に失敗します。

プロパティ	説明
接続リトライ期限	初期接続の試行の失敗後、PWX CDC リーダーが PowerExchange リスナへの再接続を試行する秒数。接続が再試行時間中に確立できない場合、マッピングタスクに失敗します。デフォルト値は 0 であり、接続の再試行は無効になります。
圧縮	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを圧縮するかどうかを制御します。データを圧縮するには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティは選択されていません。
暗号化	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを暗号化するかどうかを制御します。また、使用する暗号化の種類も指定します。次のいずれかのオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> - なし。暗号化は使用しません。 - AES 128 ビット。128 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 192 ビット。192 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 256 ビット。256 暗号化キーを使用します。 デフォルトは [なし] です。
ペーシングサイズ	後続データ用に次の PWX CDC リーダー要求を待機する一時停止までに、ソースシステムが PowerExchange リスナに渡す行数またはキロバイト単位のデータ量。この値を減らすと、セッションのパフォーマンスが向上します。パフォーマンスを最大にするには、0 を使用します。デフォルトである最小値は 0 です。
ペーシング単位	[ペーシングサイズ] プロパティと一緒に使用する単位の種類。 [行] または [キロバイト] のいずれかを選択します。
マップの場所	抽出マップがあるシステムのホスト名または IP アドレス。ポート番号も含めます。この値は、PowerExchange リスナが、抽出マップからリモートにある PowerExchange ログガー (Linux、UNIX、Windows 用) マシン上で実行されている場合に必要です。リスナは、変更データ抽出要求を処理するために、抽出マップへのアクセスを必要とします。次の形式で値を入力します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。 <i>host_name:port_number</i> 以下に例を示します。 MSSCDC2B:25100 注: 接続をテストして抽出マップメタデータをインポートするための [マップの場所] の値は、[リスナの場所] の値よりも優先されます。
マップの場所のユーザー	[マップの場所] プロパティ内に指定された場所の PowerExchange リスナにアクセスできるユーザー名。
マップの場所のパスワード	[マップの場所のユーザー] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
イベントテーブル	ユーザー定義イベントに基づく変更データ抽出を停止するためにイベントテーブルを作成した場合、イベントテーブルの PowerExchange 抽出マップの名前を入力します。イベントテーブルは、CDC ソースシステム上の SQL Server テーブルである必要があります。

プロパティ	説明
Low-Value をスペース で置換	文字データ内の NULL をスペースに置き換えるかどうかを制御します。文字データ内の NULL を置き換えるには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティが選択されています。
カスタムプロパティ	<p>PowerExchange のデフォルト設定よりも優先するために指定できるカスタムプロパティ。セミコロン (;) を区切り文字として使用することで、複数のプロパティを入力できます。通常は、グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ、カスタムプロパティを設定します。</p> <p>注: これらのプロパティは、PowerCenter での PWXPC Microsoft SQL Server CDC アプリケーション接続の PWX 上書きオプションと同じです。</p> <p>さらに、PowerExchange クライアントとリモートの PowerExchange リスナとの間で保護された接続を確立するために、次のプロパティを指定できます。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,{Y N})</p> <p>SSL パラメータと {Y N} パラメータを、接続を介したクライアント通信のための設定に追加します。このプロパティは、次の方法のいずれかで入力します。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,Y)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,N)</p> <p>オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> - SSL。クライアント通信に対して SSL 認証を有効にします。 - {Y N}。SSL 認証が有効なときに、クライアント SSL 証明書の検証が発生するかどうかを制御します。「N」を入力すると、クライアント証明書の検証が無効になり、サブジェクト証明書とプライベートキーがロードされるのが防止されます。デフォルトは Y です。 <p>注: DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に証明書がすでに指定されている場合、保護された接続を無効にするために、このパラメータを使用することはできません。コンフィギュレーションファイル内に証明書が指定されていない場合、保護された接続を追加できるだけです。</p>

Microsoft SQL Server 接続のプロパティ

Microsoft SQL Server 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、Microsoft SQL Server 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
SQL Server のバージョン	Microsoft SQL Server データベースのバージョン。

接続プロパティ	説明
認証モード	<p>Microsoft SQL Server にアクセスするための認証方法。次のいずれかの方法を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - Windows 認証: Microsoft SQL Server にアクセスするには、Microsoft Windows 認証を使用します。このオプションは、Microsoft Windows を使用してデータ統合にアクセスする際に使用できます。このオプションを選択した場合は、Microsoft SQL Server へのアクセス時に資格情報を入力する必要はありません。SQL Server 接続で Windows 認証を使用するには、Secure Agent サービスを開始するユーザーアカウントを Microsoft SQL Server データベース上で使用できるようにしてください。 <p>注: Windows 認証は、Linux でホストされる Microsoft SQL Server 2017 バージョンでは使用できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> - SQL Server: Microsoft SQL Server にアクセスするための Microsoft SQL Server のユーザー名とパスワードを入力します。 - Active Directory のパスワード: Microsoft Azure SQL データベースで認証を行い、このデータベースにアクセスするための Azure Active Directory のユーザー名とパスワードを入力します。
ユーザー名	<p>データベースログインに使用するユーザー名。Windows 認証モードを使用して Microsoft SQL Server にアクセスする場合は、適用しないでください。ユーザー名にはセミコロンを使用できません。</p> <p>Microsoft Azure SQL データベースに接続するためのユーザー名を <code>username@host</code> の形式で指定します。</p>
パスワード	<p>データベースログインに使用するパスワード。Windows 認証モードを使用して Microsoft SQL Server にアクセスする場合は、適用しないでください。パスワードにはセミコロンを使用できません。</p>
ホスト	<p>データベースサーバーをホストするマシンの名前。</p> <p>Microsoft Azure SQL データベースに接続する完全修飾されたホスト名を指定します。</p> <p>例えば、<code>vmjcmwxsfbheng.westus.cloudapp.azure.com</code> のように指定します。</p>
ポート	<p>データベースサーバーに接続するときに使用するネットワークポート番号。デフォルトのポート番号は 1433 です。</p>
インスタンス名	<p>Microsoft SQL Server データベースのインスタンス名。</p>
データベース名	<p>Microsoft SQL Server ターゲットのデータベース名。データベースで大文字と小文字が区別される場合は、データベース名の大文字と小文字も区別されます。最大長は 100 文字です。データベース名には英数字とアンダースコアのみを使用できます。</p>
スキーマ	<p>ターゲット接続に使用するスキーマ。</p>
コードページ	<p>データベースサーバーのコードページ。</p>
暗号化方法	<p>Secure Agent が、ドライバとデータベースサーバーとの間で送信されるデータの暗号化に使用する方法。暗号化方法を使用して、Microsoft Azure SQL データベースに接続できます。</p>
暗号プロトコルバージョン	<p>SSL 暗号化を有効にしたときに使用される暗号プロトコル。</p>

接続プロパティ	説明
サーバー証明書の検証	True に設定すると、Secure Agent が、データベースサーバーによって送信された証明書を検証します。 HostNameInCertificate パラメータを指定すると、Secure Agent は証明書内のホスト名も検証します。 False に設定すると、Secure Agent は、データベースサーバーによって送信された証明書を検証しません。
トラストストア	トラストストアファイルの場所と名前。トラストストアファイルには、ドライバが SSL サーバー認証に使用する認証機関 (CA) の一覧が含まれています。
信頼ストアのパスワード	トラストストアファイルの内容にアクセスするためのパスワード。
証明書内のホスト名	セキュアデータベースをホストするマシンのホスト名。ホスト名を指定すると、Secure Agent は、SSL 証明書内のホスト名との接続に含まれているホスト名を検証します。

Microsoft TFS 接続のプロパティ

Microsoft TFS 接続をセットアップするときは、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Microsoft TFS 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	Microsoft TFS アカウントのユーザー名。
パスワード	Microsoft TFS アカウントのパスワード。
デフォルトコレクション	デフォルトのチームプロジェクトコレクションの名前。
Team Foundation Server URL	Microsoft TFS に接続するための URL。

MongoDB 接続のプロパティ

MongoDB 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、MongoDB 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	接続の名前。この名前では、大文字と小文字が区別されず、ドメイン内で一意にする必要があります。このプロパティは、接続を作成した後に変更できます。名前は 128 文字以内で指定し、空白および以下の特殊文字は使用できません。 ~`!\$%^&*()-+={[}] \:;'"<,>./
説明	オプション。接続の説明。説明は、4,000 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。[MongoDB] を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ホスト名	MongoDB サーバーのホスト名または IP アドレス。
ポート	MongoDB サーバーのポート番号。デフォルトは 9042 です。
ユーザー名	MongoDB サーバーにアクセスするためのユーザー名。
パスワード	MongoDB サーバーにアクセスするためのユーザー名に対応するパスワード。
データベース名	接続する MongoDB データベースの名前。

プロパティ	説明
追加接続プロパティ	<p>以下の形式で、1 つ以上の JDBC 接続パラメータを入力します。</p> <pre><param1>=<value>&<param2>=<value>&<param3>=<value></pre> <p>JDBC パラメータは、キーと値のペアをアンパサンドで区切って指定する必要があります。</p> <p>MongoDB 接続では、次の JDBC 接続パラメータを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - AuthSource - batchSize - connectTimeoutMS - defaultStringColumnLength - dmlBatchSize - enableDoubleBuffer - enableTransaction - logLevel - logPath - samplingLimit - samplingStepSize - samplingStrategy <p>以下に例を示します。</p> <pre>defaultStringColumnLength=512&dmlBatchSize=1000&enableDoubleBuffer=false&enableTransaction=true&samplingLimit=200&samplingStepSize=2&samplingStrategy=Backwards</pre> <p>注: 【追加接続プロパティ】 で MongoDB サーバーのホスト名、ポート番号、ユーザー名、パスワードを指定した場合、【追加接続プロパティ】 で指定した値が優先されます。</p>
SSL モード	<p>MongoDB コネクタには適用されません。</p> <p>【無効】 を選択します。</p>
SSL トラストストアパス	<p>MongoDB コネクタには適用されません。</p>
SSL トラストストアパスワード	<p>MongoDB コネクタには適用されません。</p>

MongoDB JDBC 接続パラメータの設定の詳細については、Informatica How-To ライブラリの記事「Configuring the Simba MongoDB JDBC Driver Options for MongoDB Connector」を参照してください。

<https://kb.informatica.com/h2l/HowTo%20Library/1/1251-ConfiguringtheSimbaMongoDBJDBCDriverOptionsforMongoDBConnector-H2L.pdf>

MVP Plant 接続のプロパティ

MVP Plant 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、MVP Plant 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
MvpPlantApiHostName	MVP Plant のホスト名。 例 MVP Plant が Secure Agent と同じネットワーク上でホストされているときのホスト名。 http://localhost/ MVP Plant が Cloud 内でホストされているときのホスト名。 https://CustomerName.mvplant.com/
MvpPlantApiUserName	MVP Plant REST API とオブジェクトに対する管理者特権を持つ MVP Plant アカウントのユーザー名。
MvpPlantApiPassword	MVP Plant アカウントのパスワード。

MySQL CDC 接続のプロパティ

MySQL CDC 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、MySQL CDC 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	MySQL CDC 接続の名前。この名前は、組織内で一意にする必要があります。接続名には、英数字、スペース、および次の特殊文字を含めることができます。_ . + - 名前の先頭または末尾のスペースはトリミングされ、名前の一部として保存されません。 最大長は 100 文字です。接続名では大文字と小文字は区別されません。
説明	MySQL CDC 接続の説明。最大長は 255 文字です。
タイプ	接続タイプ。MySQL CDC の場合、タイプは MySQL CDC である必要があります。
ランタイム環境	マッピングタスクの実行に使用する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。

プロパティ	説明
リスナの場所	MySQL 変更データのための PWX CDC リーダー要求を処理する PowerExchange リスナがあり、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を実行するシステムのホスト名または IP アドレス。リスナのポート番号も含まれます。次の形式で値を入力します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。 <i>host_name:port_number</i> 以下に例を示します。 MYSCDC1A:1467
ユーザー名	PowerExchange リスナセキュリティが有効化されているときに、PowerExchange リスナにアクセスするために使用できるユーザー名。PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にした場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名です。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。
パスワード	[ユーザー名] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
コレクション名	MySQL ソーステーブルの登録が含まれる登録グループの [インスタンス] フィールド内に指定される MySQL インスタンス名。この値は、接続の使用時に、PWX CDC メタデータアダプタがインポートする抽出マップメタデータをフィルタするために使用されます。
CAPI 接続名	PowerExchange DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される CAPX CAPI_CONNECTION 文の名前。この文には、PWX CDC リーダーが PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) ログファイルからの変更データを抽出するために使用するパラメータが含まれます。PWX CDC リーダーにこのプロパティ値が必要であり、DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される任意のデフォルトの CAPI_CONNECTION 文を無視します。
接続リトライ期限	初期接続の試行の失敗後、PWX CDC リーダーが PowerExchange リスナへの再接続を試行する秒数。接続が再試行時間中に確立できない場合、マッピングタスクに失敗します。デフォルト値は 0 であり、接続の再試行は無効になります。
圧縮	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを圧縮するかどうかを制御します。データを圧縮するには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティは選択されていません。
暗号化	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを暗号化するかどうかを制御します。また、使用する暗号化の種類も指定します。次のいずれかのオプションを選択します。 - なし。暗号化は使用しません。 - AES 128 ビット。128 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 192 ビット。192 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 256 ビット。256 暗号化キーを使用します。 デフォルトは [なし] です。
ペーシングサイズ	後続データ用に次の PWX CDC リーダー要求を待機する一時停止までに、ソースシステムが PowerExchange リスナに渡す行数またはキロバイト単位でのデータ量。この値を減らすと、セッションのパフォーマンスが向上します。パフォーマンスを最大にするには、0 を使用します。 デフォルトである最小値は 0 です。
ペーシング単位	[ペーシングサイズ] プロパティと一緒に使用する単位の種類。 [行] または [キロバイト] のいずれかを選択します。

プロパティ	説明
マップの場所	<p>抽出マップが含まれるシステムのホスト名または IP アドレス。ポート番号も含めます。この値は、PowerExchange リスナが、抽出マップからリモートにある PowerExchange ロッガー（Linux、UNIX、Windows 用）マシン上で実行されている場合に必要です。リスナは、変更データ抽出要求を処理するために、抽出マップへのアクセスを必要とします。次の形式で値を入力します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。</p> <p><i>host_name:port_number</i></p> <p>以下に例を示します。</p> <p>MYSCDC2B:25100</p> <p>注: 接続をテストして抽出マップメタデータをインポートするための [マップの場所] の値は、[リスナの場所] の値よりも優先されます。</p>
マップの場所のユーザー	[マップの場所] プロパティ内に指定された場所の PowerExchange リスナにアクセスできるユーザー名。
マップの場所のパスワード	[マップの場所のユーザー] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
イベントテーブル	ユーザー定義イベントに基づく変更データ抽出を停止するためにイベントテーブルを作成した場合、イベントテーブルの PowerExchange 抽出マップの名前を入力します。イベントテーブルは、CDC ソースシステム上の MySQL テーブルである必要があります。
Low-Value をスペースで置換	文字データ内の NULL をスペースに置き換えるかどうかを制御します。文字データ内の NULL を置き換えるには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティが選択されています。
カスタムプロパティ	<p>PowerExchange のデフォルト設定よりも優先するために指定できるカスタムプロパティ。セミコロン (;) を区切り文字として使用することで、複数のプロパティを入力できます。通常は、グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ、カスタムプロパティを設定します。</p> <p>注: これらのプロパティは、PowerCenter での PWXPC MySQL CDC アプリケーション接続の PWX 上書きオプションと同じです。</p> <p>さらに、PowerExchange クライアントとリモートの PowerExchange リスナとの間で保護された接続を確立するために、次のプロパティを指定できます。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,{Y N})</p> <p>SSL パラメータと {Y N} パラメータを、接続を介したクライアント通信のための設定に追加します。このプロパティは、次の方法のいずれかで入力します。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,Y)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,N)</p> <p>オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> - SSL。クライアント通信に対して SSL 認証を有効にします。 - {Y N}。SSL 認証が有効なときに、クライアント SSL 証明書の検証が発生するかどうかを制御します。「N」を入力すると、クライアント証明書の検証が無効になり、サブジェクト証明書とプライベートキーがロードされるのが防止されます。デフォルトは Y です。 <p>注: DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に証明書がすでに指定されている場合、保護された接続を無効にするために、このパラメータを使用することはできません。コンフィギュレーションファイル内に証明書が指定されていない場合、保護された接続を追加できるだけです。</p>

MySQL 接続のプロパティ

MySQL 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	MySQL データベースにアクセスする際に使用する Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
ユーザー名	データベースログインに使用するユーザー名。ユーザー名にセミコロンを含めることはできません。
パスワード	データベースログインに使用するパスワード。パスワードにセミコロンを含めることはできません。
ホスト	データベースサーバをホストするマシンの名前。
ポート	データベースサーバに接続するときに使用するネットワークポート番号。デフォルトは 3306 です。
データベース名	接続する MySQL データベースの名前。 注: データベース名では大文字小文字が区別されます。 最大長は 64 文字です。有効な文字は英数字とアンダースコア文字です。
コードページ	データベースサーバのコードページ。

SSL プロパティ

MySQL データベースとの通信を安全に行うため、SSL を使用するように MySQL 接続を設定できます。

注: SSL を MySQL 接続に対して有効にできるのは、8.x MySQL JDBC ドライバおよび ODBC ドライバを使用する場合のみです。MySQL JDBC ドライバと ODBC ドライバの両方がバージョン 8.x になるようにします。

SSL を設定するには、まず、MySQL ODBC ドライバと JDBC ドライバのバージョン 8.x をダウンロードしてインストールする必要があります。バージョン 8.x の MySQL ODBC ドライバと JDBC ドライバのインストールの詳細については、ナレッジベースの記事 [561573](#) を参照してください。

ドライバをインストールしたら、MySQL の接続プロパティで SSL を有効にし、セキュア通信に使用する TLS プロトコルを指定します。

SSL を MySQL 接続に対して有効にする場合、MySQL JDBC ドライバと ODBC ドライバの両方に対して SSL プロパティを設定する必要があります。JDBC ドライバに対して必要な SSL プロパティを設定することで、Secure Agent は MySQL から安全にメタデータにアクセスできます。また、ODBC ドライバに対して必要な SSL プロパティを設定することで、Secure Agent は、MySQL との間で安全にデータの読み書きを行うためのマッピングを実行します。

注: Hosted Agent を使用する場合、SSL は適用できません。

次の表に、MySQL 接続の SSL プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
SSL の使用	Secure Agent が MySQL データベースへのセキュア接続を確立するかどうかを決定します。 このオプションを選択し、データベースサーバーが SSL をサポートする場合、Secure Agent は暗号化された接続を確立します。MySQL データベースサーバーが SSL をサポートしない場合、 [SSL が必要] チェックボックスを有効にしたか無効にしたかに応じて、接続は失敗するか、Secure Agent が暗号化されていない接続を確立します。 [SSL の使用] チェックボックスを選択しない場合、Secure Agent は暗号化されていない接続の確立を試行します。
サーバー証明書の検証	[SSL の使用] とこのオプションを選択すると、クライアントは、データベースサーバーによって送信されたサーバー証明書を検証します。
SSL が必要	[SSL の使用] を選択した場合にのみ適用されます。 [SSL が必要] チェックボックスを選択して、MySQL データベースが SSL をサポートする場合、Secure Agent は SSL 接続を確立します。 [SSL が必要] チェックボックスを選択して、MySQL データベースが SSL をサポートしない場合、Secure Agent は SSL 接続を確立しようとしませんが失敗します。 [SSL が必要] チェックボックスをクリアして、MySQL データベースが SSL をサポートしない場合、Secure Agent は暗号化されていない接続を確立します。
TLS プロトコル	[SSL の使用] を選択した場合にセキュア通信に使用される TLS プロトコルです。 次のプロトコルの 1 つ以上を選択できます。 - TLSv1 - TLSv1.1 - TLSv1.2

次の表に、**[SSL の使用]** を有効にした場合の、JDBC ドライババージョン 8.x の MySQL 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
信頼証明書キーストア	トラストストアファイルのパスおよびファイル名。ファイルパスには、file とコロン (file:) のプレフィックスが必要です。 例: file:C:\SSL\mysql_new\truststore
信頼証明書キーストアのパスワード	トラストストアファイルのパスワード。
クライアント証明書キーストア	キーストアファイルのパスおよびファイル名。ファイルパスには、file とコロン (file:) のプレフィックスが必要です。 例: file:C:\SSL\mysql_new\keystore
クライアント証明書キーストアのパスワード	キーストアファイルにアクセスするためのパスワード。
JDBC 暗号スイート	RFC 形式でコロンで区切られた暗号スイートの値。 以下に例を示します。 TLS_ECDHE_ECDSA_WITH_AES_128_CBC_SHA256: TLS_ECDHE_RSA_WITH_AES_128_CBC_SHA256

次の表に、**【SSLの使用】** を有効にした場合の、ODBC ドライババージョン 8.x の MySQL 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
SSL 証明機関	CA 証明書のパスと名前。 例: C:\SSL\mysql_new\ca.pem
SSL 証明書	クライアント証明書のパスと名前。 例: C:\SSL\mysql_new\client-cert.pem
SSL キー	クライアントのプライベートキーのパスと名前。 例: C:\SSL\mysql_new\client-key.pem
SSL 暗号	OpenSSL 形式でコロンで区切られた暗号スイートの値。 以下に例を示します。 ECDHE-ECDSA-AES128-GCM-SHA256: ECDHE-ECDSA-AES256-GCM-SHA384: ECDHE-RSA-AES128-GCM-SHA256:
サーバーの ID の検証	サーバー CA 証明書の検証中に行われる、証明書に含まれるホスト名の検証。 このプロパティは、SSL プロパティで [サーバー証明書の検証] を有効にした場合にのみ適用されます。

Netezza 接続のプロパティ

Netezza 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、Netezza 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
データベース	Netezza データベースの名前。
Schemaname	Netezza ソースまたはターゲットに使用されるスキーマ。
Servername	Netezza データベースホスト名。
Port	データベースサーバーに接続するとき使用するネットワークポート番号。 デフォルトは 1521 です。
Driver	Netezza データベースへの接続に使用される Netezza ODBC ドライバ。
ランタイム追加接続設定	データを取得するために必要な追加のランタイム属性。 例: -securityLevel=preferredUnSecured;caCertFile =
メタデータ追加接続設定	メタデータを取得するために、ODBC ドライバのオプションのプロパティを設定する値。

接続プロパティ	説明
ユーザー名	データベースへのアクセスに必要な読み込みおよび書き込みデータベース権限を持つデータベースユーザー名。
パスワード	上記データベースユーザー名のパスワード。

NetSuite 接続のプロパティ

NetSuite 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、NetSuite 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
トークン ID	NetSuite で生成されたトークン ID。 トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は必須です。ユーザー名とパスワードを使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。
トークンシークレット	NetSuite で生成されたトークンシークレット。 トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は必須です。ユーザー名とパスワードを使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。
ユーザー名	NetSuite アカウントのユーザー名。ユーザー名は電子メールアドレスです。 トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。
パスワード	NetSuite アカウントのパスワード。 トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。
サービス URL	NetSuite WSDL URL. NetSuite アカウントでデフォルトの NetSuite WSDL URL を使用していない場合は、NetSuite アカウントで使用する WSDL URL を入力します。
アカウント	NetSuite アカウント ID。アカウント ID を検索するには、NetSuite にログインして、[Setup] > [Integration] > [Web Services Preferences] に移動します。 [Setup] メニューが使用できない場合は、[Support] > [Go to Suite Answers] > [Contact support by phone] に移動します。ページにアカウント ID が表示されます。
アプリケーション ID	NetSuite のアプリケーション ID。 トークンベースの認証のない WSDL URL バージョン 2015_2 以降を使用する場合は必須です。アプリケーション ID プロパティが空白の場合、エージェントは Informatica アプリケーション ID を使用します。 アプリケーション ID を検索するには、NetSuite にログインして、[Setup] > [Integration] > [Manage Integrations] に移動します。アプリケーション ID がない場合は、作成できます。[Manage Integrations] ページで [New] をクリックします。アプリケーション ID の保存後、[Manage Integrations] ページでアプリケーション ID 番号を表示できます。

プロパティ	説明
レコード カスタム フィールド	<p>カスタム NetSuite フィールドを指定してデータ統合で使用できるようにします。</p> <p>次のフォーマットを使用してカスタムフィールドを追加します。scriptId の値は、カスタムフィールドごとに設定される NetSuite ユーザーインターフェイス内の ID フィールドです。</p> <pre>[<Object Name>] scriptId = <custom field name1>,<custom field name2>,<custom field name3></pre> <p>例 :</p> <pre>[Sales] scriptId = discountPrice,salesDescription,salesEvent3</pre> <p>次のフォーマットを使用して、NetSuite 詳細検索のカスタムフィールドを追加します。scriptId の値は、カスタムフィールドごとに設定される NetSuite ユーザーインターフェイス内の ID フィールドです。</p> <pre>[<Object Name>] scriptId = <custom field name1>,<custom field name2>,<custom field name3></pre> <p>例 :</p> <pre>[EmployeeSearchAdvanced] scriptId = custentity74,custentity66</pre> <p>カスタムセグメントデータを読み書きする場合、次の形式を使用して、カスタムセグメントフィールドを追加します。</p> <pre>[<Object Name>] custSegScriptIds=custseg1:select,custseg2:multiselect,custseg3:select....</pre> <p>ここで scriptId の値は、カスタムセグメントフィールドごとに設定される NetSuite ユーザーインターフェイス内の ID フィールドです。</p> <p>以下に例を示します。</p> <pre>[Employee] custSegScriptIds=custentity_cseg1:select,custentity_csegcs_multisel:multiselect</pre> <p>子レコードカスタムセグメントとの間でデータを読み書きする場合、次の形式を使用して、子レコードカスタムセグメントフィールドを追加します。</p> <pre>[<Object Name>] custSegScriptIds=custseg1:select,custseg2:multiselect,custseg3:select....</pre> <p>例 :</p> <pre>[JournalEntry] custSegScriptIds=custbody_cseg1:select,custbody_cseg2:select,custbody_cseg3:select</pre> <pre>[JournalEntryLineList] custSegScriptIds=custcol_cseg1:select,custcol_cseg2:select,custcol_cseg3:select</pre>

プロパティ	説明
レコードフィルタフィールド	<p>NetSuite レコードフィールドの名前を関連する NetSuite 検索レコードフィールドの名前にマップして、フィルタ内でフィールドを使用できるようにします。</p> <p>次のように、レコードフィールド名と関連する SearchBasic フィールド名のリストを記述します。</p> <pre>[<record 1> <record field name>=<SearchBasic field name><record field name2>=<SearchBasic field name2> <record 2> <record field name>=<SearchBasic field name><record field name2>=<SearchBasic field name2><record field name3>=<SearchBasic field name3></pre> <p>例:</p> <pre>[Account] acctName=nameaddr1=address1</pre> <p>記憶されたトランザクションが NetSuite アカウント内で有効な場合、NetSuite からのトランザクションデータを読み取るには、次の形式でレコードフィールド名と関連 SearchBasic フィールド名を追加します。</p> <pre>[<record 1> <record field name>=<SearchBasic field name></pre> <p>例:</p> <pre>[JournalEntry] reversalEntry=memorized</pre>
保存済みの検索レコードフィールド	<p>NetSuite の保存済み検索フィールドは、デフォルトでは NULL 値が含まれているとデータ統合に表示されません。保存済みの検索フィールドに NULL 値があってもデータ統合で使用できるように、保存済みの検索フィールドを追加します。一意の scriptId で識別される保存済み検索フィールドを追加する NetSuite 保存済み検索レコードごとに、個別のセクションを作成します。</p> <p>次のフォーマットを使用して検索フィールドを追加します。</p> <pre><savedSearchId1>=<savedSearchDeclaredField1Name>,<savedSearchDeclaredField2Name>,<savedSearchCustomFieldScriptId1>,<savedSearchCustomFieldScriptId2>,<StandardJoin <FieldName1>,customSearchJoin <scriptID1></pre> <p>例:</p> <pre>1000=phone,email,custentity78,custentity65,userJoin email,customSearchJoin custrecord1424</pre> <p>カスタムセグメントデータを読み取る場合、次の形式を使用して、検索カスタムセグメントフィールドを追加します。</p> <pre>[savedSearchId1]=custseg1:select,custseg2:multiselect,custseg3:select...</pre> <p>例:</p> <pre>[741]=custseg1:select,custentity_cseg1:select,custentity_csegcs_multsel:multiselect</pre> <p>カスタム結合を使用してカスタムレコード標準フィールドを読み取るために作成される、タスクのメタデータをオーバーライドする場合、次の形式を使用して、検索カスタムレコード標準フィールドを追加します。</p> <pre><savedSearchId1>=CustomSearchJoin <scriptId of custom record>__<standard field name></pre> <p>例:</p> <pre>356=CustomSearchJoin uss_custom_code__internalId</pre>

NetSuite のトークンベースの認証

トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスするには、NetSuite 接続を設定できます。

トークンベースの認証は、NetSuite にアクセスする場合に優先的に選択される方法です。接続がトークンベースの認証を使用する場合、エージェントは NetSuite にアクセスするために、ユーザー名とパスワードの代わりに、トークン ID とトークンシークレットを使用します。トークンベースの認証を使用するためには、NetSuite 接続は WSDL URL バージョン 2015_2 以降を使用する必要があります。

トークンベースの認証を設定するには、データ統合トークンベースの認証用の NetSuite バンドルをインストールし、トークン ID とトークンシークレットを NetSuite で生成します。トークンは NetSuite アカウントから削除しない限り、期限切れになることはありません。ただし、Informatica が将来バンドルバージョンを更新した場合、バンドルを更新し、新しいトークンを生成する必要があります。

データ統合で NetSuite 接続プロパティを指定するときに、生成されたトークン ID とトークンシークレットを入力します。WSDL URL バージョン 2015_2 を使用する接続のトークン情報とユーザー名およびパスワードを含める場合、エージェントは NetSuite にアクセスするために、トークンベースの認証を使用します。

NetSuite V2 接続のプロパティ

NetSuite V2 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、NetSuite V2 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	NetSuite アカウントのユーザー名。ユーザー名は電子メールアドレスです。トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。
パスワード	NetSuite アカウントのパスワード。トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。
REST ドメイン	REST ドメイン名: https://rest.netsuite.com 例えば、次の値を入力できます。 <ul style="list-style-type: none">- rest.na1.beta.netsuite.com (ベータ環境用)- rest.sandbox.netsuite.com (サンドボックスアカウント用)- rest.netsuite.com または rest.na1.netsuite.com (本番アカウント用)
アカウント ID	NetSuite アカウント ID。アカウント ID を検索するには、NetSuite にログインして、 [Setup] > [Integration] > [Web Services Preferences] に移動します。 [Setup] メニューが使用できない場合は、 [Support] > [Go to Suite Answers] > [Contact support by phone] に移動します。ページにアカウント ID が表示されます。
コンシューマキー	Web サービスアプリケーションに関連付けられるクライアントキー。トークンベースの認証の場合のみ必要です。
コンシューマシークレット	Web サービスアプリケーションに接続するためのクライアントパスワード。トークンベースの認証の場合のみ必要です。

プロパティ	説明
トークン ID	NetSuite で生成されたトークン ID。 トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は必須です。ユーザー名とパスワードを使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。
トークンシークレット	NetSuite で生成されたトークンシークレット。 トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は必須です。ユーザー名とパスワードを使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。

NetSuite RESTlet 接続のプロパティ

NetSuite RESTlet 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、NetSuite RESTlet 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	NetSuite アカウントのユーザー名。ユーザー名は電子メールアドレスです。 トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。
パスワード	NetSuite アカウントのパスワード。 トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。
REST ドメイン	REST ドメイン名。例として、REST ドメイン詳細が追加された RESTlet URL 形式を挙げます。 <code><REST Domain>/app/site/hosting/restlet.nl?script<ScriptID>&deploy=1</code> 次に REST ドメインの例を示します。 <ul style="list-style-type: none"> - rest.na1.beta.netsuite.com (ベータ環境用) - rest.sandbox.netsuite.com (サンドボックスアカウント用) - rest.netsuite.com または rest.na1.netsuite.com (本番アカウント用)
アカウント	NetSuite アカウント ID。アカウント ID を検索するには、NetSuite にログインして、 [Setup] > [Integration] > [Web Services Preferences] に移動します。 [Setup] メニューが使用できない場合は、[Support] > [Go to Suite Answers] > [Contact support by phone] に移動します。ページにアカウント ID が表示されます。
コンシューマキー	Web サービスアプリケーションに関連付けられるクライアントキー。 トークンベースの認証タイプの場合のみ必要です。
コンシューマシークレット	Web サービスアプリケーションに接続するためのクライアントパスワード。 トークンベースの認証タイプの場合のみ必要です。

プロパティ	説明
トークン ID	NetSuite で生成されたトークン ID。 トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は必須です。ユーザー名とパスワードを使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。
トークンシークレット	NetSuite で生成されたトークンシークレット。 トークンベースの認証を使用して NetSuite にアクセスする場合は必須です。ユーザー名とパスワードを使用して NetSuite にアクセスする場合は省略可能です。

OData 接続のプロパティ

OData 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、OData 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	OData サービスに接続するユーザー名。
パスワード	ユーザー名に関連付けられているパスワード。
サービスルート URI	OData プロトコルを介して提供されるデータソースのルート URI。 サービスルート URI によって特定されるリソースは、RFC 5023 で規定された AtomPub サービスドキュメントである必要があります。リソースに異なる形式が要求される場合、リソースは、AtomPub サービスドキュメントまたは AtomPub サービスドキュメントの代替表現の OData 規約に従う必要があります。 ODate サービスのルートから返されるサービスドキュメントに基づいて、データサービスに対して使用できるすべてのリソースコレクションを表示できます。 注: サービスルート URI 規約の詳細については、 http://www.odata.org/documentation/odata-version-2-0/uri-conventions を参照してください。
OData パラメータファイルのパス	URL に付加するファイルの絶対パス。キーと値のペアが新しい行で分割されて格納されたファイル。このファイルは、URL に必要な追加のパラメータ値を確認するために使用できます。 注: ファイル内のキーと値のペアをエンコードするには、必ずパーセントエンコードを使用してください。
データのシリアル化形式	転送するデータの形式。以下のいずれかのオプションを選択することができます。 - ATOM/XML - JSON デフォルトは ATOM/XML です。
オブジェクトフィルタ	OData サービス内でアクセスするオブジェクトを指定します。カンマ区切りのオブジェクト名のリストを指定できます。
プライマリキーのオーバーライド	プライマリキーとして使用する列名。複数の列名を区切るには、カンマを使用します。

OData Consumer 接続のプロパティ

OData Consumer 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、OData Consumer 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	OData Consumer サービスに接続するユーザー名。
パスワード	ユーザー名に関連付けられているパスワード。
URL	OData V4 プロトコルを介して提供される OData Consumer サービスデータソースの URL。URL には、\$metadata またはオブジェクト名を含めることはできません。 例: http://services.odata.org/V4/Northwind/Northwind.svc/ 注: URL 規則の詳細については、 http://docs.oasis-open.org/odata/odata/v4.0/odata-v4.0-part2-url-conventions.html を参照してください。
データのシリアル化形式	転送するデータの形式。以下のいずれかのオプションを選択することができます。 - ATOM/XML - JSON デフォルトは ATOM/XML です。
セキュリティタイプ	OData Consumer サーバーとのセキュアな接続を確立するために使用できるセキュリティプロトコル。SSL または TLS を選択します。デフォルトは [なし] です。
トラストストアファイル名	セキュリティタイプを選択する場合、必須です。OData Consumer サーバーの公開証明書が含まれるトラストストアファイルの名前。 デフォルトは、infa_truststore.jks です。
TrustStore のパスワード	セキュリティタイプを選択する場合、必須です。 OData Consumer サーバーの公開証明書が含まれるトラストストアファイルのパスワード。
キーストアファイル名	セキュリティタイプを選択する場合、必須です。OData Consumer サーバーのプライベートキーが含まれるキーストアファイルの名前。 デフォルトは、infa_truststore.jks です。
キーストアのパスワード	セキュリティタイプを選択する場合、必須です。 OData Consumer サーバーのプライベートキーが含まれるキーストアファイルのパスワード。

ODBC 接続のプロパティ

ODBC 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、ODBC 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	システムへのアクセスに使用する Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
ユーザー名	データベースログインに使用するユーザー名。
パスワード	データベースログインに使用するパスワード。パスワードにセミコロンを含めることはできません。
データソース名	システム DSN。
スキーマ	ソースまたはターゲットに使用されるスキーマ。

接続プロパティ	説明
コードページ	<p>接続に定義されているデータベースサーバーまたはフラットファイルのコードページ。次のいずれかのコードページを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - MS Windows Latin 1。ISO 8859-1 Western European データの場合に選択します。 - UTF-8。Unicode データの場合に選択します。 - Shift-JIS。ダブルバイト文字データの場合に選択します。 - ISO 8859-15 Latin 9 (Western European)。 - ISO 8859-2 Eastern European。 - ISO 8859-3 Southeast European。 - ISO 8859-5 Cyrillic。 - ISO 8859-9 Latin 5 (Turkish)。 - IBM EBCDIC International Latin-1。 - Japanese Extended UNIX Code (incl.JIS x 0212) - Japanese EUC (\ <-> Yen マッピングあり) - Japanese EUC (Packed Format) - IBM EBCDIC Japanese - IBM EBCDIC Japanese CP939 - Japanese EBCDIC Fujitsu - HITACHI KEIS Japanese - NEC ACOS JIPSE Japanese - UNISYS Japanese - MITSUBISHI MELCOM Japanese - Japanese EBCDIC-Kana Fujitsu - HITACHI KEIS-Kana Japanese - NEC ACOS JIPSE-Kana Japanese - UNISYS-Kana Japanese - MITSUBISHI MELCOM-Kana Japanese - EBCDIC Japanese - EBCDIK Japanese - PC Japanese SJIS-78 syntax (IBM-942) - PC Japanese SJIS-90 (IBM-943) - EBCDIC Japanese Katakana SBCS - EBCDIC Japanese Katakana (ユーロあり) - EBCDIC Japanese Latin-Kanji (ユーロあり) - EBCDIC Japanese Extended (DBCS IBM-1390 と DBCS IBM-1399 との組み合わせ) - EBCDIC Japanese Latin (ユーロアップデートあり) - EBCDIC Japanese Katakana SBCS (ユーロアップデートあり) - MS Taiwan Big-5 w/ HKSCS extensions - MS Windows Traditional Chinese、Big 5 のスーパーセット - Taiwan Big-5 (ユーロアップデートあり) - Taiwan Big-5 (ユーロアップデートなし) - PC Chinese GBK (IBM-1386) - Chinese EUC - Simplified Chinese (GB2312-80) - Hong Kong Supplementary Character Set - ISO 8859-8 Hebrew - PC Hebrew (old) - PC Hebrew (ユーロアップデートなし) - PC Hebrew (ユーロアップデートあり) - MS Windows Hebrew (旧バージョン) - MS Windows Hebrew (ユーロアップデートなし) - Lotus MBCS encoding for Windows Hebrew - EBCDIC Hebrew (updated with sheqel, control characters) - EBCDIC Hebrew (ユーロあり) - EBCDIC Hebrew (updated w/ euro and new sheqel, control characters) - Israeli Standard 960 (7 ビット Hebrew エンコーディング)

接続プロパティ	説明
ODBC サブタイプ	<p>プッシュダウンの最適化のサポートを有効にできるようにするための、接続タイプのカテゴリ。次のいずれかのサブタイプを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - Azure DW。Microsoft Azure SQL Data Warehouse との間で読み書きするときは、[Azure DW] を選択します。 - Google BigQuery。Google BigQuery との間で読み書きするときは、[Google BigQuery] を選択します。 - Redshift。Amazon Redshift との間で読み書きするときは、[Redshift] を選択します。 - Snowflake。Snowflake との間で読み書きするときは、[Snowflake] を選択します。 - その他。その他の任意のデータベースとの間で読み書きするときは、[その他] を選択します。例えば、Microsoft Access、IBM DashDB、NetSuite、Microsoft Excel、Teradata などのデータベースに接続するには、[その他] を選択する必要があります。デフォルトは [その他] です。
Linux 用のドライバマネージャ	<p>Linux プラットフォームで新しい ODBC 接続を作成するとき、Linux Secure Agent 用のドライバマネージャを選択できます。次のいずれかのドライバマネージャを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - Data Direct - unixODBC2.3.0 - unixODBC2.3.4 <p>デフォルトのドライバマネージャは UnixODBC2.3.0 です。</p> <p>Teradata に接続するには、Linux のドライバマネージャとして Data Direct のみを使用できます。</p>

OpenAir 接続のプロパティ

OpenAir 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、OpenAir 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
Secure Agent	OpenAir へのアクセスに使用される Secure Agent。
ユーザー名	OpenAir アカウントのユーザー名。
パスワード	OpenAir アカウントのパスワード。
会社名	会社名を入力します。
API 名前空間	API 名前空間を入力します。
API キー	API キーを入力します。
クライアント名	クライアント名を入力します。
WSDL Url	WSDL URL を入力します。
エンドポイント URL	エンドポイントの URL を入力します。

プロパティ	説明
バッチサイズ	OpenAir 書き込みバッチサイズを入力します。 デフォルトは 100 です。
バージョン	バージョン番号を入力します。
ロギングの有効化	ログを有効にする場合に選択します。

Oracle 接続のプロパティ

Oracle 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Oracle 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	Oracle にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
ユーザー名	データベースログインに使用するユーザー名。ユーザー名にセミコロンを含めることはできません。
パスワード	データベースログインに使用するパスワード。パスワードにセミコロンを含めることはできません。
ホスト	データベースサーバをホストするマシンの名前。
ポート	データベースサーバに接続するとき使用するネットワークポート番号。デフォルトは 1521 です。
サービス名	Oracle データベースを一意に識別するサービス名またはシステム ID (SID)。 Oracle データベースに接続するための SID を次の形式で指定します。SID:<ORACLE_SID>
スキーマ	Oracle 接続に使用されるスキーマ。
コードページ	データベースサーバのコードページ。
暗号化方法	Secure Agent が、Secure Agent とデータベースサーバとの間で交換されるデータの暗号化に使用する方法。 Hosted Agent を使用する場合には適用されません。
暗号プロトコルバージョン	SSL 暗号化を有効化する際に使用する暗号プロトコル。 Hosted Agent を使用する場合には適用されません。
サーバー証明書の検証	データベースサーバによって送信される証明書を検証します。HostNameInCertificate パラメータを指定すると、Secure Agent では証明書内のホスト名も検証します。 Hosted Agent を使用する場合には適用されません。

接続プロパティ	説明
トラストストア	トラストストアファイルの場所と名前。 Hosted Agent を使用する場合には適用されません。
トラストストアのパスワード	トラストストアファイルの内容にアクセスするためのパスワード。 Hosted Agent を使用する場合には適用されません。
証明書内のホスト名	セキュアデータベースをホストするマシンのホスト名。 ホスト名を指定すると、Secure Agent では接続に含まれるホスト名を SSL 証明書内のホスト名と照らし合わせて検証します。 Hosted Agent を使用する場合には適用されません。
キーストア	キーストアの場所およびファイル名。 Hosted Agent を使用する場合には適用されません。
キーストアのパスワード	通信を安全に行うために必要なキーストアファイルのパスワード。 Hosted Agent を使用する場合には適用されません。
キーパスワード	通信を安全に行うために必要なキーストアファイルの個々のキーのパスワード。 Hosted Agent を使用する場合には適用されません。
メタデータの詳細接続プロパティ	JDBC ドライバがメタデータを取得するためのオプションのプロパティ。複数のプロパティを指定する場合は、各キーと値のペアをセミコロンで区切ります。例: ConnectionRetryCount=2;ConnectionRetryDelay=20
ランタイムの詳細接続プロパティ	ODBC ドライバがマッピングを実行するためのオプションのプロパティ。複数のプロパティを指定する場合は、各キーと値のペアをセミコロンで区切ります。 例: charset=sjis;readtimeout=180

Secure Agent 設定プロパティで、次の Oracle 固有のカスタムプロパティを設定できます。

カスタムプロパティ	説明
OdbcDataDirectNonWapi	<p>リレーショナルマルチバイトデータを使用するレプリケーションタスク、同期タスク、マッピング、およびマッピングタスクで、Unicode データを処理するためには、プロパティ OdbcDataDirectNonWapi を追加し、このプロパティを 0 に設定します。</p> <p>注: このプロパティを 0 に設定すると、シングルバイトデータの処理時間が増加する場合があります。次の値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - [タイプ] では、[DTM] を選択します。 - [サブタイプ] では、[INFO] を選択します。 - [名前] には、「OdbcDataDirectNonWapi」と入力します。 - [値] には、「0」と入力します。
oracle.use.varchar.for.number	<p>ソースが Oracle でターゲットが Salesforce のレプリケーションタスク、同期タスク、マッピング、およびマッピングタスクで、Oracle ソースに Number データ型のフィールドが多数含まれる場合、カスタムプロパティ oracle.use.varchar.for.number を設定します。Number データ型のフィールドの値は Salesforce では正しくロードされません。次の値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - [タイプ] では、[Tomcat] を選択します。 - [名前] には、「oracle.use.varchar.for.number」と入力します。 - [値] には、「true」と入力します。

Oracle CDC 接続のプロパティ

Oracle CDC 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Oracle CDC 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	<p>Oracle CDC 接続の名前。この名前は、組織内で一意にする必要があります。接続名には、英数字、スペース、および次の特殊文字を含めることができます。_ . + -</p> <p>名前の先頭または末尾のスペースはトリミングされ、名前の一部として保存されません。最大長は 100 文字です。接続名では大文字と小文字は区別されません。</p>
説明	<p>Oracle CDC 接続の説明。最大長は 255 文字です。</p>
タイプ	<p>接続タイプ。Oracle CDC の場合、タイプは Oracle CDC (Informatica) である必要があります。</p>
ランタイム環境	<p>マッピングタスクの実行に使用する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。</p>

プロパティ	説明
リスナの場所	<p>Oracle 変更データのための PWX CDC リーダー要求を処理する PowerExchange リスナがあり、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を実行するシステムのホスト名または IP アドレス。また、リスナポート番号が、デフォルトのポート番号である 2480 と異なる場合、この番号も入力します。</p> <p>ポートを含めるには、次の形式を使用します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。</p> <p><i>host_name:port_number</i></p> <p>以下に例を示します。</p> <p>ORACDC1A:1467</p>
ユーザー名	<p>PowerExchange リスナセキュリティが有効化されているときに、PowerExchange リスナにアクセスするために使用できるユーザー名。PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にした場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名です。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。</p>
パスワード	<p>[ユーザー名] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。</p>
コレクション名	<p>Oracle ソーステーブルが含まれ、PowerExchange DBMOVE コンフィギュレーションファイル内の ORACLEID 文に含まれる登録グループの [コレクション ID] フィールド内に指定される Oracle インスタンス名。この値は、接続の使用時に、PWX CDC メタデータアダプタがインポートする抽出マップメタデータをフィルタするために使用されます。</p>
CAPI 接続名	<p>PowerExchange DBMOVE コンフィギュレーションファイル内に定義される CAPX CAPI_CONNECTION 文の名前。この文には、PWX CDC リーダーが PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) ログファイルからの変更データを抽出するために使用するパラメータが含まれます。PWX CDC リーダーにこのプロパティ値が必要であり、DBMOVE コンフィギュレーションファイル内に定義される任意のデフォルトの CAPI_CONNECTION 文を無視します。</p>
ソーススキーマのオーバーライド	<p>テーブル名が同じでスキーマが異なるソーステーブルセットの単一のキャプチャ登録を作成し、オーバーライドするスキーマ名を PowerExchange ロgger グループ定義ファイル内で定義した場合、そのオーバーライドするスキーマ名を入力します。そうしないと、PowerExchange は、オーバーライドするスキーマを持つソーステーブルの変更データをログファイルから抽出できません。PowerExchange ロgger グループ定義の詳細については、『PowerExchange CDC ガイド (Linux、UNIX、Windows 版)』を参照してください。</p>
接続リトライ期限	<p>初期接続の試行の失敗後、PWX CDC リーダーが PowerExchange リスナへの再接続を試行する秒数。接続が再試行時間中に確立できない場合、マッピングタスクに失敗します。デフォルト値は 0 であり、接続の再試行は無効になります。</p>
圧縮	<p>変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを圧縮するかどうかを制御します。データを圧縮するには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティは選択されていません。</p>
暗号化	<p>変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを暗号化するかどうかを制御します。また、使用する暗号化の種類も指定します。次のいずれかのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - なし。暗号化は使用しません。 - AES 128 ビット。128 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 192 ビット。192 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 256 ビット。256 暗号化キーを使用します。 <p>デフォルトは [なし] です。</p>

プロパティ	説明
ペーシングサイズ	<p>後続データ用に次の PWX CDC リーダー要求を待機する一時停止までに、ソースシステムが PowerExchange リスナに渡す行数またはキロバイト単位でのデータ量。この値を減らすと、セッションのパフォーマンスが向上します。パフォーマンスを最大にするには、0 を使用します。</p> <p>デフォルトである最小値は 0 です。</p>
ペーシング単位	<p>[ペーシングサイズ] プロパティと一緒に使用する単位の種類。</p> <p>[行] または [キロバイト] のいずれかを選択します。</p>
マップの場所	<p>変更データをソースシステムからリモートの PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) に記録する場合、抽出マップが保存されたシステムのホスト名または IP アドレスを入力します。デフォルトのポート 2480 以外のポートを使用している場合は、ポート番号も含めます。</p> <p>ポートを含めるには、次の形式を使用します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。</p> <p><i>host_name:port_number</i></p> <p>以下に例を示します。</p> <p>ORACDC2B:25100</p> <p>接続をテストして抽出マップメタデータをインポートするための [マップの場所] の値は、[リスナの場所] の値よりも優先されます。</p>
マップの場所のユーザー	<p>[マップの場所] プロパティ内に指定された場所の PowerExchange リスナにアクセスできるユーザー名。</p>
マップの場所のパスワード	<p>[マップの場所のユーザー] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。</p>
イベントテーブル	<p>ユーザー定義イベントに基づく変更データ抽出を停止するためにイベントテーブルを作成した場合、イベントテーブルの PowerExchange 抽出マップの名前を入力します。イベントテーブルは、CDC ソースシステム上の Oracle テーブルである必要があります。</p>
Low-Value をスペースで置換	<p>文字データ内の NULL をスペースに置き換えるかどうかを制御します。文字データ内の NULL を置き換えるには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティが選択されています。</p>
カスタムプロパティ	<p>PowerExchange のデフォルト設定よりも優先するために指定できるカスタムプロパティ。セミコロン (;) を区切り文字として使用することで、複数のプロパティを入力できます。</p> <p>カスタムプロパティの設定は、Informatica グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ行ってください。</p> <p>注: これらのプロパティは、PowerCenter での Oracle CDC 接続の PowerExchange PWX 上書きオプションと同じです。</p>

Oracle CDC V2 接続のプロパティ

Oracle CDC 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Oracle CDC 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
接続名	Oracle CDC 接続の名前。この名前は、組織内で一意にする必要があります。接続名には、英数字、スペース、および次の特殊文字を含めることができます。_ . + - 名前の先頭または末尾のスペースはトリミングされ、名前の一部として保存されません。最大長は 100 文字です。接続名では大文字と小文字は区別されません。
説明	Oracle CDC 接続の説明。最大長は 255 文字です。
タイプ	接続タイプ。Oracle CDC の場合、タイプは Oracle CDC V2 である必要があります。
ランタイム環境	マッピングタスクの実行に使用する Secure Agent が含まれるランタイム環境の名前。
リスナの場所	Oracle 変更データのための PWX CDC リーダー要求を処理する PowerExchange リスナがあり、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を実行するシステムのホスト名または IP アドレス。リスナのポート番号も含まれます。次の形式で値を入力します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。 <i>host_name:port_number</i> 以下に例を示します。 ORACDC1A:1467
ユーザー名	PowerExchange リスナセキュリティが有効化されているときに、PowerExchange リスナにアクセスするために使用できるユーザー名。PowerExchange LDAP ユーザー認証を有効にした場合、ユーザー名はエンタープライズユーザー名です。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』の「SECURITY 文」を参照してください。
パスワード	[ユーザー名] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
コレクション名	Oracle ソーステーブルの登録が含まれ、PowerExchange DBMOVER コンフィギュレーションファイル内の ORACLEID 文に含まれる登録グループの [コレクション ID] フィールド内に指定される Oracle インスタンス名。この値は、接続の使用時に、PWX CDC メタデータアダプタがインポートする抽出マップメタデータをフィルタするために使用されます。
CAPI 接続名	PowerExchange DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される CAPX CAPI_CONNECTION 文の名前。この文には、PWX CDC リーダーが PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) ログファイルからの変更データを抽出するために使用するパラメータが含まれます。PWX CDC リーダーにこのプロパティ値が必要であり、DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に定義される任意のデフォルトの CAPI_CONNECTION 文を無視します。
ソーススキーマのオーバーライド	テーブル名が同じでスキーマが異なるソーステーブルセットの単一のキャプチャ登録を作成し、オーバーライドするスキーマ名を PowerExchange ロgger グループ定義ファイル内で定義した場合、そのオーバーライドするスキーマ名を入力します。そうしないと、PowerExchange は、オーバーライドするスキーマを持つソーステーブルの変更データをログファイルから抽出できません。PowerExchange ロgger グループ定義の詳細については、『PowerExchange CDC ガイド (Linux、UNIX、Windows 版)』を参照してください。

プロパティ	説明
接続リトライ期限	初期接続の試行の失敗後、PWX CDC リーダーが PowerExchange リスナへの再接続を試行する秒数。接続が再試行時間中に確立できない場合、マッピングタスクに失敗します。デフォルト値は 0 であり、接続の再試行は無効になります。
圧縮	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを圧縮するかどうかを制御します。データを圧縮するには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティは選択されていません。
暗号化	変更データをネットワーク経由で PWX CDC リーダーに送信する前に、PowerExchange リスナがデータを暗号化するかどうかを制御します。また、使用する暗号化の種類も指定します。次のいずれかのオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> - なし。暗号化は使用しません。 - AES 128 ビット。128 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 192 ビット。192 ビットの暗号化キーを使用します。 - AES 256 ビット。256 暗号化キーを使用します。 デフォルトは [なし] です。
パーシングサイズ	後続データ用に次の PWX CDC リーダー要求を待機する一時停止までに、ソースシステムが PowerExchange リスナに渡す行数またはキロバイト単位でのデータ量。この値を減らすと、セッションのパフォーマンスが向上します。パフォーマンスを最大にするには、0 を使用します。デフォルトである最小値は 0 です。
パーシング単位	[パーシングサイズ] プロパティと一緒に使用する単位の種類。 [行] または [キロバイト] のいずれかを選択します。
マップの場所	抽出マップが含まれるシステムのホスト名または IP アドレスを入力します。ポート番号も含めます。 この値は、PowerExchange リスナが、抽出マップからリモートにある PowerExchange ログガー (Linux、UNIX、Windows 用) マシン上で実行されている場合に必要です。リスナは、変更データ抽出要求を処理するために、抽出マップへのアクセスを必要とします。 次の形式で値を入力します。 <i>host_name</i> は、ホスト名または IP アドレスにできます。 <i>host_name:port_number</i> 以下に例を示します。 ORACDC2B:25100 接続をテストして抽出マップメタデータをインポートするための [マップの場所] の値は、[リスナの場所] の値よりも優先されます。
マップの場所のユーザー	[マップの場所] プロパティ内に指定された場所の PowerExchange リスナにアクセスできるユーザー名。
マップの場所のパスワード	[マップの場所のユーザー] プロパティで指定されるユーザー名と関連付けられたパスワード。
イベントテーブル	ユーザー定義イベントに基づく変更データ抽出を停止するためにイベントテーブルを作成した場合、イベントテーブルの PowerExchange 抽出マップの名前を入力します。イベントテーブルは、CDC ソースシステム上の Oracle テーブルである必要があります。

プロパティ	説明
Low-Value をスペース で置換	文字データ内の NULL をスペースに置き換えるかどうかを制御します。文字データ内の NULL を置き換えるには、このプロパティを選択します。デフォルトでは、このプロパティが選択されています。
カスタムプロパティ	<p>PowerExchange のデフォルト設定よりも優先するために指定できるカスタムプロパティ。セミコロン (;) を区切り文字として使用することで、複数のプロパティを入力できます。通常は、グローバルカスタマサポートの指示の下でのみ、カスタムプロパティを設定します。</p> <p>注: これらのプロパティは、PowerCenter での PWXPC Oracle CDC アプリケーション接続の PWX オーバーライドオプションと同じです。</p> <p>さらに、PowerExchange クライアントとリモートの PowerExchange リスナとの間で保護された接続を確立するために、次のプロパティを指定できます。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,{Y N})</p> <p>SSL パラメータと{Y N}パラメータを、接続を介したクライアント通信のための設定に追加します。このプロパティは、次の方法のいずれかで入力します。</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,Y)</p> <p>CONNECTION_SECURITY=(SSL,N)</p> <p>オプション:</p> <ul style="list-style-type: none"> - SSL。クライアント通信に対して SSL 認証を有効にします。 - {Y N}。SSL 認証が有効なときに、クライアント SSL 証明書の検証が発生するかどうかを制御します。「N」を入力すると、クライアント証明書の検証が無効になり、サブジェクト証明書とプライベートキーがロードされるのが防止されます。デフォルトは Y です。 <p>注: DBMOVER コンフィギュレーションファイル内に証明書がすでに指定されている場合、保護された接続を無効にするために、このパラメータを使用することはできません。コンフィギュレーションファイル内に証明書が指定されていない場合、保護された接続を追加できます。</p>

Oracle CRM Cloud V1 接続のプロパティ

次の表に、Oracle CRM Cloud V1 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
エンドポイント URL	CRM アプリケーションサーバーの URL。
認証タイプ	<p>Oracle CRM Cloud アプリケーションへの接続に必要なユーザー認証のタイプ。次の認証タイプを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 基本認証 - JWT 認証
ユーザー名	Oracle CRM Cloud アカウントのユーザー名。
パスワード	Oracle CRM Cloud アカウントのパスワード。

接続プロパティ	説明
JWT ID	JWT 認証タイプの ID。 認証タイプに【JWT 認証】を選択した場合、JWT ID を入力する必要があります。
REST API バージョン	CRM REST API のバージョン番号。

Oracle CRM On Demand 接続のプロパティ

Oracle CRM On Demand 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Oracle CRM On Demand 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ユーザー名	Oracle CRM On Demand ユーザー名。次の形式を使用します。 <domain>/<user_name> 以下に例を示します。domain/jsmith@companyname.com
パスワード	Oracle CRM On Demand のパスワード。
サービス URL	Oracle CRM On Demand サービスの URL。例: https://secure-company.crmondemand.com

Oracle E-Business Suite 接続のプロパティ

Oracle E-Business Suite 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Oracle E-Business Suite 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	Oracle E-Business Suite アカウントのユーザー名。
パスワード	Oracle E-Business Suite アカウントのパスワード。
サービス設定名	ファイル拡張子付きの構成ファイルの名前。 例: EBSWSDLConfig.ini 構成ファイルの先頭の行には、ユーザー認証のための URL が含まれている必要があります。例: http://HostName:Port Number/webservices/SOAPProvider/plsql/fnd_user_pkg/?wsdl 注: 構成ファイルは、Oracle E-Business Suite の新しい接続を作成する前に、次の場所に設定する必要があります: <Secure Agent のインストールディレクトリ>\apps \Data_Integration_Server\ext\deploy_to_main\bin\rdtm-extra\reserved\userfiles\EBSMidStream

。

Oracle E-Business Suite インタフェース接続のプロパティ

Oracle E-Business Suite インタフェース接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。
次の表に、Oracle E-Business Suite インタフェース接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
Oracle ホスト名	必要な Oracle ホスト名。
Oracle ポート番号	ポート番号。
Oracle サービス名	Oracle サービスの名前。
ユーザー名	Oracle E-Business Suite インタフェースアカウントのユーザー名。
パスワード	Oracle E-Business Suite インタフェースアカウントのパスワード。
アプリケーションユーザー名	Oracle E-Business Suite インタフェースアカウントのアプリケーションユーザー名。

プロパティ	説明
サービス構成ファイル名	<p>ファイル拡張子付きの構成ファイルの名前。 例: EBSInterfaceTablesConfig.ini</p> <p>Oracle E-Business Suite への接続プロパティを設定し、インタフェーステーブル名を追加するために構成ファイルが必要になります。 注: インタフェーステーブル名は、書き込み操作でのみ使用されます。</p> <p>構成ファイルは、次のディレクトリに配置する必要があります: <Secure Agent のインストールディレクトリ>\apps\Data_Integration_Server\ext\deploy_to_main\bin\rdtm-extra\reserved\userfiles\oracLEBS\。</p> <p>構成ファイルは、次の形式にする必要があります: <スキーマ>, <同時プログラム名>, FALSE_TABLELIST_<顧客インタフェーステーブル 1>, <顧客インタフェーステーブル 2>...<顧客インタフェーステーブル n>。</p> <p>例: AR,RACUST,CustomerInterface,FALSE_TABLELIST_RA_CUSTOMERS_INTERFACE_ALL,RA_CUSTOMER_PROFILES_INT_ALL</p>
パラメータ構成ファイル名	<p>ファイル拡張子付きの構成ファイルの名前。 例: EBSConcurrentProgramConfig.ini</p> <p>同時プログラムを呼び出すパラメータを渡すために、構成ファイルが必要になります。 注: この構成ファイルは、書き込み操作でのみ使用されます。</p> <p>構成ファイルは、次のディレクトリに配置する必要があります: <Secure Agent のインストールディレクトリ>\apps\Data_Integration_Server\ext\deploy_to_main\bin\rdtm-extra\reserved\userfiles\oracLEBS\。</p> <p>構成ファイルは、次の形式にする必要があります: <モジュール名>_PARAMLIST_Parameter List Start, <パラメータ 1>, <パラメータ 2>...., <パラメータ n>, Parameter List End。</p> <p>例: CustomerInterface_PARAMLIST_Parameter List Start, CREATE_RECIPROCAL_CUSTOMER :=N,ORG_ID :=204,Parameter List End</p>

。

Oracle Financials Cloud 接続のプロパティ

次の表に、Oracle Financials Cloud 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
認証	[Oracle Financials Cloud] を選択。

接続プロパティ	説明
ERP エンドポイント URL	Oracle Financials Cloud アプリケーションの ERP サーバーのエンドポイント URL。
認証タイプ	コネクタが Oracle Financials Cloud アプリケーションにログインする際に使用する必要がある、認証方法を選択。 基本認証タイプ を選択できます。
ユーザー名	Oracle Financials Cloud アカウントのユーザー名。
パスワード	Oracle Financials Cloud アカウントのパスワード。
I/O ディレクトリ	Secure Agent がインストールされたマシン上で、スキーマファイルやデータが保存されるディレクトリパス。 Oracle Financials Cloud 接続の作成後に、 [テスト] ボタンをクリックする必要があります。 Secure Agent は、I/O ディレクトリの下に次のディレクトリを作成します。 - Reader: Reader ディレクトリには、Output サブディレクトリがあります。Oracle Financials Cloud アプリケーションからダウンロードした CSV ファイルは、zip ファイル形式でダウンロードされて I/O Directory\Reader\Output ディレクトリに保存されます。 注: CSV ファイルをダウンロードするディレクトリパスは、Outbound_Output_Directory の詳細プロパティフィールドでオーバーライドできません。 - Writer: Writer ディレクトリには、Logs サブディレクトリと Schema サブディレクトリがあります。ダウンロードした XLSM ファイルと CTL ファイルは、すべて I/O Directory\Writer\Schema ディレクトリに配置する必要があります。 - Temp: Temp ディレクトリには、ロード前のステージングファイルを格納する WorkingDirectory サブディレクトリが含まれます。
暗号化モード	暗号化方法に基づいてデータを暗号化または復号化するために使用する。次のいずれかのオプションを選択します。 なし データは暗号化されません。 PGPUNSIGNED PGP 暗号化方法を使用してデータを暗号化する場合に、このオプションを選択します。 Oracle Financials Cloud アプリケーションで設定したのと同じ暗号化キーを使用する必要があります。 PGPSIGNED PGP 暗号化方法を使用してデータを暗号化して署名する場合に、このオプションを選択します。 注: このプロパティは、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行する場合に使用します。
パスフレーズ	プライベートキーを暗号化するために使用するパスフレーズ。 注: このプロパティは、PGPSigned の暗号化方法を使用して、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行する場合に使用します。

接続プロパティ	説明
PrivateKey パス	Secure Agent がインストールされたマシン上で、プライベートキーが保存されるファイルパス。 Oracle Financials Cloud アプリケーションでアップロードしたパブリックキーに対応するプライベートキーを指定する必要があります。 注: このプロパティは、PGPSigned の暗号化方法を使用して、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行する場合に使用します。
ERP パブリックキーパス	Secure Agent がインストールされたマシン上で、Fusion パブリックキーが保存されるファイルパス。 Fusion パブリックキーを取得するには、Oracle Financials Cloud にサービス要求を提示する必要があります。 注: このプロパティは、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行する場合に使用します。 Fusion パブリックキーの詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。
ERP プライベートキーエイリアス名	プライベート/パブリックキーペアを使用して Oracle Financials アプリケーションで生成した Fusion キーエイリアス名。 注: このプロパティは、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行する場合に使用します。
顧客パブリックキーエイリアス名	パブリックキーと一緒に Oracle Financials アプリケーションでアップロードした顧客パブリックキーエイリアス名。 注: このプロパティは、PGPSigned の暗号化方法を使用して、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行する場合に使用します。

Oracle Financials Cloud V1 接続のプロパティ

次の表に、Oracle Financials Cloud V1 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ERP エンドポイント URL	Financials アプリケーションサーバーのエンドポイント URL。
認証タイプ	Oracle Financials Cloud アプリケーションに接続するためのユーザー認証のタイプ。 基本認証タイプ を選択できます。
ユーザー名	Oracle Financials Cloud アカウントのユーザー名。
パスワード	Oracle Financials Cloud アカウントのパスワード。

接続プロパティ	説明
IO ディレクトリ	<p>スキーマファイルとデータが保存されているディレクトリパス。スキーマファイルは、Secure Agent がインストールされているマシンに保存する必要があります。</p> <p>Oracle Financials Cloud V1 接続の作成後に、[テスト] ボタンをクリックする必要があります。</p> <p>Secure Agent は、IO ディレクトリの下に次のディレクトリを作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - Reader: Reader ディレクトリには、Output サブディレクトリがあります。Oracle Financials Cloud アプリケーションからダウンロードした.csv ファイルは、zip ファイル形式でダウンロードされて IO Directory\Reader\Output ディレクトリに保存されます。 <p>注: CSV ファイルをダウンロードするディレクトリパスは、Outbound_Output_Directory の詳細プロパティフィールドでオーバーライドできません。</p> <ul style="list-style-type: none"> - Writer: Writer ディレクトリには、Logs サブディレクトリと Schema サブディレクトリがあります。ダウンロードした XLSM ファイルと CTL ファイルは、すべて IO Directory\Writer\Schema ディレクトリに配置する必要があります。 - Temp: Temp ディレクトリには、ロード前のステージングファイルを格納する WorkingDirectory サブディレクトリが含まれます。
暗号化モード	<p>データの暗号化または復号化に使用する暗号化タイプ。次のいずれかのオプションを選択します。</p> <p>なし</p> <p>データは暗号化されません。</p> <p>PGPUNSIGNED</p> <p>PGP 暗号化方法を使用してデータを暗号化する場合に、このオプションを選択します。</p> <p>Oracle Financials Cloud アプリケーションで設定したものと同一暗号化キーを使用する必要があります。</p> <p>PGPSIGNED</p> <p>PGP 暗号化方法を使用してデータを暗号化して署名する場合に、このオプションを選択します。</p> <p>注: PGPUNSIGNED オプションと PGPSIGNED オプションは、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行するときに使用します。</p>
パスフレーズ	<p>プライベートキーを暗号化するために使用したパスフレーズ。</p> <p>注: このプロパティは、PGPSigned の暗号化方法を使用して、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行する場合に使用します。</p>
PrivateKey パス	<p>プライベートキーのファイルパス。プライベートキーは、Secure Agent がインストールされているマシンに保存する必要があります。</p> <p>Oracle Financials Cloud アプリケーションでアップロードしたパブリックキーに対応するプライベートキーを指定する必要があります。</p> <p>注: このプロパティは、PGPSigned の暗号化方法を使用して、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行する場合に使用します。</p>
ERP パブリックキーパス	<p>Fusion パブリックキーのファイルパス。Fusion パブリックキーは、Secure Agent がインストールされているマシンに保存する必要があります。</p> <p>Fusion パブリックキーを取得するには、Oracle Financials Cloud にサービス要求を提示する必要があります。</p> <p>注: このプロパティは、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行する場合に使用します。</p> <p>Fusion パブリックキーの詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。</p>

接続プロパティ	説明
ERP プライベートキーエイリアス名	プライベート/パブリックキーペアを生成するときに Oracle Financials アプリケーションで指定した Fusion キーエイリアス名。 注: このプロパティは、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行する場合に使用します。
顧客パブリックキーエイリアス名	パブリックキーをアップロードしたときに Oracle Financials アプリケーションで指定した顧客パブリックキーエイリアス名。 注: このプロパティは、PGPSigned の暗号化方法を使用して、ターゲットにデータを書き込むためのマッピングを実行する場合に使用します。

Oracle HCM Cloud V1 接続のプロパティ

Oracle HCM Cloud V1 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Oracle HCM Cloud V1 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
WebCenter コンテンツ URL	Oracle HCM Cloud が出力 XML データをアップロードする WebCenter Content Server の URL。
HCM URL	Secure Agent が WebServer Content Server から HCM Application Server に XML データをロードした後に新しく作成されたデータを格納する、HCM Application Server の URL。 次の URL は、サンプルの HCM URL です: https://adc-xxx-hcm.oracledemo.com/ 。 注: Oracle HCM Cloud アプリケーションにデータを書き込むために Oracle HCM Cloud V1 接続を作成するときに適用されます。
認証タイプ	Oracle HCM Cloud アプリケーションに接続するためのユーザー認証のタイプ。 基本認証タイプ を選択できます。
ユーザー名	Oracle HCM Cloud アカウントのユーザー名。
パスワード	Oracle HCM Cloud アカウントのパスワード。

接続プロパティ	説明
スキーマディレクトリ	<p>Secure Agent がインストールされたマシン上で、HCM 抽出定義の XSD、XLS、および FlexFieldReport.xls のファイルが保存されるディレクトリパス。</p> <p>Oracle HCM Cloud V1 接続の作成後に、[テスト] ボタンをクリックする必要があります。Secure Agent は、スキーマディレクトリの下に次のディレクトリを作成します。</p> <p>Reader</p> <p>Reader ディレクトリには XSD ファイルが格納されます。生成した XSD ファイルは、すべて Reader ディレクトリに配置する必要があります。</p> <p>Writer</p> <p>Writer ディレクトリには XLS ファイルが格納されます。ダウンロードした XLS ファイルと FlexFieldReport.xls ファイルは、すべて Writer ディレクトリに配置する必要があります。</p> <p>Temp</p> <p>Temp ディレクトリには、ロード前のステージングファイルが格納されます。</p>
暗号化モード	<p>データの暗号化または復号化に使用する暗号化タイプ。次のいずれかのオプションを選択します。</p> <p>なし</p> <p>データは暗号化されません。</p> <p>PGPUNSIGNED</p> <p>PGPUnsigned 暗号化方法を使用してデータを暗号化または復号化する場合に、このオプションを選択します。</p> <p>PGPSIGNED</p> <p>PGPSigned 暗号化方法を使用してデータを暗号化または復号化する場合に、このオプションを選択します。</p> <p>注: Oracle HCM Cloud V1 ソースからデータを読み取る際に、Oracle HCM Cloud アプリケーションで使ったのと同じ [暗号化モード] オプションを指定する必要があります。</p>
PrivateKey パスフレーズ	<p>プライベートキーを暗号化するために使用したパスフレーズ。</p> <p>プライベートキーパスフレーズの詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。</p>
PrivateKey パス	<p>プライベートキーのファイルパスを入力します。プライベートキーは、Secure Agent がインストールされているマシンに保存する必要があります。</p> <p>注: Oracle HCM Cloud アプリケーションでアップロードしたパブリックキーに対応するプライベートキーを指定する必要があります。</p>

接続プロパティ	説明
Fusion PublicKey パス	Fusion パブリックキーのファイルパス。Fusion パブリックキーは、Secure Agent がインストールされているマシンに保存する必要があります。 注: Fusion パブリックキーを取得するには、Oracle HCM Cloud にサービス要求を提示する必要があります。 Fusion パブリックキーの詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。
抽出の送信	要求メッセージに指定したパラメータ値を使用した、HCM 抽出定義の送信。デフォルトでは無効になっています。 【抽出の送信】 オプションを使用すると、Secure Agent は、指定した HCM 抽出定義のインスタンスを送信し、この HCM 抽出定義に対応する最新の出力データファイルを、WebCenter Content Server からダウンロードします。 HCM 抽出定義は、Oracle HCM Cloud アプリケーションディレクトリから送信することもできます。 注: このプロパティは、Oracle HCM Cloud アプリケーションからデータを読み取る場合に適用します。

Oracle HCM Cloud 接続のプロパティ

Oracle HCM Cloud 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Oracle HCM Cloud 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
認証	【Oracle HCM Cloud】を選択。
WebCenter コンテンツ URL	Oracle HCM Cloud が出力 XML データをアップロードする WebCenter Content Server の URL。
HCM URL	Secure Agent が WebServer Content Server から HCM Application Server に XML データをロードした後に新しく作成されたデータを格納する、HCM Application Server の URL。 次の URL は、サンプルの HCM URL です: https://adc-xxx-hcm.oracledemo.com/ 。 注: Oracle HCM Cloud アプリケーションにデータを書き込むために Oracle HCM Cloud 接続を作成するときに適用されます。
認証タイプ	コネクタが Oracle HCM Cloud アプリケーションにログインする際に使用する必要がある、認証方法を選択します。 基本認証タイプ を選択できます。
ユーザー名	Oracle HCM Cloud アカウントのユーザー名。
パスワード	Oracle HCM Cloud アカウントのパスワード。

接続プロパティ	説明
スキーマディレクトリ	<p>Secure Agent がインストールされたマシン上で、HCM 抽出定義の XSD、XLS、および FlexFieldReport.xls のファイルが保存されるディレクトリパス。</p> <p>Oracle HCM Cloud 接続の作成後に、[テスト] ボタンをクリックする必要があります。Secure Agent は、スキーマディレクトリの下に次のディレクトリを作成します。</p> <p>Reader</p> <p>Reader ディレクトリには XSD ファイルが格納されます。生成した XSD ファイルは、すべて Reader ディレクトリに配置する必要があります。</p> <p>Writer</p> <p>Writer ディレクトリには XLS ファイルが格納されます。ダウンロードした XLS ファイルと FlexFieldReport.xls ファイルは、すべて Writer ディレクトリに配置する必要があります。</p> <p>Temp</p> <p>Temp ディレクトリには、ロード前のステージングファイルが格納されます。</p>
暗号化モード	<p>暗号化方法に基づいてデータを暗号化または復号化するために使用する方法。次のいずれかのオプションを選択します。</p> <p>なし</p> <p>データは暗号化されません。</p> <p>PGPUNSIGNED</p> <p>PGPUnsigned 暗号化方法を使用してデータを暗号化または復号化する場合に、このオプションを選択します。</p> <p>PGPSIGNED</p> <p>PGPSigned 暗号化方法を使用してデータを暗号化または復号化する場合に、このオプションを選択します。</p> <p>注: Oracle HCM Cloud ソースからデータを読み取る際に、Oracle HCM Cloud アプリケーションで使用したのと同じ [暗号化モード] オプションを指定する必要があります。</p>
PrivateKey パスフレーズ	<p>プライベートキーを暗号化するために使用するパスフレーズ。</p> <p>プライベートキーパスフレーズの詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。</p>
PrivateKey パス	<p>Secure Agent がインストールされたマシン上で、プライベートキーが保存されるファイルパス。</p> <p>注: Oracle HCM Cloud アプリケーションでアップロードしたパブリックキーに対応するプライベートキーを指定する必要があります。</p>

接続プロパティ	説明
Fusion PublicKey パス	Secure Agent がインストールされたマシン上で、Fusion パブリックキーが保存されるファイルパス。 注: Fusion パブリックキーを取得するには、Oracle HCM Cloud にサービス要求を提示する必要があります。 Fusion パブリックキーの詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。
抽出の送信	要求メッセージに指定したパラメータ値を使用した、HCM 抽出定義の送信。デフォルトでは無効になっています。 【抽出の送信】 オプションを使用すると、Secure Agent は、指定した HCM 抽出定義のインスタンスを送信し、この HCM 抽出定義に対応する最新の出力データファイルを、WebCenter Content Server からダウンロードします。 HCM 抽出定義は、Oracle HCM Cloud アプリケーションディレクトリから送信することもできます。 注: このプロパティは、Oracle HCM Cloud アプリケーションからデータを読み取る場合に適用します。

Oracle HCM Cloud V1 接続のプロパティ

Oracle HCM Cloud V1 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Oracle HCM Cloud V1 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
WebCenter コンテンツ URL	Oracle HCM Cloud が出力 XML データをアップロードする WebCenter Content Server の URL。
HCM URL	Secure Agent が WebServer Content Server から HCM Application Server に XML データをロードした後に新しく作成されたデータを格納する、HCM Application Server の URL。 次の URL は、サンプルの HCM URL です: https://adc-xxx-hcm.oracledemo.com/ 。 注: Oracle HCM Cloud アプリケーションにデータを書き込むために Oracle HCM Cloud V1 接続を作成するときに適用されます。
認証タイプ	Oracle HCM Cloud アプリケーションに接続するためのユーザー認証のタイプ。 基本認証タイプ を選択できます。
ユーザー名	Oracle HCM Cloud アカウントのユーザー名。
パスワード	Oracle HCM Cloud アカウントのパスワード。

接続プロパティ	説明
スキーマディレクトリ	<p>Secure Agent がインストールされたマシン上で、HCM 抽出定義の XSD、XLS、および FlexFieldReport.xls のファイルが保存されるディレクトリパス。</p> <p>Oracle HCM Cloud V1 接続の作成後に、[テスト] ボタンをクリックする必要があります。Secure Agent は、スキーマディレクトリの下に次のディレクトリを作成します。</p> <p>Reader</p> <p>Reader ディレクトリには XSD ファイルが格納されます。生成した XSD ファイルは、すべて Reader ディレクトリに配置する必要があります。</p> <p>Writer</p> <p>Writer ディレクトリには XLS ファイルが格納されます。ダウンロードした XLS ファイルと FlexFieldReport.xls ファイルは、すべて Writer ディレクトリに配置する必要があります。</p> <p>Temp</p> <p>Temp ディレクトリには、ロード前のステージングファイルが格納されます。</p>
暗号化モード	<p>データの暗号化または復号化に使用する暗号化タイプ。次のいずれかのオプションを選択します。</p> <p>なし</p> <p>データは暗号化されません。</p> <p>PGPUNSIGNED</p> <p>PGPUnsigned 暗号化方法を使用してデータを暗号化または復号化する場合に、このオプションを選択します。</p> <p>PGPSIGNED</p> <p>PGPSigned 暗号化方法を使用してデータを暗号化または復号化する場合に、このオプションを選択します。</p> <p>注: Oracle HCM Cloud V1 ソースからデータを読み取る際に、Oracle HCM Cloud アプリケーションで使ったのと同じ [暗号化モード] オプションを指定する必要があります。</p>
PrivateKey パスフレーズ	<p>プライベートキーを暗号化するために使用したパスフレーズ。</p> <p>プライベートキーパスフレーズの詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。</p>
PrivateKey パス	<p>プライベートキーのファイルパスを入力します。プライベートキーは、Secure Agent がインストールされているマシンに保存する必要があります。</p> <p>注: Oracle HCM Cloud アプリケーションでアップロードしたパブリックキーに対応するプライベートキーを指定する必要があります。</p>

接続プロパティ	説明
Fusion PublicKey パス	Fusion パブリックキーのファイルパス。Fusion パブリックキーは、Secure Agent がインストールされているマシンに保存する必要があります。 注: Fusion パブリックキーを取得するには、Oracle HCM Cloud にサービス要求を提示する必要があります。 Fusion パブリックキーの詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。
抽出の送信	要求メッセージに指定したパラメータ値を使用した、HCM 抽出定義の送信。デフォルトでは無効になっています。 【抽出の送信】 オプションを使用すると、Secure Agent は、指定した HCM 抽出定義のインスタンスを送信し、この HCM 抽出定義に対応する最新の出力データファイルを、WebCenter Content Server からダウンロードします。 HCM 抽出定義は、Oracle HCM Cloud アプリケーションディレクトリから送信することもできます。 注: このプロパティは、Oracle HCM Cloud アプリケーションからデータを読み取る場合に適用します。

OrangeHRM 接続のプロパティ

OrangeHRM 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、OrangeHRM 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。選択した環境のホストには、インストールされて実行中の OrangeHRM Web Service (HTTP) へのネットワークアクセスがあることに加えて、OrangeHRM データに必要な MySQL データベースバックアップストアへのアクセスも必要です。
OrangeHRMApiHostName	OrangeHRM システムのホスト名。 例: http://localhost/。
OrangeHRMApiUserName	OrangeHRM Web API へのアクセス権を持つ、OrangeHRM システム内に既存の有効なユーザー名。
OrangeHRMApiPassword	OrangeHRM のパスワード。
OrangeHRMMySQLSchemaName	OrangeHRM データに使用する MySQL データベーススキーマの名前。 例: orangehrm_mysql。

PostgreSQL 接続のプロパティ

PostgreSQL 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、PostgreSQL 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ホスト名	接続先の PostgreSQL サーバーのホスト名。
ポート	接続先の PostgreSQL サーバーのポート番号。 デフォルトは 5432 です。
データベース	PostgreSQL データベース名。
ユーザー名	PostgreSQL データベースにアクセスするためのユーザー名。
パスワード	PostgreSQL データベースユーザー名のパスワード。
暗号化方法	Secure Agent と PostgreSQL データベースサーバー間でやり取りされるデータを暗号化するかどうかの決定。 次のいずれかの暗号化方法を選択します。 <ul style="list-style-type: none">- noEncryption。SSL を使用せずに接続を確立します。データは暗号化されません。- SSL。SSL を使用して接続を確立します。データは SSL を使用して暗号化されます。PostgreSQL データベースサーバーが SSL をサポートしない場合、接続は失敗します。- requestSSL。SSL を使用して接続の確立を試みます。PostgreSQL データベースサーバーが SSL をサポートしない場合、Secure Agent が暗号化されていない接続を確立します。 デフォルトは noEncryption です。 注: Hosted Agent を使用する場合、SSL はサポートされません。
サーバー証明書の検証	暗号化方法の SSL または requestSSL を有効にしている場合に適用。 [サーバー証明書の検証] オプションを選択すると、PostgreSQL データベースサーバーによって送信されたサーバー証明書を Secure Agent が検証します。[証明書内のホスト名] パラメータを指定すると、Secure Agent では証明書内のホスト名も検証しません。
TrustStore	暗号化方法として SSL または requestSSL を選択し、[サーバー証明書の検証] オプションを選択した場合に適用。 トラストストアファイルのパスおよび名前で、PostgreSQL クライアントが信頼する認証局 (CA) のリストが含まれます。
TrustStore のパスワード	暗号化方法として SSL または requestSSL を選択し、[サーバー証明書の検証] オプションを選択した場合に適用。 SSL 証明書を含むトラストストアファイルにアクセスするためのパスワード。
証明書内のホスト名	暗号化方法として SSL または requestSSL を選択し、[サーバー証明書の検証] オプションを選択した場合にオプションで適用。 ホスト名を指定すると、Secure Agent は接続に含まれるホスト名を SSL 証明書内のホスト名と照らし合わせて検証し、追加のセキュリティが確保されます。

接続プロパティ	説明
キーストア	暗号化方法として SSL を選択し、PostgreSQL データベースサーバーでクライアント認証を有効にしている場合に適用。 キーストアのパスおよびファイル名。キーストアファイルには、PostgreSQL クライアントが、PostgreSQL サーバーの証明書要求に応答して送信する証明書が含まれます。
キーストアのパスワード	暗号化方法として SSL を選択し、PostgreSQL データベースサーバーでクライアント認証を有効にしている場合に適用。 通信を安全に行うために必要なキーストアファイルのパスワード。
キーパスワード	暗号化方法として SSL を選択し、PostgreSQL データベースサーバーでクライアント認証を有効にしている場合に適用。 キーストアファイルに含まれる個別のキーに、キーストアファイルとは別のパスワードが設定されている場合に必要になります。
追加接続プロパティ	使用する追加接続パラメータ。 接続パラメータは、キー値のペアをセミコロンで区切って指定する必要があります。
暗号プロトコルバージョン	暗号化方法の SSL または requestSSL を有効にしている場合に必要。 暗号化された接続を使用する場合は、暗号プロトコルまたは暗号プロトコルのリストを指定します。 以下のプロトコルから選択できます。 - SSLv3 - TLSv1 - TLSv1_1 - TLSv1_2

Power BI 接続のプロパティ

Power BI 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Power BI 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ストレージアカウント名	.csv ファイルをコンテナ内に保存する Microsoft Azure Blob Storage アカウントの名前。
ストレージアカウントキー	Microsoft Azure Blob Storage アカウントにアクセスするためのキー。
ストレージコンテナ名	.csv ファイルを保存するための、Microsoft Azure Blob Storage コンテナの名前。 注: エラーを避けるために、コンテナにサブフォルダが含まれないことを確認します。
Azure リソースグループ名	Microsoft Azure Blob Storage のアカウント名に関連付けられている Microsoft Azure Blob Storage リソースグループの名前。
Azure サブスクリプション ID	サブスクライブした Microsoft Azure Blob Storage アカウントの ID。

接続プロパティ	説明
Azure テナント ID	Microsoft Azure Blob Storage アカウントのテナント ID。
Power BI アクセストークン	Power BI Online で外部データフローを作成するための、Power BI 用の有効なアクセストークン。 有効な Power BI アクセストークンを生成するため、Informatica Power BI OAuth ツールを使用する必要があります。生成したアクセストークンは、60 分間有効です。Power BI コネクタは、更新トークンの期限が有効な間はアクセストークンを更新します。
Power BI 更新トークン	Power BI Online で外部データフローを作成するための、Power BI 用の有効な更新トークン。 有効な Power BI 更新トークンを生成するため、Informatica Power BI OAuth ツールを使用する必要があります。生成した更新トークンは、90 日間有効です。
Azure キー Vault 名	Microsoft Azure Blob Storage アカウントのキー vault 名。
Azure キーシークレット名	Microsoft Azure Blob Storage アカウントのキーシークレット名。

Qlik 接続のプロパティ

Qlik 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Qlik 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
テンプレートファイルのパス	Secure Agent による Qlik メタデータのインポート元のサンプル QVX ファイルへのディレクトリパス。

REST V2 接続のプロパティ

REST V2 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、REST V2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。 注: REST V2 コネクタは 30.0 以降の Secure Agent または Hosted Agent もサポートしません。
認証	RESTV2 を選択します。

接続プロパティ	説明
認証タイプ	コネクタが Web サーバーアプリケーションにログインする際に認証が必要な場合に使用される認証メソッドを選択します。デフォルトは [なし] です。
認証ユーザー ID	Web サービスアプリケーションにログインするユーザーの名前。 認証タイプが [基本] および [ダイジェスト] の場合にのみ必要です。
認証パスワード	ユーザー名に関連付けられるパスワード。 認証タイプが [基本] および [ダイジェスト] の場合にのみ必要です。
OAuth コンシューマキー	Web サービスアプリケーションに関連付けられるクライアントキー。 認証タイプが [OAuth] の場合にのみ必要です。
OAuth コンシューマシークレット	Web サービスアプリケーションに接続するためのクライアントパスワード。 認証タイプが [OAuth] の場合にのみ必要です。
OAuth トークン	Web サービスアプリケーションに接続するためのアクセストークン。 認証タイプが [OAuth] の場合にのみ必要です。
OAuth トークンシークレット	OAuth トークンに関連付けられるパスワード。 認証タイプが [OAuth] の場合にのみ必要です。
Swagger ファイルパス	Swagger 仕様ファイル名の絶対パスまたはホストされた URL。 Swagger 仕様ファイルの絶対パスを指定する場合、Swagger 仕様ファイルは Secure Agent をホストするマシン上にある必要があります。 注: Swagger 仕様ファイルは管理者から生成できます。管理者 > [Swagger ファイル] の順にクリックして、Swagger 仕様ファイルを生成します。
トラストストアファイル名	REST API との一方または双方向の安全な接続を確立するための TLS 証明書を含むトラストストアファイルの絶対パス。各 Secure Agent マシンのランタイム環境で使用可能なディレクトリパスを指定します。 トラストストアファイル名とパスワードを JVM オプションとして設定することもできますし、証明書を <Secure Agent のインストールディレクトリ>\jre\lib\security\cacerts にインポートすることもできます。
トラストストアのパスワード	SSL 証明書を含むトラストストアファイルのパスワード。 トラストストアのパスワードを JVM オプションとして設定することもできます。
キーストアファイル名	REST API との双方向の安全な接続を確立するために必要なキーと証明書を含むキーストアファイルの絶対パス。各 Secure Agent マシンのランタイム環境で使用可能なディレクトリパスを指定します。 キーストアファイル名と格納場所を JVM オプションとして設定することもできます。また、証明書を任意のディレクトリにインポートすることもできます。
キーストアのパスワード	通信を安全に行うために必要なキーストアファイルのパスワード。 トラストストアのパスワードを JVM オプションとして設定することもできます。
プロキシタイプ	プロキシのタイプ。以下のいずれかのオプションを選択することができます。 - プロキシなし: エージェントレベルまたは接続レベルで設定されたプロキシサーバーをバイパスします。 - プラットフォームプロキシ: エージェントレベルで設定されたプロキシが考慮されません。 - カスタムプロキシ: 接続レベルで設定されたプロキシが考慮されます。

接続プロパティ	説明
プロキシ設定	プロキシ設定形式: <host>:<port> 注: 認証付きプロキシサーバーはサポートされません。
詳細フィールド	Secure Agent が REST エンドポイントに接続するときに使用する引数を入力します。次の引数を指定できます。 ConnectionTimeout: REST エンドポイントからの応答を取得するための待機時間 (ミリ秒)。接続タイムアウトを過ぎると、接続は終了します。デフォルトはエンドポイント API で定義されているタイムアウトです。 注: REST V2 接続タイムアウトとエンドポイント API タイムアウトの両方が定義されている場合、接続は定義されている最短のタイムアウトで終了します。

注: 接続のテストでは、次の検証が行われます。

- ローカルの Swagger ファイルのパス。
- 基本認証とダイジェスト認証用のユーザー ID フィールドとパスワードフィールド。
- Swagger ファイルの形式は JSON です。
- Swagger ファイルに指定されている URL のアクセシビリティ

次の表は、さまざまなプロキシ設定ユースケースの結果を示しています。

システムプロキシ	REST V2 接続属性			結果
	プロキシなし	プラットフォームプロキシ	カスタムプロキシ	
×	○	×	いいえ	プロキシは考慮されない
×	×	○	×	プロキシは考慮されない
×	×	×	○	カスタムプロキシが考慮される
○	はい	×	いいえ	プロキシは考慮されない
○	×	○	×	プラットフォームプロキシが考慮される
○	×	×	○	カスタムプロキシが考慮される

Salesforce Analytics 接続のプロパティ

Salesforce Analytics 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Salesforce Analytics 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	Salesforce Analytics アカウントのユーザー名
パスワード	Salesforce Analytics アカウントのパスワード。
セキュリティトークン	信頼されていないネットワークから Salesforce Analytics にログインするときに使用するトークン。
サービス URL	アクセス先の Salesforce Analytics サービスの URL。例: <code>https://login.salesforce.com/services/Soap/u/42.0</code> テストまたは開発環境で、Salesforce Analytics Sandbox テスト環境にアクセスできます。
一時フォルダ名	Secure Agent が JSON ファイルと Data Archive ファイルを格納するディレクトリ。タスクが正常に実行された後、一時的な .gz ファイルは削除されます。
デフォルトの日付形式	JSON ファイルの日付列を読み取るための日付形式。

Salesforce 接続のプロパティ

Salesforce 接続の設定時に、標準接続タイプまたは OAuth 接続タイプを選択できます。

以下の表に、標準接続タイプの接続プロパティ一覧を示します。

接続プロパティ	説明
ユーザー名	Salesforce アカウントのユーザー名。
パスワード	Salesforce アカウントのパスワード。
セキュリティトークン	Salesforce アプリケーションから生成されたセキュリティトークンです。
サービス URL	Salesforce サービスの URL。最大長は 100 文字です。例: <code>https://login.salesforce.com/services/Soap/u/44.0</code>
Secure Agent に対して定義されたプロキシサーバー設定をバイパス	Secure Agent の Secure Agent Manager で定義されているプロキシサーバー設定をバイパスします。プロキシサーバー設定をバイパスするときは、Salesforce への直接接続を使用します。

以下の表に、OAuth 接続タイプのプロパティ一覧を示します。

接続プロパティ	説明
サービスエンドポイント	Salesforce サービスエンドポイントの URL です。最大長は 100 文字です。例: <code>https://login.salesforce.com/services/Soap/u/33.0</code>
OAuth アクセストークン	OAuth ユーティリティを使用して生成された OAuth トークンです。

注: OAuth アクセストークンが無効な場合、テスト接続で次の不適切なエラーメッセージが表示されます。

[LoginFault [ApiFault exceptionCode='INVALID_LOGIN' exceptionMessage='Invalid username, password, security token; or user locked out.']]

Secure Agent 設定プロパティで、次の Salesforce 固有のプロパティを設定できます。

プロパティ	タイプ	説明
SalesForceConnectionTimeout	DTM	Salesforce Web サービスで、タイムアウトするまでに待機を要求する秒数。

Salesforce Marketing Cloud 接続のプロパティ

Salesforce Marketing Cloud 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Salesforce Marketing Cloud 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Salesforce Marketing Cloud 接続の名前。
説明	接続の説明。説明は、765 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。SF Marketing Cloud のデータ統合を選択します。
環境変数	タスクを実行するランタイム環境の名前。
Salesforce Marketing Cloud の URL	Secure Agent が Salesforce Marketing Cloud WSDL に接続するために使用する URL。以下に例を示します。
ユーザー名	Salesforce Marketing Cloud のユーザー名。
パスワード	Salesforce Marketing Cloud ユーザー名のパスワード。
ClientID	有効なアクセストークンを生成するために必要な Salesforce Marketing Cloud のクライアント ID。
クライアントシークレット	有効なアクセストークンを生成するために必要な Salesforce Marketing Cloud のクライアントシークレット。
プロキシサーバーを使用	プロキシを経由して Salesforce Marketing Cloud に接続します。

接続プロパティ	説明
ロギングの有効化	ロギングを有効にすると、タスクのセッションログを参照できます。
UTC オフセット	Secure Agent は、UTC オフセットの接続プロパティを使用して、UTC オフセットタイムゾーンの Salesforce Marketing Cloud との間でデータの読み書きを行います。
バッチサイズ	Secure Agent がバッチでターゲットに書き込む行数。 データを挿入または更新し、コンタクトキーを指定するときに、指定したコンタクト ID に関連付けられているデータが、1 つのバッチで Salesforce Marketing Cloud に挿入または更新されます。 Salesforce Marketing Cloud にデータを更新/挿入する場合は、コンタクトキーを指定しないようにします。
複数の BU の有効化	Salesforce Marketing Cloud アカウントに複数のビジネスユニットがある場合は、このオプションを選択します。Salesforce Marketing Cloud 接続を使用して、すべてのビジネスユニットのデータにアクセスできます。

SAP BW BEx クエリ接続のプロパティ

SAP BEx クエリからデータを読み取るには、**[SAP BW BEx クエリ]** 接続タイプを選択し、接続プロパティを設定します。

以下の表に、SAP BW BEx クエリ接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	必須。SAP BEx クエリからのデータの読み取りに使用する Secure Agent が含まれるランタイム環境。
認証	必須。接続の認証方法。 [SAP] を選択します。
ユーザー名	必須。適切なユーザー権限が付与された SAP ユーザー名。
パスワード	必須。SAP パスワード。
接続タイプ	必須。作成する接続のタイプ。 SAP BEx クエリからデータを読み取るには、 [アプリケーション] 接続タイプを選択する必要があります。特定の SAP BW サーバーに接続する場合、アプリケーション接続タイプを使用します。 デフォルトは [アプリケーション] です。
ホスト名	必須。接続先の SAP BW サーバーのホスト名または IP アドレス。
システム番号	必須。SAP システム番号。

接続プロパティ	説明
クライアント	必須。SAP クライアント番号。
言語	SAP システムで使用される言語に対応する言語コード。

注: 他の接続プロパティは、SAP BW BEx クエリコネクタには該当しないため、無視することができます。

SAP BW Reader 接続のプロパティ

SAP BW オブジェクトからデータを読み取るには、[SAP BW コネクタ] 接続タイプを選択し、接続プロパティを設定します。

次の表に、SAP BW 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	必須。SAP BW オブジェクトからのデータの読み取りに使用する Secure Agent が含まれるランタイム環境。
ユーザー名	必須。適切なユーザー権限が付与された SAP ユーザー名。
パスワード	必須。SAP パスワード。
接続タイプ	必須。作成する接続のタイプ。 次のいずれかの値を選択します。 - アプリケーション。特定の SAP BW サーバーに接続する際にアプリケーション接続を作成します。 - 負荷分散。SAP 負荷分散を使用する場合は、負荷分散接続を作成します。 デフォルトは [アプリケーション] です。
ホスト名	SAP アプリケーション接続を作成する場合は必須。 接続先の SAP BW サーバーのホスト名または IP アドレス。
システム番号	SAP アプリケーション接続を作成する場合は必須。 SAP システム番号。
メッセージホスト名	SAP 負荷分散接続を作成する場合は必須。 SAP メッセージサーバーのホスト名。
R3 名/SysID	SAP 負荷分散接続を作成する場合は必須。 SAP システム名。
グループ	SAP 負荷分散接続を作成する場合は必須。 SAP アプリケーションサーバーのグループ名。
クライアント	必須。SAP クライアント番号。
言語	SAP システムで使用される言語に対応する言語コード。

接続プロパティ	説明
トレース	<p>このオプションは、SAP システムによる JCo 呼び出しを追跡する場合に使用します。次のいずれかの値を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 0. オフ - 1. フル <p>デフォルトは 0 です。</p> <p>SAP では、JCo 呼び出しについての情報をトレースファイルに保存しています。以下のディレクトリからトレースファイルにアクセスできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - 設計時情報: <Informatica Secure Agent インストールディレクトリ>\main\tomcat - 実行時情報: <Informatica Secure Agent インストールディレクトリ>\main\bin\rdtm
追加パラメータ	<p>使用する追加 JCo 接続パラメータ。</p> <p>次の形式を使用します。</p> <p><parameter name1>=<value1>, <parameter name2>=<value2></p>
ポート範囲	<p>Secure Agent が、SAP BW サーバーからストリーミングモードでデータを読み取る際に使用する必要がある HTTP ポート範囲。</p> <p>最小ポート番号と最大ポート番号をハイフンでつないで入力します。最小ポート番号と最大ポート番号は、10000 - 65535 の範囲内で指定します。</p> <p>デフォルトは 10000 - 65535 です。</p>
HTTPS の使用	<p>このオプションは、https ストリーミングを有効にする場合に選択します。</p>
キースタアの場所	<p>JKS キースタアファイルへの絶対パス。</p>
キースタアのパスワード	<p>.JKS ファイルのパスワード。</p>
プライベートキーのパスワード	<p>.P12 ファイルに指定されたパスワードをエクスポートします。</p>

SAP IDoc Reader 接続のプロパティ

IDoc インタフェース経由で SAP データを読み取るには、**[iDoc Reader]** 接続タイプを選択し、接続プロパティを設定します。

次の表に、SAP IDoc Reader の接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続先エントリ	SAP ゲートウェイで登録した RFC サーバプログラム用に sapnwrfc.ini ファイルで指定した DEST エントリ。IDoc を受信するには、この宛先エントリのプログラム ID が、SAP で定義した論理システムのプログラム ID と同じである必要があります。
コードページ	SAP ソースと互換性のあるコードページ。次のいずれかのコードページを選択します。 <ul style="list-style-type: none">- MS Windows Latin 1。ISO 8859-1 Western European データの場合に選択します。- UTF-8。Unicode および Unicode 以外のデータの場合に選択します。- Shift-JIS。ダブルバイト文字データの場合に選択します。- ISO 8859-15 Latin 9 (Western European)。- ISO 8859-2 Eastern European。- ISO 8859-3 Southeast European。- ISO 8859-5 Cyrillic。- ISO 8859-9 Latin 5 (Turkish)。- IBM EBCDIC International Latin-1。

SAP IDoc Writer 接続のプロパティ

IDoc インタフェース経由で SAP データを書き込むには、**[iDoc Writer]** 接続タイプを選択し、接続プロパティを設定します。

次の表に、SAP IDoc Writer の接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ユーザー名	S_DATASET、S_TABU_DIS、S_PROGRAM、B_BTCH_JOB の各オブジェクトに対する権限を付与された SAP ユーザ名。
パスワード	SAP パスワード。
接続文字列	SAP アプリケーションサーバ用に sapnwrfc.ini ファイルで指定した DEST エントリ。
コードページ	SAP ターゲットと互換性のあるコードページ。次のいずれかのコードページを選択します。 <ul style="list-style-type: none">- MS Windows Latin 1。ISO 8859-1 Western European データの場合に選択します。- UTF-8。Unicode および Unicode 以外のデータの場合に選択します。- Shift-JIS。ダブルバイト文字データの場合に選択します。- ISO 8859-15 Latin 9 (Western European)。- ISO 8859-2 Eastern European。- ISO 8859-3 Southeast European。- ISO 8859-5 Cyrillic。- ISO 8859-9 Latin 5 (Turkish)。- IBM EBCDIC International Latin-1。

接続プロパティ	説明
言語コード	SAP 言語に対応する言語コード。
クライアントコード	SAP クライアント番号。

SAP RFC/BAPI インタフェース接続のプロパティ

RFC/BAPI インタフェース経由で SAP データにアクセスするには、[SAP RFC/BAPI インタフェース] 接続タイプを選択し、接続プロパティを設定します。

次の表に、SAP RFC/BAPI インタフェース接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ユーザー名	S_DATASET、S_TABU_DIS、S_PROGRAM、B_BTCH_JOB の各オブジェクトに対する権限を付与された SAP ユーザ名。
パスワード	SAP パスワード。
接続文字列	SAP アプリケーションサーバー用に sapnrwc.ini ファイルで指定した DEST エントリ。
コードページ	SAP ターゲットと互換性のあるコードページ。次のいずれかのコードページを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> - MS Windows Latin 1。ISO 8859-1 Western European データの場合に選択します。 - UTF-8。Unicode および Unicode 以外のデータの場合に選択します。 - Shift-JIS。ダブルバイト文字データの場合に選択します。 - ISO 8859-15 Latin 9 (Western European)。 - ISO 8859-2 Eastern European。 - ISO 8859-3 Southeast European。 - ISO 8859-5 Cyrillic。 - ISO 8859-9 Latin 5 (Turkish)。 - IBM EBCDIC International Latin-1。
言語コード	SAP 言語に対応する言語コード。
クライアントコード	SAP クライアント番号。

SAP テーブル接続のプロパティ

SAP テーブルデータを処理するには、[SAP テーブルコネクタ] 接続タイプを選択し、接続プロパティを設定します。

次の表に、SAP テーブル接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	SAP テーブルにアクセスする際に使用する Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
ユーザー名	適切なユーザー権限が付与された SAP ユーザー名。
パスワード	SAP パスワード。
クライアント	SAP クライアント番号。
言語	SAP 言語に対応する言語コード。
Sapnrfc.ini パス	sapnrfc.ini ファイルへのローカルディレクトリ。 SAP テーブルに書き込むには、次のディレクトリを使用します。 <Informatica Secure Agent installation directory>/main/bin/rdtm
宛先	SAP アプリケーションサーバー用に sapnrfc.ini ファイルで指定した DEST エントリ。 宛先の大文字と小文字は区別されます。 注: 宛先にはすべて大文字を使用してください。
ポート範囲	HTTP ポート範囲。SAP テーブル接続では、指定されたポート番号と HTTP プロトコルを使用して、SAP テーブルに接続します。接続エラーにならないように、有効な数値を指定したことを確認します。デフォルト: 10000-65535 デフォルトの範囲内の範囲、例えば、「10000-20000」のように入力します。範囲がデフォルトの範囲外の場合、接続はデフォルトの範囲を使用します。
ストリーミングのテスト	接続をテストします。選択すると、RFC と HTTP プロトコルの両方を使用して、接続をテストします。選択しない場合は、HTTP プロトコルを使用して接続をテストします。
HTTPS 接続	選択すると、HTTPS プロトコル経由で SAP に接続します。HTTPS 経由で正常に SAP に接続するため、管理者が Secure Agent と SAP システムをホストするマシンを設定したことを確認します。
キーストアの場所	JKS キーストアファイルの絶対パス。
キーストアのパスワード	.JKS ファイルに指定されている接続先パスワード。
プライベートキーのパスワード	.P12 ファイルに指定されているエクスポートパスワード。

SuccessFactors ODATA 接続のプロパティ

SuccessFactors ODATA 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、SuccessFactors ODATA 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続に固有の名前を入力します。
説明	接続に関連する説明を入力します。
タイプ	一覧から SuccessFactors ODATA を選択します。
ユーザー名	オプション。ユーザー名を入力します。例えば、「username@companyID」と入力します。
パスワード	オプション。パスワードを入力します。
URL	SuccessFactors サービスのルート URL。例えば、 https://apisalesdemo8.successfactors.com/odata/v2 と入力します。
セキュリティタイプ	SuccessFactors サーバーとの間にセキュアな接続を確立するために使用できるセキュリティプロトコル。SSL または TLS を選択します。デフォルトは [なし] です。
トラストストアファイル名	セキュリティタイプを選択する場合、必須です。 SuccessFactors サーバーの公開証明書が含まれるトラストストアファイルの名前。 デフォルトは、infa_truststore.jks です。
TrustStore のパスワード	セキュリティタイプを選択する場合、必須です。 SuccessFactors サーバーの公開証明書が含まれるトラストストアファイルのパスワード。
キーストアファイル名	セキュリティタイプを選択する場合、必須です。 SuccessFactors サーバーのプライベートキーが含まれるキーストアファイルの名前。 デフォルトは、infa_truststore.jks です。
キーストアのパスワード	セキュリティタイプを選択する場合、必須です。 SuccessFactors サーバーのプライベートキーが含まれるキーストアファイルのパスワード。
認証タイプ	ユーザーを認証する方法。次のいずれかの認証タイプを選択します。 <ul style="list-style-type: none">- HTTP 基本認証。OData API への管理者アクセス権を持ち、有効なアカウントの資格情報があることが必要です。- OAuth 2.0。有効なトークンと、登録済みの OAuth 2.0 クライアントアプリケーションを指定する必要があります。
API キー	OAuth 2.0 クライアントアプリケーションを登録したときに OAuth ユーティリティが返す API キーを入力します。API キーの詳細については、SuccessFactors のマニュアルを参照してください。

接続プロパティ	説明
プライベートキー	X.509 証明書を生成したときに OAuth ユーティリティが返すプライベートキーを入力します。プライベートキーの詳細については、SuccessFactors のマニュアルを参照してください。
企業 ID	OAuth 2.0 認証を選択した場合、アカウントを SuccessFactors で作成したときに SuccessFactors が返す企業 ID を入力します。

SuccessFactors SOAP 接続のプロパティ

SuccessFactors SOAP 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、SuccessFactors SOAP 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続に固有の名前を入力します。
説明	接続に関連する説明を入力します。
タイプ	一覧から SuccessFactors SOAP を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
URL	SuccessFactors サービスのルート URL。例えば、 https://apisalesdemo8.successfactors.com/sfapi/v1/soap?wsdl と入力します。
企業 ID	所属する企業の ID を入力します。
ユーザー名	ユーザー名を入力します。
パスワード	パスワードを入力します。

Satmetrix 接続のプロパティ

Satmetrix 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Satmetrix 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Satmetrix 接続の名前。
説明	接続の説明。説明は、765 文字を超えることはできません。

接続プロパティ	説明
タイプ	接続タイプ。Satmetrix 接続を選択。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
Satmetrix URL	Secure Agent が Satmetrix API に接続するために使用する URL。 URL の形式: <i>http://<会社名>.satmetrix.com</i>
ユーザー名	Satmetrix 統合ユーザーアカウントのユーザー名。
パスワード	Satmetrix 統合ユーザーアカウントのパスワード。

ServiceNow 接続のプロパティ

ServiceNow 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、ServiceNow 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	ServiceNow インスタンスのユーザー名。
パスワード	ServiceNow インスタンスのパスワード。
エンドポイント URL	ServiceNow エンドポイントの URL。例: <i>https://dev10abc.service-now.com/</i>
インスタンスタイプ	ServiceNow インスタンスのタイプ (JSON または JSONv2)。JSONv2 を選択する必要があります。

Snowflake 接続プロパティ

Snowflake 接続を設定するときに、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Snowflake 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	Snowflake アカウントに接続するためのユーザー名を入力します。
パスワード	Snowflake アカウントに接続するためのパスワードを入力します。

接続プロパティ	説明
アカウント	Snowflake アカウントの名前を入力します。Snowflake URL では、アカウント名がドメイン内の最初のセグメントになります。例えば、123abc は https://123abc.snowflakecomputing.com のアカウント名です。
ウェアハウス	オプション。Snowflake ウェアハウス名を入力します。
ロール	ユーザーに割り当てられた Snowflake ロールを指定します。
追加の JDBC URL パラメータ	<p>以下の形式で、1 つ以上の JDBC 接続パラメータを入力します。</p> <pre><param1>=<value>&<param2>=<value>&<param3>=<value>...</pre> <p>以下に例を示します。</p> <pre>user=jon&warehouse=mywh&db=mydb&schema=public</pre> <p>Snowflake で一時テーブルを作成するために使用されるデータベースとスキーマ名をオーバーライドするには、次の形式でデータベースとスキーマ名を入力します。</p> <pre>ProcessConnDB=<DB name>&ProcessConnSchema=<schema_name></pre> <p>Okta SSO 認証を介して Snowflake にアクセスするには、次の形式で SAML 2.0 プロトコルを実装する Web ベースの IdP を入力します。</p> <pre>authenticator=https://<Your_Okta_Account_Name>.okta.com</pre> <p>注: Microsoft ADFS はサポートされていません。</p> <p>Okta 認証の設定の詳細については、次の Web サイトを参照してください： https://docs.snowflake.net/manuals/user-guide/admin-security-fed-auth-configure-snowflake.html#configuring-snowflake-to-use-federated-authentication</p>
データベース/スキーマ	<p>以下の形式でデータベース名とスキーマ名を入力します。</p> <pre><database name>/<schema name></pre> <p>注: データベース名とスキーマ名の両方を指定する必要があります。データベース名のみを指定すると、ソースオブジェクトが [ソースオブジェクトの選択] ウィンドウに表示されません。スキーマ名のみを指定すると、データを読み取るときに、無効なスキーマの例外が発生します。</p>

SugarCRM REST 接続のプロパティ

SugarCRM REST 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、SugarCRM REST 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	SugarCRM アカウントのユーザー名。

接続プロパティ	説明
パスワード	SugarCRM アカウントのパスワード。
URL	SugarCRM アカウントの URL。 以下に例を示します。 https://{subdomain}.sugarondemand.com

Tableau V2 接続のプロパティ

Tableau V2 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Tableau V2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
Tableau 製品	接続する Tableau 製品の名前。 TDE ファイルをパブリッシュするには次のいずれかの Tableau 製品を選択できます。 - Tableau デスクトップ。Secure Agent マシンに TDE ファイルを作成します。作成した TDE ファイルを Tableau デスクトップに手動でインポートできます。 - Tableau サーバー。生成した TDE ファイルを Tableau サーバーにパブリッシュします。 - Tableau Online。生成した TDE ファイルを Tableau Online にパブリッシュします。
接続 URL	TDE ファイルをパブリッシュする Tableau サーバーまたは Tableau Online の URL。 URL の形式は次のとおりです: http://<Tableau サーバーまたは Tableau Online のホスト名>:<ポート>
ユーザー名	Tableau サーバーまたは Tableau Online アカウントのユーザー名。
パスワード	Tableau サーバーまたは Tableau Online アカウントのパスワード。

接続プロパティ	説明
コンテンツ URL	TDE ファイルをパブリッシュする Tableau サーバーまたは Tableau Online 上のサイトの名前。 サイト名を入力するには Tableau 管理者にお問い合わせください。
テンプレートファイルのパス	Secure Agent による Tableau メタデータのインポート元のサンプル TDE ファイルへのパス。 テンプレートファイルパスについて、次のいずれかのオプションを入力します。 <ul style="list-style-type: none"> - TDE ファイルへの絶対パス。 - TDE ファイルのディレクトリパス。 - 空のディレクトリパス。 テンプレートファイル用に指定するパスは、ターゲット TDE ファイルのデフォルトパスになります。 注: [Tableau 製品] 接続プロパティの値として [Tableau Desktop] を選択する場合は、テンプレートファイルパスに少なくとも 1 つの .tde ファイルがあることを確認してください。 ファイルパスを指定しない場合、Secure Agent は、ターゲット TDE ファイルの次のデフォルトファイルパスを使用します: <Secure Agent インストールディレクトリ>/apps/Data_Integration_Server/<最新バージョン>/bin/rtdm。

Tableau V3 接続のプロパティ

Tableau V3 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Tableau V3 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
Tableau 製品	接続する Tableau 製品の名前。 .hyper ファイルをパブリッシュするには次のいずれかの Tableau 製品を選択できます。 Tableau デスクトップ。 Secure Agent マシンに .hyper ファイルまたは TWBX ファイルを作成します。作成したら、.hyper ファイルまたは TWBX ファイルを Tableau Desktop に手でインポートし、これらのファイルを使用して付加または上書きの操作を実行できます。 Tableau Server。 生成した .hyper ファイルを Tableau サーバーにパブリッシュします。 Tableau Online。 生成した .hyper ファイルを Tableau Online にパブリッシュします。

接続プロパティ	説明
接続 URL	.hyper ファイルのパブリッシュ先となる Tableau サーバーまたは Tableau Online の URL。URL の形式は次のとおりです: http://<Tableau サーバーまたは Tableau Online のホスト名>:<ポート> 注: このプロパティは、Tableau サーバーまたは Tableau Online の値として Tableau 製品を選択した場合に適用されます。
ユーザー名	Tableau サーバーまたは Tableau Online アカウントのユーザー名。 注: このプロパティは、Tableau サーバーまたは Tableau Online の値として Tableau 製品を選択した場合に適用されます。
パスワード	Tableau サーバーまたは Tableau Online アカウントのパスワード。 注: このプロパティは、Tableau サーバーまたは Tableau Online の値として Tableau 製品を選択した場合に適用されます。
サイト ID	.hyper ファイルのパブリッシュ先となる Tableau サーバーまたは Tableau Online 上のサイトの ID。 サイト ID を入力するには、Tableau 管理者にお問い合わせください。 注: このプロパティは、Tableau サーバーまたは Tableau Online の値として Tableau 製品を選択した場合に適用されます。
スキーマファイルのパス	Secure Agent による Tableau メタデータのインポート元のサンプル .hyper ファイルへのパス。 スキーマファイルパスについて、次のいずれかのオプションを入力します。 <ul style="list-style-type: none"> - .hyper ファイルへの絶対パス。 - .hyper ファイルへのディレクトリパス。 - 空のディレクトリパス。 .hyper ファイルを Tableau Server または Tableau Online にパブリッシュする場合は、空のディレクトリのみ指定できます。 スキーマファイルパスを指定しない場合、[オブジェクト] ターゲットプロパティでターゲットオブジェクトを選択する際に、Secure Agent は Tableau Server または Tableau Online にあるプロジェクトとデータソースを表示します。Secure Agent は、ターゲット .hyper ファイルに次のデフォルトファイルパスを使用します。 <Secure Agent のインストールディレクトリ>/apps/Data_Integration_Server/<最新バージョン>/main/bin/rdtm

Teradata 接続のプロパティ

Teradata 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Teradata 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	Teradata コネクタの名前。
説明	Teradata コネクタの説明。
タイプ	接続のタイプ。Teradata を選択します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。 Teradata コネクタには Hosted Agent を使用できません。
TDPID	Teradata データベースマシンの名前、または IP アドレス。
固執度	Teradata データベース上で最大数の操作が実行されている場合に、Teradata PT API が継続してログオンを試行する時間（単位: 時間）。 正の整数を指定します。デフォルトは 4 です。
データベース名	Teradata データベース名。 データベース名を入力しない場合、Teradata PT API はデフォルトのログインデータベース名を使用します。
コードページ	Teradata データベースに関連付けられているコードページ。 次のいずれかのコードページを選択します。 - MS Windows Latin 1。ISO 8859-1 Western European データの場合に選択します。 - UTF-8。Unicode および Unicode 以外のデータの場合に選択します。 Teradata ソースからデータの抽出を行うタスクを実行する場合、Teradata PT API 接続のコードページはその Teradata ソースのコードページと同じである必要があります。
最大セッション数	Teradata PT API が Teradata データベースとの間で確立するセッションの最大数。 ゼロ以外の正の整数を指定します。デフォルト値は 4 です。
最小セッション数	Teradata PT API ジョブを継続するために必要な Teradata PT API セッションの最大数。 1 から [最大セッション数] の値までの正の整数を指定します。デフォルトは 1 です。
スリープ	Teradata データベース上で最大数の操作が実行されている場合に、Teradata PT API がログオンを再試行する前に待機する時間（単位: 時間）。 ゼロ以外の正の整数を指定します。デフォルト値は 6 です。
データの暗号化	SQL の要求、応答およびデータの完全なセキュリティ暗号化を有効にします。 デフォルトでは無効になっています。
ブロックサイズ	Teradata PT API が Secure Agent にデータを返す際に使用するブロックの最大サイズ（単位: バイト）。 最小値は 256 です。最大値は 64,000 です。デフォルト値は 64,000 です。
認証タイプ	ユーザーを認証する方法。次のいずれかの認証タイプを選択します。 - ネイティブ。接続で指定した Teradata データベースに対してユーザー名およびパスワードを認証します。 - LDAP。外部 LDAP のディレクトリサービスに対してユーザークレデンシャルを認証します。 - KRB5。Kerberos を使用して Teradata データベースを認証します。 デフォルトはネイティブです。
Kerberos アーティファクトディレクトリ	krb5.conf および IICSTPT.keytab という名前の Kerberos コンフィギュレーションファイルを含むディレクトリ。 認証タイプとして KRB5 を選択した場合に適用されます。
メタデータの詳細 接続プロパティ	メタデータを取得するために、JDBC ドライバのオプションのプロパティを設定する値。 例: tmode=ANSI

接続プロパティ	説明
メタデータの資格の有効化	テーブル名またはカラム名として使用されている予約語を、Teradata 接続が Teradata データベースから読み取れるようにするために選択するオプション。 デフォルトでは、[メタデータの資格の有効化] チェックボックスは選択されておらず、Secure Agent は Teradata から予約語を読み取りません。
ユーザー名	データベースへのアクセスに必要な読み込みおよび書き込みデータベース権限を持つデータベースユーザー名。 認証タイプとして KRB5 を選択した場合、Kerberos ユーザー名を指定する必要があります。
パスワード	上記データベースユーザー名のパスワード。 認証タイプとして KRB5 を選択した場合、Kerberos ユーザーパスワードを指定する必要はありません。

ThoughtSpot 接続のプロパティ

ThoughtSpot 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、ThoughtSpot 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ThoughtSpot URL	ThoughtSpot アプリケーションに接続するための URL。 例: <code>http://<マシンの IP>:80</code>
ユーザー名	ThoughtSpot アカウントのユーザー名。
パスワード	ThoughtSpot アカウントのパスワード。

Twitter 接続のプロパティ

Twitter 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Twitter 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続に固有の名前を入力します。
説明	接続に関連する説明を入力します。

接続プロパティ	説明
タイプ	一覧から Twitter を選択します。
Secure Agent	一覧から該当する Secure Agent を選択します。
ユーザー名	Twitter アカウントのユーザー名を入力します。
パスワード	Twitter アカウントのパスワードを入力します。
OAuth コンシューマキー	Twitter から取得したコンシューマキーを入力します。
OAuth コンシューマシークレット	Twitter から取得したコンシューマシークレットを入力します。
OAuth アクセストークン	Twitter から取得したアクセストークンを入力します。
OAuth アクセストークンシークレット	Twitter から取得したアクセストークンシークレットを入力します。
ロギングの有効化	ロギングを有効化するチェックボックスを選択します。

UltiPro 接続のプロパティ

UltiPro 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、UltiPro 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
パスワード	UltiPro サービスアカウントのパスワード。次のいずれかのパスワードを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> - HR、給与、人材、福利厚生、または統合イベントのデータを読み取るには、サービスアカウントのパスワードを UltiPro に指定します。 - 時間管理のデータを読み取るには、Ultimate Software のサポートに関連付けられた ODataService のパスワードを指定します。
ユーザー名	UltiPro サービスアカウントのユーザー名。次のいずれかのユーザー名を指定します。 <ul style="list-style-type: none"> - HR、給与、人材、福利厚生、または統合イベントのデータを読み取るには、サービスアカウントのユーザー名を UltiPro に指定します。 - 時間管理のデータを読み取るには、Ultimate Software のサポートに関連付けられた ODataService のユーザー名を指定します。

プロパティ	説明
サービスホスト名	<p>HR、給与、人材、福利厚生、または統合イベントのモジュールからデータを読み取るための、UltiPro の組織ドメイン。</p> <p>サービスホスト名を取得するには、[UltiPro] > [メニュー] > [システム構成] > [セキュリティ] > [Web サービス] の順に移動します。</p> <p>サービスホスト名を次の形式で指定します： service\$.ultipro.com。 ここで、\$は数値です。</p> <p>時間管理のデータを読み取るには、Ultimate Software のサポートから提供されるクロックサーバーの URL を指定します。</p>
顧客 API キー	<p>HR、給与、人材、福利厚生、または統合イベントのモジュールからデータを読み取る際の、顧客 API キー。</p> <p>顧客 API キーを取得するには、[ダッシュボード] > サービスアカウントのグラフィックタイトル > [UltiPro] > [メニュー] > [管理] > [統合スタジオ] > [統合スタジオ] の順に移動します。</p>
ユーザー API キー	<p>HR、給与、人材、福利厚生、または統合イベントのモジュールからデータを読み取る際の、ユーザー API キー。</p> <p>ユーザー API キーを取得するには、[UltiPro] > [メニュー] > [管理] > [統合スタジオ] > [統合スタジオダッシュボード] > サービスアカウントのグラフィックタイトルの順に移動します。</p> <p>時間管理データを読み取るには、ユーザー API キーの値として [なし] を指定します。</p>
アプリケーションモジュール	<p>接続を通じてアクセスできるオブジェクトのタイプを決定。</p> <p>Ultipro からデータにアクセスするには、次のモジュールから選択できます。</p> <p>HR、給与、人材、および福利厚生</p> <p>HR、給与、人材、および福利厚生のオブジェクトにアクセスします。</p> <p>統合イベント</p> <p>完了したイベントの日付や時刻などの、サブスクリプション済み統合イベントを読み取るために統合イベントオブジェクトにアクセスします。</p> <p>その他</p> <p>時間管理オブジェクトにアクセスします。</p>

Web サービス V2 接続のプロパティ

Web サービス V2 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Web サービス V2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続に固有の名前を入力します。
説明	接続に関連する説明を入力します。

接続プロパティ	説明
タイプ	一覧から [Web サービス] を選択します。
Secure Agent	一覧から該当する Secure Agent を選択します。
WSDL URL	WSDL URI または URL を入力します。 注: [接続] タブの WSDL URL フィールドの長さは 500 文字まで増加しています。
ヘッダー CSV パス	header* CSV ファイルが作成される Secure Agent サーバーパスを入力します。
ボディ CSV パス	body* CSV ファイルが作成される Secure Agent サーバーパスを入力します。
エンドポイント URL	要求が出される場所である、Web サービスのエンドポイント URL を入力します。 注: [接続] タブのエンドポイント URL フィールドの長さは 500 文字まで増加しています。
認証タイプ	<p>使用可能な認証の一覧から認証のタイプを選択します。</p> <p>なし</p> <p>認証は必要ありません。</p> <p>基本認証</p> <p>基本認証が必要です。</p> <p>WSSE ユーザートークン認証</p> <p>ユーザートークン認証が必要です。</p> <p>WSSE デジタル署名認証</p> <p>SSL 証明書に基づく認証が必要です。</p>
ユーザー名	認証に必要なユーザー名を入力します。
パスワード	パスワードを入力します。
証明書パス	証明書パスは WSSE デジタル署名認証を使用する場合のみに入力します。
自動 CSV ファイル作成	「ボディ/ヘッダー CSV ファイルの自動作成」(ファイルの自動作成) または「ボディ/ヘッダー CSV ファイルの手動作成」(CSV ファイルを手動で作成) を選択します。
添付ファイルのダウンロードパス	すべてのファイルがダウンロードされる先のローカルディレクトリパスを入力します。
添付ファイルのアップロードパス	すべてのファイルがアップロードされる元のローカルディレクトリパスを入力します。
ロギングの有効化	ロギングを有効化するチェックボックスを選択します。
空タグの許可	選択すると SOAP 要求で空タグを許可します。

Workday V2 接続のプロパティ

Workday V2 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Workday V2 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
タイプ	Workday リソースにアクセスするための接続。Workday V2 を選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
認証	Workday モジュールにアクセスするユーザーに対する、Workday サービスによる認証。
ユーザー名	Workday サービスにログインするための、Workday テナントのユーザー名。 ユーザー名、またはユーザー名とテナントを「<ユーザー名>@<テナント名>」の形式で入力できます。例: jjoe@informatica_pt1 テナント名を指定しない場合、Secure Agent は、接続プロパティに指定したテナント名の値をユーザー名に内部的に付加します。
パスワード	ユーザー名に関連付けられているパスワード。
ドメイン名	アクセスするリソースが含まれる Workday ドメインの名前。
テナント名	アクセスする Workday テナントの ID。例: informatica_pt1
モジュール名	アクセスする Workday サービス。例として、Human_Resources、Financial_Management、Staffing などがあります。 例えば、Web サービスのバージョン 26.1 の利用可能なモジュールを表示するには、次のリンクを参照してください。 https://community.workday.com/custom/developer/API/index.html
バージョン	Workday から取得するサービスの、Web Service Description Language (WSDL) のバージョン。サービスでサポートされる操作のリストは、選択した WSDL のバージョンによって決まります。 サポートされるバージョンについては、次のリンクを参照してください。 https://community.workday.com/custom/developer/API/versions/index.html
カスタマイズ	Workday オブジェクトのフィールドを取得するための、標準またはカスタムの WSDL。 Workday カスタムオブジェクトフィールドを取得するには、[カスタマイズ] を選択します。デフォルトは標準の WSDL です。

Xactly 接続のプロパティ

Xactly 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Xactly 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続に固有の名前を入力します。
説明	接続に関連する説明を入力します。
タイプ	接続タイプ。一覧から Xactly を選択します。
Secure Agent	一覧から該当する Secure Agent を選択します。
ユーザー ID	Xactly ポータルにアクセスするためのユーザー ID を入力します。
PassKey	Xactly ポータルにアクセスするためのパスワードを入力します。
Xactly アプリ名	Xactly にサインインするためのアプリケーション名を指定します。
WSDL URL	WSDL URL を指定します。
エンドポイント URL	要求を送信するエンドポイント URL を入力します。
ログギングの有効化	セッションログファイルに SOAP 要求と応答を記録するために選択します。

XML ソース接続のプロパティ

XML ソース接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、XML ソース接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	XML ソース接続の名前。
説明	接続の説明。 説明は、765 文字を超えることはできません。
タイプ	接続タイプ。 一覧から XML ソースを選択します。
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
サンプル XML ファイル名	XML ファイルパスを入力。
サンプル XSD スキーマ名	XSD ファイルパスを入力。

XML ターゲット接続のプロパティ

XML ターゲット接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、XML ターゲット接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
接続名	接続の名前を入力します。
説明	接続の説明を入力します。
タイプ	一覧から XML ターゲットを選択します。
Secure Agent	一覧から Secure Agent を選択します。
サンプル XML/XSD スキーマ名	XSD ファイルパスまたは XML ファイルパスを入力します。
XML 作業ディレクトリ	XML 作業ディレクトリのファイルパスを入力します。
最終 XML ファイル名	ファイル名を含む、最終 XML ファイルパスを入力します。

注: XML ターゲットコネクタは、XML 作業ディレクトリ内に内部処理用のその他のファイルを作成します。これらは、最終 XML の生成後は、容量を節約するために削除できます。

Zendesk 接続のプロパティ

Zendesk 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Zendesk 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
Secure Agent	タスクを実行する Secure Agent。
ユーザー名	Zendesk アカウントのユーザー名。
パスワード	Zendesk アカウントのパスワード。

接続プロパティ	説明
URL	Zendesk アカウントの URL。完全な URL を指定します。 例えば、「 https://informaticabusinesssolution13.zendesk.com/api/v2 」のように指定します。
カスタムフィールド	Zendesk オブジェクトのカスタムフィールドを指定します。 Zendesk のカスタムフィールドは、次の形式を使用して指定します。ここで、FieldKey は、Zendesk のカスタムフィールドキーの値です。 <オブジェクト 1>=<フィールドキー 1>,<データ型>,<サイズ>,<フィルタ可能性>,<プライマリキー>”<フィールドキー 2>,<データ型>,<サイズ>,<フィルタ可能性>,<プライマリキー>” <オブジェクト 2>=<フィールドキー 1>,<データ型>,<サイズ>,<フィルタ可能性>,<プライマリキー>”<フィールド ID2>,<データ型>,<サイズ>,<フィルタ可能性>,<プライマリキー>” 以下に例を示します。 Organizations="support_description,String,255,true,false"; Users="fixes,String,255,true,false";age,Double,255,true,false";required,Boolean,255,true,false";select,String,255,true,false";support_description,String,255,true,false";reg_ex,String,255,true,false" 注: Tickets オブジェクトにカスタムフィールドを指定する場合は、カスタムフィールドを次の形式で指定する必要があります。Tickets="CF_<フィールドキー 1>,<データ型>,<サイズ>,<フィルタ可能性>,<プライマリキー>";CF_<フィールド ID2>,<データ型>,<サイズ>,<フィルタ可能性>,<プライマリキー>” 以下に例を示します。 Tickets="CF_360003199614,String,255,true,false";CF_360003373654,String,255,true,false"

Zuora AQuA 接続のプロパティ

Zuora AQuA 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Zuora AQuA 接続のプロパティを示します。

接続プロパティ	説明
ランタイム環境	タスクを実行するランタイム環境の名前。
エンドポイント URL	Zuora サーバーの URL。 例えば、URL を「 https://www.zuora.com/apps/api/ 」のように指定できます。
ユーザー名	Zuora アカウントのユーザー名。
パスワード	Zuora アカウントのパスワード。
エンティティ ID	複数のエンティティが単一のテナント内にある場合、特定のエンティティに接続するには、エンティティ ID を指定します。
エンティティ名	複数のエンティティが単一のテナント内にある場合、特定のエンティティに接続するには、エンティティ名を指定します。
WSDL バージョン	Zuora WSDL のバージョン番号。

接続プロパティ	説明
削除した行の取得	オプション。増分モードで、削除した行を取得します。 デフォルトは false です。
UTC オフセット	特定の場所と日付での協定世界時 (UTC) との時差。 UTC オフセット値は、lastruntime データフィルタフィールドを使用して、指定したタイムゾーンに基づいて Zuora からデータを読み取る場合に使用できます。

Zuora 接続のプロパティ

Zuora 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Zuora 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	Zuora にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
ユーザー名	Zuora ポータルログインのユーザー名。
パスワード	Zuora ポータルログインのパスワード。
WSDL URL	Zuora WSDL URL のパス。
エンドポイント URL	Zuora エンドポイント URL のパス。
UTC オフセット	特定の場所と日付での協定世界時 (UTC) との時差。 UTC オフセット値は、\$LastRuntime データフィルタフィールドを使用して、指定したタイムゾーンに基づいて Zuora からデータを読み取る場合に使用できます。 デフォルトの UTC 値は 0 です。
バッチのレコード数	Secure Agent がバッチで読み取るレコードの数。
バッチ書き込みのレコード数	Secure Agent がエンドポイントにバッチで書き込むレコードの数。デフォルトのフィールドの値は 100 です。
デバッグロガーを有効にする	SOAP 要求と応答をセッションログに出力するかどうかを決定します。

Zuora REST V2 接続のプロパティ

Zuora REST V2 接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Zuora REST V2 接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	Zuora にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
認証	【ZuoraRESTV2】 を選択します。
ベース URL	呼び出し先の REST API のエンドポイント URL。ベース URL と一緒にクエリパラメータを指定しないでください。 例: https://rest.apisandbox.zuora.com/
認証タイプ	Zuora ポータルログインへの接続に必要なユーザー認証のタイプ。コネクタが Zuora ポータルログインにログインするために使用する必要がある認証メソッドを選択します。 次の認証タイプを選択できます。 <ul style="list-style-type: none">- 基本認証- OAuth 2.0 デフォルトは OAuth 2.0 です。
ユーザー名	Zuora ポータルログインのユーザー名。【認証タイプ】として【基本認証】を選択した場合、ユーザー名を入力する必要があります。
パスワード	Zuora ポータルログインのパスワード。【認証タイプ】として【基本認証】を選択した場合、パスワードを入力する必要があります。
クライアント ID	Zuora への接続の OAuth 2.0 認証を完了するためのクライアント ID。【認証タイプ】として【OAuth 2.0】を選択した場合、クライアント ID を入力する必要があります。
クライアントシークレット	Zuora への接続の OAuth 2.0 認証を完了するためのクライアント秘密鍵。【認証タイプ】として【OAuth 2.0】を選択した場合、クライアント秘密鍵を入力する必要があります。
許可タイプ	トークンを取得するために使用される認証のタイプ。client_credentials を使用します。
エンティティ ID	複数のエンティティが単一のテナント内にある場合、特定のエンティティに接続するには、エンティティ ID を指定します。 このプロパティは、【認証タイプ】として【基本認証】を選択した場合にのみ機能します。要求メッセージエディタ内でエンティティ ID を指定することもできます。エンティティ ID を接続プロパティ内と要求メッセージエディタで指定した場合、接続プロパティで指定したエンティティ ID が優先されます。 注: 【認証タイプ】として【OAuth 2.0】を選択し、デフォルトのエンティティ ID ではないエンティティ ID を指定する場合、要求メッセージエディタ内でエンティティを指定し、接続プロパティの【エンティティ ID】フィールドは空欄にする必要があります。
Zuora API バージョン	Zuora REST V2 接続に使用する Swagger ファイル。 Zuora Swagger API V1_2017_09_06 または Zuora Swagger API V1_2018_08_23 swagger ファイルを選択できます。

Zuora マルチエンティティ接続のプロパティ

Zuora マルチエンティティ接続を作成する際には、接続プロパティを設定する必要があります。

次の表に、Zuora マルチエンティティ接続のプロパティを示します。

プロパティ	説明
ランタイム環境	Zuora にアクセスする際に使用される Secure Agent が稼働しているランタイム環境。
ユーザー名	Zuora ポータルログインのユーザー名。
パスワード	Zuora ポータルログインのパスワード。
WSDL URL	Zuora WSDL URL のパス。
エンドポイント URL	Zuora エンドポイント URL のパス。
UTC オフセット	特定の場所と日付での協定世界時 (UTC) との時差。 指定したタイムゾーンに基づいて Zuora マルチエンティティからデータを読み取るために \$LastRuntime データフィルタフィールドを使用するときに、UTC オフセット値を使用できます。 デフォルトの UTC 値は 0 です。
バッチのレコード数	Secure Agent がバッチで読み取るレコードの数。
バッチ書き込みのレコード数	Secure Agent がエンドポイントにバッチで書き込むレコードの数。デフォルトでは、フィールドの値は 100 です。
デバッグロガーを有効にする	SOAP 要求と応答をセッションログに出力するかどうかを決定します。
エンティティ ID	複数のエンティティが単一のテナント内にある場合、特定のエンティティに接続するには、エンティティ ID を指定します。
エンティティ名	複数のエンティティが単一のテナント内にある場合、特定のエンティティに接続するには、エンティティ名を指定します。

第 4 章

REST V2 接続用の Swagger ファイルの生成

REST V2 コネクタでは、接続を設定するときに、REST サービスを定義する Swagger ファイルのパスを指定する必要があります。Informatica Intelligent Cloud Services を使用すると Swagger ファイルを生成できます。

Informatica Intelligent Cloud Services は Swagger 仕様バージョン 2.0 をサポートしています。Informatica Intelligent Cloud Services で Swagger ファイルを生成する場合、同じ要求を使用して API 呼び出しをサービスに送信します。API 呼び出しをサービスに送信する権限がない場合は、API 呼び出しを送信せずに、サンプル要求とサンプル応答を使用して、Swagger ファイルを生成できます。

Swagger ファイルの作成後に変更することはできません。Swagger ファイルを変更する場合は、新しい Swagger ファイルを作成します。

Swagger ファイルの生成

REST V2 接続用の swagger ファイルは、管理者の **[Swagger ファイル]** ページから生成できます。

1. **[新規]** をクリックします。
2. swagger ファイルの名前と説明を入力します。
3. swagger の詳細を指定します。次の表は、swagger ファイルを作成する際のパラメータを示しています。

パラメータ	説明
ランタイム環境	必須。swagger ファイルの生成に使用されるランタイム環境の名前。
URL	必須。URL は、ホスト名とポート番号から構成されます。以下に例を示します。 http://localhost:8000
動詞	Web サービスで使用されている REST メソッドを選択します。サポートされているメソッドは、GET、POST、PUT、および DELETE です。
認証タイプ	必要な場合、Web サービスアプリケーションにログインする際の認証方式を選択します。デフォルトは [なし] です。

パラメータ	説明
API の基本パス	API が動作するパス。基本パスはホスト名とポートの後に指定します。例えば、REST Web サービス URL が <code>http://localhost:8000/greetings/hello?Status=GoodMorning</code> の場合、基本パスは <code>/greetings</code> になります。
API のパス	<p>基本パスの後に指定するパスが、API のパスです。例えば、REST Web サービス URL が <code>http://localhost:8000/greetings/hello?Status=GoodMorning</code> の場合、API パスは <code>/hello?Status=GoodMorning</code> になります。</p> <p>パスパラメータを定義するには、変数として処理されるように中括弧 <code>{}</code> でパスを囲みます。</p> <p>例えば、REST Web サービス URL が <code>https://localhost:8080/sample/Stringoperation/concat/str1/str2?id=123</code> で、<code>concat</code> がこのパスの変数の場合、API パスは次のように定義します。</p> <p><code>Stringoperation/{concat}/str1/str2?id=123</code></p> <p>パスパラメータの数を定義できます。</p> <p>注: [API のパス] には、クエリパラメータを指定できます。[API のパス] でクエリパラメータを定義する場合は、[クエリパラメータ] フィールドでクエリパラメータを指定しないでください。</p>
ユーザー名	Web サービスアプリケーションにログインするユーザーの名前。 認証タイプが [基本] および [ダイジェスト] の場合に必要です。
パスワード	ユーザー名に関連付けられるパスワード。 認証タイプが [基本] および [ダイジェスト] の場合に必要です。
トークン	Web サービスアプリケーションに接続するためのアクセストークン。 認証タイプが [OAuth] の場合にのみ必要です。
トークンシークレット	OAuth トークンに関連付けられるパスワード。 認証タイプが [OAuth] の場合に必要です。
コンシューマキー	Web サービスアプリケーションに関連付けられるクライアントキー。 認証タイプが [OAuth] の場合に必要です。
コンシューマシークレット	Web サービスアプリケーションに接続するためのクライアントパスワード。 認証タイプが [OAuth] の場合にのみ必要です。
承認	MIME タイプを選択します。
ヘッダー	JSON 形式のヘッダーパラメータを定義します。例えば、 <code>{"Accept-Charset":"utf-8"}</code> のように指定します。
クエリパラメータ	<p>JSON 形式のクエリパラメータを指定します。例えば、<code>{"name":"subject","description":"The subject to be greeted."}</code> のように指定します。</p> <p>[クエリパラメータ] フィールドでクエリパラメータを定義すると、Swagger 仕様ファイルの入力パラメータとしてクエリパラメータが追加されます。</p> <p>[クエリパラメータ] でクエリパラメータを定義する場合は、[API のパス] フィールドでクエリパラメータを指定しないでください。</p>
操作 ID	必須。API のパスの一意のテキスト識別子。

パラメータ	説明
コンテンツタイプ	MIME タイプを選択します。
生データ本文	該当する場合は、要求の本文コンテンツを入力します。
JSON 応答ファイル	オプション。JSON 応答ファイルから swagger ファイルを生成する場合は、この応答ファイルを上ロードします。JSON 応答ファイルを選択した場合は、REST エンドポイントへの呼び出しが行われません。 JSON 応答ファイルを選択しない場合は、REST エンドポイントへの呼び出しが行われ、swagger ファイル生成用の応答を取得します。

注: REST V2 コネクタによってサポートされる swagger 定義オブジェクトとフィールドの詳細については、REST V2 コネクタのドキュメントを参照してください。

4. **【保存】** をクリックして swagger ファイルを生成します。swagger ファイルのエントリは **【Swagger ファイル】** ページに表示されます。

Web サービスへの接続中にエラーが発生すると、Web サービスから取得した障害応答が **【Swagger ファイル】** ページに記録されます。

5. ダウンロードアイコンをクリックして Swagger ファイルをローカルディレクトリに保存します。

REST V2 接続で swagger ファイルを使用するには、REST V2 接続が作成される Secure Agent システムにこのファイルをコピーします。

索引

A

Adobe Cloud Platform
接続プロパティ [16](#)
Amazon Aurora
接続プロパティ [22](#)
Amazon DynamoDB
接続プロパティ [23](#)
Amazon Redshift
接続プロパティ [23](#)
Amazon Redshift V2
接続プロパティ [24](#)
Amazon S3
接続プロパティ [26](#)
Amazon S3 V2
接続プロパティ [27](#)
Anaplan V2
接続プロパティ [29](#)
Ariba
接続プロパティ [30](#)
AS2
プロパティ [31](#)
Azure Data Lake Store Gen2
接続プロパティ [101](#)

B

BigMachines
接続プロパティ [35](#)
Birst
接続プロパティ [36](#)
Birst Cloud 接続
接続プロパティ [36](#)
Box
接続プロパティ [37](#)
Box Oauth
接続プロパティ [38](#)

C

CallidusCloud Badgeville
接続プロパティ [39](#)
CallidusCloud Commissions
接続プロパティ [39](#)
CallidusCloud File Processor
接続プロパティ [40](#)
Cassandra 接続
プロパティ [42](#)
Chatter
接続プロパティ [43](#)
Cloud Application Integration コミュニティ
URL [8](#)
Cloud 開発者コミュニティ
URL [8](#)

CMMS MVP Plant
接続プロパティ [44](#)
Concur V2
接続プロパティ [44](#)
Cosmos DB URI [99](#)
Couchbase 接続
プロパティ [46](#)
Coupa
接続プロパティ [45](#)
Coupa V2
接続プロパティ [45](#)
Cvent
接続プロパティ [48](#)

D

Db2 for i CDC
接続プロパティ [48](#)
Db2 for LUW CDC
接続プロパティ [51](#)
DB2 for z/OS CDC
接続プロパティ [53](#)
Domo 接続
プロパティ [57](#)
Doxee
接続プロパティ [59](#)
Dropbox
接続プロパティ [57](#)

E

Eloqua
接続プロパティ [60](#)
Eloqua Bulk API
接続プロパティ [61](#)
Eloqua REST
接続プロパティ [62](#)

F

File List
接続プロパティ [59](#)
File Processor
接続プロパティ [64](#)
FileIO
接続プロパティ [63](#)
FTP/SFTP
接続プロパティ [68](#)
FTP/SFTP 接続
リモートディレクトリ [67](#)
ルールおよびガイドライン [69](#)
ローカルディレクトリ [67](#)
概要 [67](#)

G

Google Analytics
接続プロパティ [69](#)
Google BigQuery
接続プロパティ [70](#), [76](#)
Google Cloud Spanner
接続プロパティ [82](#)
Google Cloud Storage
接続プロパティ [82](#)
Google Cloud Storage V2
接続プロパティ [83](#)
Google Drive
接続プロパティ [84](#)
Google Sheets
接続プロパティ [84](#)
Greenplum
接続プロパティ [85](#)

H

Hadoop ファイル
接続プロパティ [86](#)
Hadoop ファイル V2
接続プロパティ [88](#)
Hive
接続プロパティ [90](#)

I

Informatica Intelligent Cloud Services
Web サイト [8](#)
Informatica グローバルカスタマサポート
連絡先情報 [9](#)

J

JD Edwards EnterpriseOne
接続プロパティ [92](#)
JDBC
接続プロパティ [91](#)
JIRA
接続プロパティ [93](#)
JIRA Cloud 接続 [93](#)
JSON Target 接続
プロパティ [94](#)

L

LDAP
接続プロパティ [94](#)
Litmos
接続プロパティ [95](#)

M

Marketo V3
接続プロパティ [96](#)
Microsoft Access
接続プロパティ [97](#)
Microsoft Azure Blob ストレージ
接続プロパティ [97](#)

Microsoft Azure Blob ストレージ V2
接続プロパティ [98](#)
Microsoft Azure Blob ストレージ V3
接続プロパティ [98](#)
Microsoft Azure Data Lake Store
接続プロパティ [99](#)
Microsoft Azure Data Lake Store V2
接続プロパティ [100](#)
Microsoft Azure Data Lake Store V3
接続プロパティ [101](#)
Microsoft Azure SQL Data Warehouse
接続プロパティ [102](#)
Microsoft Azure SQL Data Warehouse V2
接続プロパティ [103](#)
Microsoft Azure SQL Data Warehouse V3
接続プロパティ [104](#)
Microsoft Dynamics 365 for Sales コネクタ
接続プロパティ [107](#)
Microsoft Dynamics AX V3
接続プロパティ [104](#)
Microsoft Dynamics AX V3 接続
プロパティ [104](#)
Microsoft Dynamics CRM 接続
接続プロパティ [105](#)
Microsoft Dynamics NAV
接続プロパティ [106](#)
Microsoft Excel
接続プロパティ [108](#)
Microsoft SharePoint
接続プロパティ [109](#)
Microsoft Sharepoint Online
接続プロパティ [110](#)
Microsoft SQL Server
接続プロパティ [113](#)
Microsoft SQL Server CDC
接続プロパティ [111](#)
Microsoft TFS
接続プロパティ [115](#)
MongoDB 接続
プロパティ [116](#)
MVP Plant
接続プロパティ [118](#)
MySQL
接続プロパティ [121](#)
MySQL CDC
接続プロパティ [118](#)

N

Netezza
接続プロパティ [123](#)
NetSuite
接続プロパティ [124](#), [127](#)
NetSuite RESTlet 接続
プロパティ [128](#)
NetSuite アカウント ID [128](#)

O

OData
接続プロパティ [129](#)
OData コンシューマ
接続プロパティ [130](#)
ODBC
接続プロパティ [131](#)

OpenAir
 接続プロパティ [133](#)
Oracle
 接続プロパティ [134](#)
Oracle CDC
 接続プロパティ [136](#), [139](#)
Oracle CRM Cloud V1
 接続プロパティ [141](#)
Oracle CRM On Demand
 接続プロパティ [142](#)
Oracle E-Business Suite
 接続プロパティ [142](#)
Oracle E-Business Suite インタフェース
 接続プロパティ [143](#)
Oracle Financials Cloud
 接続プロパティ [144](#)
Oracle Financials Cloud V1
 接続プロパティ [146](#)
Oracle HCM Cloud
 接続プロパティ [150](#)
Oracle HCM Cloud V1
 接続プロパティ [148](#), [152](#)
OrangeHRM
 接続プロパティ [154](#)

P

PostgreSQL
 接続プロパティ [155](#)
Power BI
 接続プロパティ [156](#)

Q

Qlik
 接続プロパティ [157](#)

R

REST V2
 接続プロパティ [157](#)
REST v2 接続
 Swagger ファイルの生成 [187](#)
REST ドメイン [128](#)

S

Salesforce
 接続プロパティ [160](#)
Salesforce Analytics
 接続プロパティ [160](#)
Salesforce Marketing Cloud
 接続プロパティ [161](#)
SAP BW BEx クエリ接続
 プロパティ [162](#)
SAP BW Reader
 接続プロパティ [163](#)
SAP IDoc Reader
 接続プロパティ [165](#)
SAP IDoc Writer
 接続プロパティ [165](#)
SAP RFC/BAPI インタフェース
 接続プロパティ [166](#)

SAP テーブル
 接続プロパティ [167](#)
Satmetrix
 接続プロパティ [169](#)
ServiceNow
 接続プロパティ [170](#)
Snowflake
 接続プロパティ [170](#)
SuccessFactors コネクタ
 接続プロパティ [169](#)
SugarCRM REST
 接続プロパティ [171](#)
Swagger ファイル
 生成 [187](#)
Swagger ファイルの生成 [187](#)

T

Tableau V2
 接続プロパティ [172](#)
Tableau V3
 接続プロパティ [173](#)
Teradata 接続
 接続プロパティ [174](#)
ThoughtSpot
 接続プロパティ [176](#)
Twitter
 接続プロパティ [176](#)

U

UltiPro
 接続プロパティ [177](#)

W

Web サービス V2
 接続プロパティ [178](#)
Web サイト [8](#)
Workday V2
 接続プロパティ [180](#)

X

Xactly
 接続プロパティ [181](#)
XML ソース
 接続プロパティ [181](#)
XML ターゲット
 接続プロパティ [182](#)

Z

Zendesk
 接続プロパティ [182](#)
Zuora
 接続プロパティ [184](#)
Zuora AQuA
 接続プロパティ [183](#)
Zuora REST V2
 接続プロパティ [185](#)
Zuora マルチエンティティ
 接続プロパティ [186](#)

あ

アップグレード通知 [9](#)
アドオンコネクタ
インストール [11](#)
構築 [11](#)
目的 [11](#)

か

カスタム NetSuite フィールド [124](#)

し

システムステータス [9](#)

す

ステータス
Informatica Intelligent Cloud Services [9](#)

せ

セキュリティトークン [127](#)

て

データベース [99](#)

と

トークンベースの認証
コンシューマキー [128](#)
コンシューマシークレット [128](#)
パスワード [128](#)
ユーザー名 [128](#)

ふ

フラットファイル
接続プロパティ [66](#)

め

メンテナンスの停止 [9](#)